630
F

630-8
1200501540830

24. 9. 17

630
8

297

新潮文庫

第五十四編

凡平

二葉亭四迷著

新潮社出版

平凡

二葉亭四迷著

新潮文庫

—54—

新潮社出版

630-8

一

私は今年三十九になる。人世五十が通相場なら、まだ今日明日穴へ入らうとも思はぬが、しかし未來は長いやうでも短いものだ。過去つて了へば實に呆氣ない。まだ〳〵と云つてる中にいつしか此世の隙が明いて、もうおさらばといふ時節が來る。其時になつて幾ら足掻いたつて藻掻いたつて追附かない。覺悟をするなら今の中だ。

いや、しかし私も老込んだ。三十九には老込みやうがチト早過ぎるといふ人も有らうが、氣の持方は年よりも老けた方が好い。それだと無難だ。

如何して此樣な老人じみた心持になつたものか知らぬが、强ち苦勞をして來た所爲では有るまい。私位の苦勞は誰でもしてゐる。尤も苦勞して一向苦勞に負げぬ何時迄も元氣な人もある。或は苦勞が上辷りをして心に浸みないやうに、何時迄も稚氣の失せぬお坊さん質の人もあるが、大抵は皆私のやうに苦勞に負げて、年よりは老込んで、意久地なく所帶染みて了ひ、役所の歸りに鮭を二切竹の皮に包むで提げて來る氣になる、それが普通だと、まあ、思つて自ら慰めてゐる。

もう斯うなると前途が見え透く。もう如何樣に藻掻いたとて駄目だと思ふ。殘念と思はぬではないが、思つたとて仕方がない。それよりは其隙で內職の賃譯の一枚も餘計にして、もう、これ、冬が近

いから、家内中に綿入れの一枚も引張らせる算段を爲なければならぬ。

もう私は大した慾もない。どうか悴が中學を卒業する迄首尾よく役所を勤めて居たい、其迄に小金の少しも溜めて、いつ何時私に如何な事が有つても、妻子が路頭に迷はぬ程にして置きたいと思ふだけだが、それが果して出來るものやら、出來ぬものやら、甚だ覺束ないので心細い……

が、考へると、昔は斯うではなかつた。人並に血氣は壯だつたから、我より先に生れた者が、十年二十年世の鹽を踏むと、百人が九十九人まで、皆じめ〳〵と所帶染みて了ふのを見て、意久地の無い奴等だ。そんな平凡な生活をする位なら、寧そ首でも縊つて死ン了へ、などと蔭では嘲けつたものだつたが、嘲けつてゐる中に、自分もいつしか所帶染みて、人に嘲けられる身の上になつて了つた。

かうなつて見ると、浮世は夢の如しとは能く言つたものだと熟々思ふ。成程人の一生は夢で、而も夢中に夢とは思はない、覺めて後其と氣が附く。氣が附いた時には、夢はもう我を去つて、千里萬里を相隔てゝゐる。もう如何する事も出來ぬ。

もう十年早く氣が附いたらとは誰しも思ふ所だらうが、皆判で捺したやうに、十年後れて氣が附く。人生は斯うしたものだから、今私共を嗤ふ青年達も、軈ては矢張り同じ樣に、後の青年達に嗤はれて、殘念がつて穴に入る事だらうと思ふと、私は何となく人間といふものが、果敢ないやうな、味氣ないやうな、妙な氣がして、泣きたくなる……

あッ、はッ、は！……いや、しかし、私も老込んだ。こんな愚癡が出る所を見ると、愈々老込んだに違ひない。

二

老込んだ證據には、近頃は少し暇だと直ぐ過去を憶出す。いや憶出しても一向憶出し榮のせぬ過去で、何一つ仕出來した事もない、どころぢやない、皆碌でもない事ばかりだ。が、それでゐて、其失敗の過去が、私に取つては何處か床しい處がある、後悔慚愧腸を斷つ想が有りながら、それでゐて何となく心を惹附けられる。

日曜に妻子を親類へ無沙汰見舞に遣つた跡で、長火鉢の側で徒然としてゐると、半生の悔しかつた事、悲しかつた事、乃至嬉しかつた事が、翫具のカレードスコープを見るやうに、紛々と目まぐるしく心の上面を過ぎて行く。初めは面白半分に目を瞑つて之に對つてゐる中に、いつしか魂が藻脫けて其中へ紛れ込んだやうに、恍惚として暫く夢現の境を迷つてゐると、

「今日は！　梅屋でございます！」

と、ツイ障子一重其處の臺所口で、頓狂な酒屋の御用の聲がする、これで、私は夢の覺めたやうな面になる。で、ぼやけた聲で、

「まづ好かつたよ。」

酒屋の御用を逐返してから、おゝ、斯うしてもゐられん、と獨言を言つて、机を持出して、生計の足しの安飜譯を始める。外國の貯蓄銀行の條例か何ぞに、絞つたら水の出さうな頭を散々惱ませつゝ、一枚二枚は餘所目を振らず一心に筆を運ぶが、其中に曖昧な處に出會してグッと詰ると、まづ一服と舊式の煙管を取上げる。と、又忽然として懷かしい昔が眼前に浮ぶから、不覺其に現を脫かし、肝腎の飜譯がお留守になつて、晩迄に二十枚は仕上げる積の所を、十枚も出來ぬ事が折々ある。

かうどうも昔ばかり憶出してゐた日には、內職の邪魔になるばかりで、卑しいやうだが、錢にならぬ。寧そのくされ、思ふ存分書いて見ようか、と思つたのは先達ての事だつたが、其後——矢張り書く時節が到來したのだ——內職の賃譯が弗と途切れた。此暇を遊んで暮すは勿體ない。私は兎に角書いて見よう。

實は、極く內々の話だが、今でこそ私は腰辨當と人の數にも算ぞへられぬ果敢ない身の上だが、昔は是でも何の某といや、或るサークルでは一寸名の知れた文士だつた。流石に今でも文壇に昔馴染が無いでもない。恥を忍んで泣附いて行つたら、隨分一肩入れて、原稿を何處かの本屋へ嫁けて、若干かに仕て呉れる人が無いとは限らぬ。さうすりや、今年の暮は去年のやうな事もあるまい。何も可愛い妻子の爲だ。私は兎に角書いて見よう。

さて、題だが……題は何としよう？　此奴には昔から附倦んだものだッけ……と思案の末、礒と膝を拊つて、平凡！　平凡に限る。平凡な者が平凡な筆で平凡な半生を叙するに、平凡といふ題は動かぬ所だ、と題が極る。

次には書方だが、これは工夫するがものはない。近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の經驗した愚にも附かぬ事を、聊かも技巧を加へず、有の儘に、だら〳〵と、牛の涎のやうに書くのが流行るさうだ。好い事が流行る。私も矢張り其で行く。

で、題は「平凡」、書方は牛の涎。

さあ、是からが本文だが、此處らで回を改めたが好からうと思ふ。

三

私は地方生れだ。戸籍を並べても仕方がないから、唯某縣の某市として置く。其處で生れて其處で育つたのだ。

子供の時分の事は最う大抵忘れて了つたが、不思議なもので覺えてゐる事だと、判然と昨日の事のやうに想はれる事もある。中にも是ばかりは一生目の底に染附いて忘れられまいと思ふのは十の時死別れた祖母の面だ。

今でも目を瞑ると、直ぐ顯然と目の前に浮ぶ。面長の、老人だから無論皺は寄つてゐたが、締つた口元で、段鼻で、なか〳〵上品な面相だつたが、眼が大きな眼で、女には强過る程險が有つて、古屋の——これが私の家の姓だ——古屋の隱居の眼といつたら、隨分評判の眼だつたさうだ。成程然ういへば、何か氣に入らぬ事が有つて祖母が白眼でヂロリと睨むと、子供心にも何だか無氣味だつたやうな覺えがまだ有る。

大抵の人は氣象が眼へ出ると云ふ。祖母が矢張り其だつた。全く眼色のやうな氣象で、勝氣で、鋭くて、能く何かに氣の附く、口も八丁手も八丁といふ、一口に言へば男勝り……まあ、さういつた質の人だつたさうな、——私は子供の事で一向夢中だつたが。

生長後親類などの話で聞くと、それといふが幾分か境遇の然らしめた所も有つたらしい——といふのは、早く祖父に死なれて若い時から後家を徹して來た。後家といふ者はいつの世でも兎角人に影口言はれ勝の、割の惡いものだから、勝氣の祖母はこれが悔しくて堪らない。それで、何の、女でこそあれ、と氣を張る。氣を張つて油斷をしなかつたから、一生人に後指を差されるやうな過失はなかつた代り、餘り人に愛しもされずに年を取つて了つて、父の代となつた。

父は祖母とは全で違つてゐた。如何して此人の腹に此樣な人がと怪しまれる程の好人物で、面も薩張り似てゐなかつた。大きな、笑ふと目元に小皺の寄る、豐頰した如何にも愛嬌のある圓顏で、形も

大柄だつたが、何處か圓味が有り、心も其通り角が無かつた。快活で、蟠りがなくて、話が好きで、碁が好きで、暇さへ有れば近所を打ち歩き、大きな嘘を自慢にする程の罪のない人だつた。祖父が矢張り然うであつたと云ふから、大方其氣象を受繼いだのであらう。

父は此樣な人だし、母は——私の子供の時分の母は、手拭を姉樣冠りにして襷がけで能くクレ〳〵働く人だつた。其頃の事を誰に聞いても、皆阿母さんは能く辛抱なすつたとばかりで、其他に何も言はぬから、私の記憶に殘る其時分の母は、何時迄經つても矢張り手拭を姉樣冠りにして、襷がけで能くクレ〳〵働く人で、格別如何いふ人といふ事もない。

斯ういふ家庭だつたから、自然祖母が一家の實權を握つてゐた。家內中の事一から十迄祖母の方寸に捌かれて、母は下女か何ぞの樣に逐使はれる。父も一向家事には關係しないで、形式的に相談を受ければ、好うがせう、とばかり言つてゐる。然う言つてゐないと、祖母の機嫌が惡い、面倒だ。

母方の伯父で在方で村長をしてゐた人があつた。如何したのだか、祖母とは仲惡で、死後迄餘り好くは言はなかつたが、何かの話の序に、阿母さんもお祖母さんには隨分泣かされたものだよ、と私に言つた事がある。成る程折々母が物蔭で泣いてゐると、いつも元氣な父が其時ばかりは困つた顏をして何か密々言つてゐるのを、子供心にも不審に思つた事があつたが、それが伯父の謂ふお祖母さんに泣かされてゐたのだつたかも知れぬ。

兎に角祖母は此通り氣難かし家であつたが、その氣難かし家の、死んだ後迄噂に殘る程の祖母が、如何いふものだか、私に掛ると、から意久地がなかつた。

四

何で祖母が私に掛ると、意久地が無くなるのだか、其は私には判らなかつた。が、兎に角意久地の無くなるのは事實で、評判の氣難かし家が、如何にでも私の思ふ樣になつて了ふ。

まづ何か欲しい物がある。それも無い物ねだりで、有る結構な干菓子は厭で、無い一文菓子が欲しいなどと言出して、母に强求るが、許されない。祖母に强求る、一寸澁る、首玉へ嚙り附いて、ようと二三度鼻聲で甘垂れる、と、もう祖母は海鼠の樣になつて、お由——母の名だ——彼樣に言ふもんだから、買つて來てお遣りよ、といふ。祖母の聲掛りだから、母も不承々々起つて、雨降でも私の口のお使に番傘傾げて出懸けようとする。斯うなると、流石の父も最う笑つてばかりは居られなくなつて、小言をいふ。私が泣く、祖母の機嫌が悪い。

「此樣小さい者を其樣に苛めて育てゝ、若しか俊坊の樣なことにでもなつたら、如何おしだ？　可哀さうぢやないか。」

といふのが口切で、ボツリ〳〵と始める。俊坊といふのは私の兄で、私も虛弱だつたが矢張り虛弱

で、六ツの時偸られたのださうだ。それも急性胃加答兒で偸られたのだと云ふから、事に寄ると祖母が可愛がりごかしに口を愼ませなかつた祟かも知れぬ。併し虛弱な兒は大食させ附けると達者になると言はれて、然うかなと思ふ程の父だから、祖母の矛盾には氣が附かない。矢張り有觸れた然う我儘をさせ附けては位の所で切脫けようとする。祖母も其は然う思はぬでもないから、內々自分が無理だと思ふだけに激する、言葉が荒くなる。もう此上憤らせると、又三日も物を言はなかつた擧句、ぷいと家を出て在の親類へ行つた切歸らぬといふ騷も起りかねまじい氣色なので、父は默つて了ふ。母も默つて出て行く。と、もう二十分も經つと、私が兩手に豆捩を持つて雀躍して喜ぶ顏を、祖母が眺めてほくほくする事になつて了ふ。

斯うして私の小さいけれど際限の無い慾が、毎も祖母を透して遂げられる。それは子供心にも薄々了解るから、自然家內中で私の一番好なのは祖母で、お祖母さんお祖母さんと跡を慕ふ。何となく祖母を味方のやうに思つてゐるから、祖母が內に居る時は、私は散々我儘を言つて、惡たれて、仕度三昧を仕散らすが、留守だと、萎靡るのではないが、餘程溫順しくなる。

其癖私は祖母を小馬鹿にしてゐた。何となく奧底が見透されるから、祖母が何と言つたつて、些とも可怕くない。

それを又勝氣の祖母が何とも思つてゐない。反つて馬鹿にされるのが嬉しいやうに、人が來ると、

其話をして、憎い奴でございますと言つて、ほく〳〵してゐる。

兩親も其は同じ事で、散々私に惱まされながら、矢張り何とも思つてゐない。唯蔭でお祖母さんにも困ると、お祖母さんの愚癡を零すばかり。

私は何方へ廻つても、矢張り好い兒だ。

五

親馬鹿と一口に言ふけれど、親の馬鹿程有難い物はない。祖母は勿論、兩親とても決して馬鹿ではなかつたが、その馬鹿でなかつた人達が、私の爲には馬鹿になつて呉れた。勿體ないと言はずには居られない。

私に何の取得がある？　親が身の油を絞つて獲た金を、私の教育に惜氣もなく掛けて呉れたのは、私を天晴れ一人前の男に仕立てたいが爲であつたらうけれど、私は今眇たる腰辨當で、浮世の片影に潜んでゐる。私が生きてゐたとて、世に寸益もなければ、死んだとて、妻子の外に損を受ける者もない。世間から見れば有つても無くても好い餘計な人間だ。財産なり、學問なり、技能なり、何か人より餘計に持つてゐる人は、其餘計に持つてゐる物を挾んで、傲然として空嘯いても、人は皆其足下に平伏する。私のやうに何も無い者は生活に疲れて路傍に倒れて居ても、誰一人振向いて見ても呉れな

い。皆素通して匆々と行つて了ふ。偶〻立止る者が有るかと思へば、熟〻視て、金持なら、う〻、貧乏人だと云ふ、學者なら、う〻、無學な奴だと云ふ、詩人なら、う〻、俗物だと云ふ、而して匆々と行つて了ふ。平生尤も親しらしい面をして親友とか何とか云つてゐる人達でも、斯うなると寄つて集つて、手ン手ンに腹散々私の缺點を算へ立て〻、それで君は斯うなつたんだ、自業自得だ、諦め給へ諦め給へと三度回向して、彼方向いて匆々と行つて了ふ。私は斯ういふ價値の無い平凡な人間だ。それを二つとない寶のやうに、人に後指を差されて迄も愛して呉れたのは、生れて以來今日迄何萬人となく人に出會つたけれど、其中で唯祖母と父母あるばかりだ。偉い人は之を動物的の愛だとか言つて擯斥されるけれど、平凡な私の身に取つては是程難有い事はない。

若し私の親達に所謂教育が有つたら、斯うはなかつたらう。必ず、動物的の愛なんぞは何處かの隅に竊と藏つて置き、例の靈性の愛とかいふものを擔ぎ出して來て、薄氣味悪い上眼を遣つて、天から振垂つた曖昧な理想の玉を睨めながら、親の權威を笠に被ぬ面をして笠に被て、其處ン處は體裁よく私を或型へ推込まうと企らむだらう。私は子供の天性の儘に、そんなふやけた人間が、古本なんぞと首引して、道樂半分に拵へた、其癖無暗に窮屈な型なんぞへ入る事を拒むで、隙を見て逃げ出さうとする。どッこいと取捉まへて厭がる者を無理無體に、シャモを鷄籠へ推込むやうに推込む。私は型の中で出よッと藻掻く。知らん面してゐる。泣いて、喚いて、引掻いて出ようとする。知らん面してゐ

る。欺して出ようとする、其手に乗らない。百計盡きて、仕様がないと觀念して、性を矯め、情を矯め、生ながら木偶の様な生氣のない人間になつて了へば、親達は始めて滿足して、漸く善良な傾向が見えて來たと曰ふ。世間の所謂家庭教育といふものは皆是ではないか。私は幸ひにして親達が無教育無理想であつたばかりに、型に推込まれる憂目を免れて、野育ちに育つた。野育ちだから、生來具有の百の缺點を臆面もなく暴け出して、所謂教育ある人達を顰蹙せしめたけれど、其代り子供の時分は、今の様に矯飾はしなかつた。皆無教育な親達のお蔭だ。難有い事だと思ふ。眞に難有い事だと思ふ。

しかし内擴がりの外窄まりと昔から能く俗人が云ふ。哲人の深遠な道理よりも、詩人の徹底した見識よりも、平凡な私共の耳には此方が入り易い。不思議な事には、無理想の俗人の言ふ事は皆活きて聞える

私が矢張り其内擴がりの外窄まりであつた。

六

内ン中の鮑ッ貝、外へ出りや、蜆ッ貝、と友達に囃されて、私は悔しがつて能く泣いたッけが、併し全く其通りであつた。

如何いふものだか、内でお祖母さんが舐るやうにして可愛がつて呉れるが、一向嬉しくない。反つ

て蒼蠅くなつて、出るなと制める袖の下を潜つて外へ駈出す。

しかし一歩門外へ出れば、最う浮世の荒い風が吹く。子供の時分の其は、何處にも有る苛めッ兒といふ奴だ。私の近處にも其が居た。

勘ちやんと云つて、私より二ッ三ッ年上で、獅子ッ鼻の、色の眞黒けな兒だつたが、斯ういふのに限つて飢暴だ。親仁は郵便局の配達か何かで、大酒呑で、阿母はお引摺と來てゐるから、常も鍵裂だらけの着物を着て、踵の切れた冷飯草履を突掛け、片手に貧乏徳利を提げ、子供の癖に尾籠な流行歌を大聲に唱ひながら、飛んだり、跳ねたり、曲駈といふのを遣り〳〵使に行く。始終使にばかり行つても居なかつたらうが、私は勘ちやんの事を憶出すと、何故だか常も其使に行く姿を想出す。

勘ちやんは家では何も貰へぬから、人が何か持つてさへゐれば、屹度欲しがつて、率直にお呉ンなと云ふ。機嫌好く遣れば好し、厭だと頭振を振ると、顎を突出して、好いよ好いよと云ふ。薄氣味惡くなつて遣らうとするが、最う受取らない。好いよ、呉れないと云つたね、好いよと、其許りを反覆して行つて了ふ。何となく氣になるが、子供の事だ、遊びに耄けて忘れてゐると、何時の間にか勘ちやんが、使の歸りに何處かで蛇の死んだのを拾つて來て、竊と背後から忍び寄つて、卒然ピシヤリと叩き附ける。ワッと泣き聲揚げて此方は逃出す、其後姿を勘ちやんは白眼で見送つて、「態ァ見やがれ！」

私は散々此勘ちやんに苛められた。初めこそ悔しがつて武者振り附いても見たが、勘ちやんは喧嘩

の名人だ。直と足掛掛けて推倒して置いて、馬乘りに乘つてピシャ〳〵打つ。私にはお祖母さんが附いてるから、内では親にさへ滅多に打たれた事のない頭だ。その大切にせられてゐる頭を、勘ちやんは遠慮せずにピシャ〳〵打つ。

一度酷い目に遭つてから、私は勘ちやんが可怕くて可怕くてならなくなつた。勘ちやんが側へ來ると、最う私は悒々して、吳れと言はない中から持つてる物を遣り、勘ちやん、あの、賢ちやんがね、お前の事を泥棒だツて言つてたよと、餘計な事迄告口して、勉めて御機嫌を取つてゐた。斯うしてゐれば大抵は無難だが、それでも時々何の理由もなく、通りすがりに大切の頭をコツリと打つて行くこともある。

外は面白いが、勘ちやんが厭だ。と云つて、内でお祖母さんと睨めッこも詰らない。そこで、お隣のお光ちやんにお向うのお芳ちやんを呼んで來る。お光ちやんは外齒のお出額で河童のやうな兒だつたけれど、お芳ちやんは色白の鈴を張つたやうな眼で、好兒だつた。私は飯事でお芳ちやんの旦那樣になるのが大好だつた。お煙草盆のお芳ちやんが眞面目腐つて、貴方、御飯をお上ンなさいなと云ふ。アイと私が返事をする。アイぢや可笑しいわ、ウンといふンだわ、と教へられて、ぢや、ウンと言つて、可笑しくなつて、不覺笑ひ出す。此方が勘ちやんに頭を打られるより餘程面白い。それに女の兒はこましやくれてゐるから、子供でも人の家だと遠慮する。私一人威張つてゐられる。間違つて喧嘩になつても、屹度敵手が泣く。然うすればお祖母さんが謝罪つて吳れる。

女の兒と遊ぶのは無難で面白いが、しかしさう毎日も遊びに來て吳れない。すると、私は退屈するから、平地に波瀾を起して、拗てじぶくツて、大泣に泣いて、而してお祖母さんに御機嫌を取つて貰ふ。

七

……が、待てよ。何ぼ自然主義だと云つて、斯う如何もダラ〳〵と書いてゐた日には、三十九年の半生を語るに、三十九年掛るかも知れない。も少し省略らう。

で、唐突ながら、祖母は病死した。

其時の事は今に覺えてゐるが、平常の積で何心なく外から歸つて來ると、母が妙な顏をして奥から出て來て、常になく小聲で、お前は、まあ、何處へ行ツてゐたい？　お祖母さんがお亡なンなすッたよ、といふ。お亡なンなすッたよが一寸判らなかつたが、死んだのだと聞くと、吃驚すると同時に、急に何だか可怕なつて來た。無論まだ死ぬといふ事が如何な事だか能くは判らなかつたが、唯何となく斯う奥の知れぬ眞暗な穴のやうな處へ入る事のやうに思はれて、日頃から可怕がつてゐたのだが、子供も人間だから矛盾を免れない。お祖母さんが死んだのは可怕いが、その可怕い處を見たいやうな

氣もする。

で、母が來いと云ふから、跟に隨いて怕々奥へ行つて見ると、父は未だ居る醫者と何か話をしてゐたが、私の面を見るより、何處へ行つて居た、もう一足早かつたらなあ……と、何だか甚く殘念がつて、此處へ來てお祖母さんにお辭儀しろといふ。

改まつてお祖母さんにお辭儀しろと言はれた事は滅多に無いので、死ぬと變な事をするものだ、と思つて、おッかな惚り側へ行くと、小屏風を逆にした蔭に祖母が寢てゐて、面に白い布片が掛けてある、父が徐かに其を取除けると、眼を閉ぢて少し口を開いた眠つたやうな祖母の面が見える……一目見ると厭な色だと思つた。長いこと煩つてゐたから、窶れた顔は看慣れてゐたが、此樣な色になつてゐたのを見た事がない。厭に白けて、光澤がなくて、死の影に曇つてゐるから、顔中が何處となく薄暗い。もう家のお祖母さんでは無いやうな氣がする。といつて、餘處のお祖母さんでもないが、何だか其處に薄氣味の惡い區劃が出來て、此方は明るくて暖かだが、向うは薄暗くて冷たいやうで、何がなしに怕かつた。

「お辭儀をしないか。」

と父に催促されて、私は莞爾々々となつた。何故だか知らんが、莞爾々々となつて、ドサンと膝を突いて、遠方からお辭儀して、急いで次の間へ逃げて來て、矢張り莞爾々々してゐた。

其中に親類の人達が集まつて來る、お寺から坊さんが來る、其晩はお通夜で、翌日は葬式と何だか家内が混雜するのに、覩る物聞く事皆珍らしいので、私は其に紛れて何とも思はなかつたが、軈て葬式が濟んで寺から歸つて來ると、手傳の人も一人歸り二人歸りして、跡は又家の者ばかりになる。薄暗いランプの蔭でト面を合せて見ると、お祖母さんが一人足りない。あゝ、お祖母さんは先刻穴へ入つて了つたが、もう何時迄待つても歸つて來ぬのだと思ふと、急に私は悲しくなつてシク〳〵泣出した。

私の泣くのを見て母も泣いた。父も到頭泣いた。親子三人向合つて、默つて暫く泣いてゐた。

八

祖母に死別れて悲しかつたが、其頃はまだ子供だつたから、十分に人間死別の悲しみを汲分け得なかつた。その悲しみの底を割つたと思はれるのは、其後兩親に死なれた時である。

去る者日々に疎しとは一わりの道理で、私のやうな浮世の落伍者は反つて年と共に死んだ親を慕ふ心が深く、厚く、濃かになるやうだ。

去年の事だ。私は久振で展墓の爲歸省した。寺の在る處は舊は淋しい町端れで、門前の芋畠を吹く風も悲しい程だつたが、今は可なりの町並になつて居て、昔能く憩んだ事のある門脇の掛茶屋は影も

形も無くなり、其跡が Barber's Shop と白ペンキの奇拔な看板を揭げた理髮店になつてゐる。

が、寺は其反對に荒れ果てゝ、門は左程でもなかつたが、突當りの本堂も、其側の庫裏も、多年の風雨に曝されて、處々壁が落ち、下地の骨が露はれ、屋根には名も知れぬ草が生えて、甚く淋れてゐた。私は臺所口で寺男が內職に賣つてゐる樒を四五本買つて、井戸へ掛つて、釣瓶繩が腐つて切れさうになつてゐるのを心配しながら、漸く水を汲上げた。手桶片手に、樒を提げて、本堂をグルリと廻つて、後の墓地へ來て見ると、新佛が有つたと見えて、地尻に高い杉の木の下に、白張の提燈が二張ハタ〳〵と風に搖いでゐる。流石に微に覺えが有るから、確か彼の邊だと見當を附けて置いて、さて昨夜の雨でぬかる墓場道を、蹴揚の泥を厭ひ〳〵、度々下駄を取られさうになりながら、それでも迷はずに先祖代々の墓の前へ出た。

祠堂金も納めてある筈、僅ばかりでも折々の附け屆も怠らなかつた積だのに、是はまた如何な事！何時掃除した事やら、臺石は一杯に靑苔が蒸して石塔も白い痂のやうな物に蔽はれ、天邊に二處三處ペツトリと白い鳥の糞が附いてゐる。勿論木葉は堆く積つて、雜草も生えてゐたが、花立の竹筒は何處へ行つた事やら、影さへ見えなかつた。

私は掃除する方角もなく、之に對して暫く悵然としてゐた。

祖母の死後數年、父母も其跡を追うて此墓の下に埋まつてから既に幾星霜を經てゐる。墓石は戒名

も讀み難る程苔蒸して、默然として何も語らぬけれど、今來つて面りに之に對すれば、何となく生きた人と面を合せたやうな感がある。懷かしい人達が未だ達者でゐた頃の事が、夫から夫と止度なく想出されて、祖母が緣先に圓くなつて日向ぼッこをしてゐる格構、父が眼も鼻も一つにして大な嘘を爲ようとする面相、母が襷掛で張物をしてゐる姿などが、顯然と目の前に浮ぶ。

颯と風が吹いて通る。木の葉がざわ〳〵と騷ぐ。木の葉の騷ぐのとは思ひながら、澄んだ耳には、聽き覺えのある皺嗄れた聲や、快活な高聲や、低い纖弱い聲が紛々と絡み合つて、何やら切りに慌しく話してゐるやうに思はれる。一しきりして礑と其が止むと、跡は寂然となる。

と、私の心も寂然となる。その寂然となつた心の底から、ふと戀しいが勃々と湧いて出て、私は我知らず泪含むだ。あゝ、成らう事なら、此儘此墓の下へ入つて、もう浮世へは戻り度ないと思つた。

九

先刻舊友の一人が尋ねて來た。此人は今でも文壇に籍を置いてる人で、人の面さへ見れば、君ねえナチユラリーズムがねえと、グヅリ〳〵を始める人だ。

神經衰弱を標傍してゐる人だから耐らない。來ると、ニチリ〳〵と飴を食つてるやうな辯で、直と自分の噂を始める。やあ、僕の理想は多角形で光澤があるの、やあ、僕の神經は錐の樣に尖がつて來

たから、是で一つ神祕の門を突ついて見る積だのと、其樣事ばかり言ふ。でなきや、文壇の噂で人の全盛に修羅を燃し、何かしらケチを附けたかつて、君、何某のと、近頃評判の作家の名を言つて、姦通一件を聞いたかといふ。また始まつたと、うんざりしながら、いやそんな事僕は知らんと、ぶつきらぼうに言ふけれど、文士だから人の腹なんぞは分らない。人が知らんといふのに反つて調子づいて、祕密の話だよ、此場限りだよと、私が十人目の聽手かも知れぬ癖に、惡念を推して、その何某が友の何某の妻と姦通してゐる話を始める。何とかゞ如何とかして、掃溜の隅で如何とかしてゐる處を犬に吠附かれて蒼くなつて逃げたとか、何とか、その醜穢なること到底筆には上せられぬ。それも唯其丈の話で、夫だから如何といふ事もない。君、モオパッサンの捉まへどこだね、といふ位が落だ。

これで最う歸るかと思ふと、なか〳〵以て！　君ねえ、僕はねえと、また僕の事になつて、其中に世間の俗物共を眼中に措かないで、一つ思ふ存分な所を書いて見ようと思ふといふ樣な事を饒舌つて、文士で一生貧乏暮しをするのだもの、ねえ、君、責て後世にでも名を殘さなきやアと、堪らない事をいふ。ブスリ〳〵と燻るやうな氣焰を吐いて、散々人を厭がらせた揚句に、僕は君に萬斛の同情を寄せてゐる、今日は一つ忠告を試みようと思ふ、といふから、何を言ふかと思ふと、「君も然う所帶染み て了はずと、一つ奮發して、何か後世へ殘し給へ。」

こんなのは文壇でも流石に屑の方であらう。しかし不幸にして私の友人は大抵屑ばかりだ。こんな

人のこんな風袋ばかり大きくても、割れば中から鉛の天神樣が出て來るガラガラのやうな、見掛倒しの、內容に乏しい信切な忠告なんぞは、私は些とも聞き度ない。私の願は親の口から今一度、薄着して風邪をお引きでない、お腹が減いたら御飯にせうかと、詰らん、降らん、意味の無い事を聞きたいのだが……

その親達は最う此世に居ない。若し未だ生きてゐたら、私は……孝行をしたい時には親はなしと、又しても俗物は旨い事を言ふ。あゝ、嬉しいにつけ、悲しいにつけ憶ひ出すのは親の事……それにポチの事だ。

＋

ポチは言ふ迄もなく犬だ。

來年は四十だといふ、もう鬢に大分白髮も見える、汚ない髭の親仁の私が、親に繼いでは犬の事を憶ひ出すなんぞと、餘り馬鹿氣でゐてお話にならぬ——と、被仰るお方が有るかも知れんが、私に取つては、ポチは犬だが……犬以上だ。犬以上で、一寸まあ、弟……でもない、弟以上だ。何と言つたものか？……さうだ、命だ、第二の命だ。恥を言はねば理が聞こえぬといふから、私は理を聞かせる爲に敢て恥を言ふが、ポチは全く私の第二の命であつた。其癖初めを言へば、欲しくて貰つた犬では

ない、止むことを得ず……いや、矢張あれが天から授かつたと云ふのかも知れぬ。

忘れもせぬ、祖母の亡なつた翌々年の、春雨のしと〳〵と降る薄ら寒い或夜の事であつた。宵惑の私は例の通り宵の口から寢て了つて、いつ兩親は寢に就いた事やら、一向知らなかつたが、ふと目を覺すと、有明が枕元を朦朧と照して、四邊は微暗く寂然としてゐる中で、耳元近くに妙な音がする。ゴウといふかとすれば、スウと、或は高く或は低く、單調ながら拍子を取つて、宛然大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。何だらうと思つて、耳を澄してゐると、時々其音が自分と自分の單調に慣いたやうに、忽ちガアと慣れた調子を破り、凄じい、障子の紙の共鳴りのする程の音を立てゝ、勢込んで何處へか行きさうにして、忽ち物に行當つたやうに、礑と止む。と、しばらく閒寂となる——その側から、直ぐ又穩かにスウ〳〵といふ音が遠方に聞え出して、其が次第に近くなり、荒くなり、又耳元で根氣よく、ゴウ、スウ、ゴウ、スウと鳴る。

私は夜中に滅多に目を覺した事が無いから、初は甚く吃驚したが、能く研究して見ると、なに、父の鼾なので、漸と安心して、其儘再び眠らうとしたが、壯なゴウ〳〵スウ〳〵が耳に附いて中々眠附れない。仕方がないから、聞える儘に其音に聽入つてゐると、思做しで種々に聞える。或は遠雷のやうに聞え、或は浪の音のやうでもあり、又は火吹達磨が火を吹いてるやうにも思はれゝば、ゴロタ道を荷馬車が通る音のやうにも思はれる。と、ふと、書閒見た繪本の天狗が酒宴を開いてゐる所を憶ひ

出して、阿爺さんが天狗になつてお囃子を行つてるのぢやないかと思ふと、急に何だか薄氣味惡くなつて來て、私は頭からスポッと夜着を冠つて小さくなつた。けれども、天狗のお囃子は夜着の襟から潜り込んで來て、耳元に纏り附いて離れない。私は凝然と固くなつて其に耳を澄ましてゐると、何時からとなくお囃子の手が複雜で來て、合の手に遠くで幽かにキヤン〳〵といふやうな音が聞える。ゴウといふ凄じい音の時には、それに消壓されて聞えぬが、スウといふ溜息のやうな音になると、其が判然と手に取るやうに聞える。不思議に思つて益々耳を澄ましてゐると、合の手のキヤン〳〵が次第に大きく、高くなつて、遂には鼾の中を脫け出し、其とは離れはなれに、確に門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく小狗の啼き聲だ。時々咽喉でも締られるやうに、消魂しく喧々と啼き立てる其の聲尻が、軈てかぼそく悲し氣になつて、滅入るやうに遠い〳〵處へ消えて行く——かとすれば、忽ち又近くで堪え切れぬやうに啼き出して、クン〳〵と鼻を鳴らすやうな時もあり、ギヤオと欠びをするやうな時もある。

十一

私は元來動物好きで、就中犬は大好だから、近所の犬は大抵馴染だ。けれども、此樣纖弱い可愛げな聲で啼くのは一疋も無い筈だから、不思議に思つて、竊と夜着の中から首を出すと、

「如何したの？　寢られないかえ？」

と、母が寢反りを打つて此方を向いた。私は此返答は差措いて、

「あれは白ちやないねえ、阿母さん？　最と小さい狗の聲だねえ？　如何したんだらう？」

「棄狗さ」

「棄狗ッて何？」

「棄狗ッて……誰かゞ棄てッたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄てッたんだらう？」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が狗を棄てッたと、私は二三度反覆して見たが、判らない。

「如何して棄てッたンだらう？」

蒼蠅よ、などゝいふ母ではない。何處迄も對手になつて、其意味を説明して呉れて、もう晩いから默つてお寢と優しく言つて、又彼方向いて了つた。

私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるに隨れて、父の鼾が又蒼蠅く耳に附く。寢られぬ儘に、私は夜着の中で今聽いた母の説明を反覆し〳〵味つて見た。まづ何處かの飼犬

が緣の下で兒を生んだとする。小ぽけなむく〳〵したのが重なり合つて、首を擡げて、ミイ〳〵と乳房を探してゐる所へ、親犬が餘處から歸つて來て、其側へドサリと横になり、片端から抱へ込んでペロ〳〵舐ると、小さいから舌の先で他愛もなくコロ〳〵と轉がされる。轉がされては大騒ぎして起返り、又ヨチ〳〵と這ひ寄つて、ポツチリと黑い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、狼狽てチウと吸付いて、小さな兩手で揉み立て〳〵吸出すと、甘い溫かな乳汁が滾々と出て來て、咽喉へ流れ込み胸を下つて、何とも言へずお甘しい。と、腋の下からまた乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込むで來る。奪られまいとして、産毛の生えた胸を突張り大騒ぎ行つてみるが、到頭奪られて了ひ、又其處らを尋ねて、他の乳首に吸附く。其中にお腹も滿くなり、親の肌で身體も溫まつて、溶けさうな好い心持になり、不覺昏々となると、含むだ乳首が脱けさうになる。夢心地にも狼狽て又吸附いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なく昏々となつて乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない……其時忽ち暗黑から、茸々と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がヌッと出て、正體なく寢入つてゐる所を無手と引摑み、宙に釣す。驚いて目をポッチリ明き、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つて藻掻く中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息氣が塞りさうだから、出ようとするが、出られない。久らく藻掻いて居る中に、ふと足掻が自由になる。と、頸元を摘まれて、高い〳〵處からドサリと落された。うろう

ろとして其處らを視廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡しよぼたれ、怕ろしく寒くなる。身慄ひ一つして、クン〳〵と親を呼んで居るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、ヨチ〳〵と這出し、雨の夜中を唯一人、溫かな親の乳房を慕つて悲し氣に啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へか彷徨つて行つたやうだつたが、其が何時か又戻つて來て、何處を如何潜り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

十二

「阿母さん〳〵、門の中へ入つて來たやうだよ。」

と、私が何だか居堪らない樣な氣になつて又母に言掛けると、母は氣の無さゝうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか？」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつてえ……あら、彼樣に啼いてる……」

と、折柄絶入るやうに啼入る狗の聲に、私は我知らず勃然起上つたが、何だか一人では可怕いやうな氣がして、

「よう、阿母さん、行つて見ようよう！」

「本當に仕樣がない兒だねえ。」

と、口小言を言ひ〳〵、母も澁々起きて、雪洞を點けて起上つたから、私も其後に隨いて、玄關ーーと云つてもツイ次の間だが、玄關へ出た。

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、ガラリと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹込んで、雪洞の火がチラ〳〵と靡く。其時小さな鞠のやうな物が衝と軒下を飛退いたやうだつたが、軀て雪洞の火先が立直つて、一道の光がサッと戸外の暗黑を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照出した所を見ると、ツイ其處に生後まだ一箇月も經たぬ、むく〳〵と肥つた、赤ちやけた狗兒が。小指程の尻尾を千切れさうに掉立つて、此方を瞻上げてゐる。形體は私が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨が濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳から雫を滴し、ぽつちりと兩つの眼を靑貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おや〳〵、まあ、可愛らしい！……」と、母も不覺言つて了つた。

況や私は犬好だ。凝として視ては居られない。母の袖の下から首を出して、チョッ〳〵と呼んで見た。

と、左程畏れた樣子もなく、チョコ〳〵と側へ來て流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でゝ

やる私の手を、下からグイ〳〵推上げるやうにして、ベロ〳〵と舐廻し、手を吳れる積なのか、頻に圓い前足を擧げてバタ〳〵やつてゐたが、果は和りと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて堪まらない。母の面を瞻上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「阿母さん、何か遣つて。」

「遣るも好いけど、居附いて了ふと、仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來て吳れた。

早速履脫へ引入れて之を當がふと、小狗は一寸香を嗅いで、直ぐ旨さうに先づピチャ〳〵と舐出したが、汁が鼻孔へ入ると見えて、時々クシン〳〵と小さな嚏をする。忽ち汁を舐盡して、今度は飯に掛つた。他に爭ふ兄弟も無いのに、切に小言を言ひながら、ガツ〳〵と喫べ出したが、飯は未だ食慣れぬかして、兎角上顎に引附く。首を掉つて見るが、其樣な事では中々取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大藻搔きに藻搔く。

此際に私は母と談判を始めて、今晩一晩泊めて遣つてと、雪洞を持つた手に振垂る。母は一寸澁つたが、もう斯うなつては仕方がない。阿爺さんに叱られるけれど、と言ひながら、詰り棧俵法師を搜して來て、履脫の隅に敷いて遣つた——は好かつたが、其晩一晩啼き通されて　私は些とも知らなん

だが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

十三

犬嫌の父は泊めた其夜を啼明されると、うんざりして了つて、翌日は是非逐出すと言出したから、私は小狗を抱いて逃廻つて、如何しても放さなかつた。父は困つた顏をしてゐたが、併し其も一時の事で、其中に小狗も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなる。と、逐出す筈の者に、何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと父までが一緒に搜すやうになつて了つた。

父が斯うなつたのも、無論ポチを愛したからではない。唯私に羈されたのだ。私とてもポチを手放し得なかつたのは、強ちポチを愛したからではない。愛する愛さんは扨置いて、私は唯可哀さうだつたのだ。親の乳房に縋つてゐる所を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放された犬の子の運命が、子供心にも如何にも果敢なく情けないやうに思はれて、手放すに忍びなかつたのだ。

此忍びぬ心と、その忍びぬ心を破るに忍びぬ心と、二つの忍びぬ心が搦み合つた處に、ポチは旨く引掛つて、辛くも棒石塊の危ない浮世に彷徨ふ憂目を免れた。で、どうせ、それは、蜘蛛の巢だらけでは有つたらうけれど、兎も角も雨露を凌ぐに足る緣の下の孤の上で、甘くはなくとも朝夕二度の汁掛け飯に事缺かず、まづ無事に暢びりと育つた。

育つに隨れて、丸々と肥つて可愛らしかつたのが、身長に幅を取られて、ヒヨロ長くなり、面も甚くトギスになつて、一寸狐のやうな犬になつて了つた。前足を突張つて、尻をもつたてゝ、弓のやうに反つて伸をしながら、大きな口をアングリ開いて欠びをする所なぞは、誰が眼にも餘まり見とも好くもなかつたから、父は始終厭な犬だ〳〵と言つて私を厭がらせたが、私はそんな犬振りで情を二三にするやうな、そんな輕薄な心は聊かも無い。固より翫弄物にする氣で飼つたのでないから、厭な犬だと言はれる程、尙可愛ゆい。

「ねえ、阿母さん此樣な犬は何處へ行つたつて可愛がられやしないやねえ。だから家で可愛がつてるんだねえ。」

と、いつも苦笑する母を無理に味方にして、調戯ふ父と爭つた。

犬好は犬が知る。私の此心はポチにも自然と感通してゐたらしい。其證據には犬嫌ひの父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振向きもせんで行つて了ふ事がある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて眼を輝かして飛んで來る、而して母の手中に其らしい物があれば、兎のやうに跳ねて喜ぶ。が、しかし、唯其丈の事で、其時のポチは矢張犬に違ひない。

その矢張犬に違ひないポチが、私に對ふと……犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか？

……何方だか其は分らんが、兎に角互の熱情熱愛に、人畜の差別を撥無して、渾然として一如となる。一如となる。だから、今でも時々私は犬と一緒になつて此樣な事を思ふ、あゝ、儘になるなら人間の面の見えぬ處へ行つて、飯を食つて生きてたいと、

犬も屹度然う思ふに違ひないと思ふ。

十四

私は生來の朝寢坊だから、毎朝二度三度覺されても、中々起きない。優しくしてゐては際限がないので、母が最終には夜着を剝ぐ。これで流石の朝寢坊も不承々々に床を離れるが、しかし大不平だ。額で母を睨めて、津蟹が泡を吐くやうに、沸々言つてゐる。ポチは朝起だから、もう其時分には疾くに朝飯も濟んで、一切り遊んだ所だが、私の聲を聽き附けると、何處に居ても一目散に飛んで來る。

これで私の機嫌も直る。急に現金に莞爾々々となつて、急いで庭へ降りる所を、ポチが透さず泥足で飛附く。細い人蔘程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を瞻上る〻視下す。目と目と直たりと合ふ。堪まらなくなつて私が横抱に引ン抱く。ポチは抱かれながら、身を藻搔いて大暴れに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、顎を舐め、頰を舐め、舐めても〳〵舐め足らないで、悪くすると、口まで舐める。父が面を顰めて汚い〳〵と曰ふ。成程、考へて見れば、汚いやうではあるけれ

ども……しかし、私は嬉しい、止められない。如何して是が止められるもんか！　私が何も好い物を持つてゐるぢやなし、ポチも其は承知で爲る事だ。利害の念を離れて居るのだ、唯懷かしいといふ刹那の心になつて居るのだ。毎朝これでは着物が堪らないと、母は其を零すけれど、着物なんぞの汚れを厭つて、ポチの此志を無にする事が出來た話だか、話でないか、其處を一つ考へて貰ひたい。

理窟は扨置いて、この面舐めの一儀が濟むと、ポチも漸と是で氣が濟んだといふ形で、また庭先をうろ〳〵し出して、緣の下なぞを覗いて見る。と、其處に草鞋蟲の一杯依附つた古草履の片足か何ぞが有る。好い物を看附けたと言ひさうな面をして、其を咥へ出して來て、首を一つ掉ると、草履は横飛にポンと飛ぶ。透さず追蒐けて行つて、又咥へてポンと拋る。其樣な他愛もない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。

其隙に私は面を洗ふ、飯を食ふ。それが濟むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此時が一日で一番私の苦痛の時だ。ポチが跟を追ふ。うッかり出ようものなら、何處迄も何處迄も隨いて來て、逐つたつて如何したつて歸らない。こッそり出ようとしても、出掛ける時刻をチャンと知つて居て、其時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つてゐる。仕方がないから、最終には取捉まへて否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにしてゐたが、然うすると前足で格子を引搔いて、悲しい〳〵血を吐きさうな啼聲を立てゝ後を慕ひ、姿が見えなくなつても啼止まない。私もそれは同じ

想ひだ。泣出しさうな面をして、バタ〳〵と駈出し、聲の聞えない處まで來て、漸くホッとして、普通の歩調になる、而して常も心の中で反覆し〳〵此樣な事を思ふ。

「僕が居ないと淋しいもんだから、それで彼樣に跟を追ふンだ。可哀さうだなあ……僕あ學校なんぞへ行きたか無いンだけど……行かないと、阿父さんがポチを棄てッ了ふッと言ふもんだから、それでショウがないから行くンだけども……」

十五

ジャン〳〵と放課の鐘が鳴る。今迄靜かだつた校舍内が俄に騷がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して慌だしくバッ〳〵と開く。と、その狹い口から、物の恒黑な塊りがドッと廊下へ吐出され、崩れてばら〳〵の子供になり、我勝に玄關脇の昇降口を目蒐けて駈出しながら、口々に何だか喚く。只もう校舍を撼つてワーッといふ聲の中に、無數の圓い顏が默つて大きな口を開いて躍つてゐるやうで、何を喚いてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又紛々と入亂れ重なり合つて、腋の下から才槌頭が偶然と出たり、外齒へ肱が打着かつたり、靴の踵が生憎と霜燒の足を踏んだりして、上を下へと揑返した揚句にワッと門外へ押出して、東西へ散々になる。

仲善二人肩へ手を掛合つて行く前に、辨當箱をポンと拋り上げてはチョイと受けて行く頑童がある。

其隣りは往來の石塊を蹴飛ばし〳〵行く。誰だか、後刻で遊びに行くよ、と喚く、蝗を取りに行かないか、といふ聲もする。君々と呼ぶ背後で、馬鹿野郎と誰かゞ誰かを罵る。あ、痛たッ、何でい、わーい、といふ聲が譟然と入違つて、友達は皆道草を喰つてゐる中を、私一人は駈脫けるやうにして側視もせずに切々と歸つて來る。

家の横町の角迄來て擽たいやうな心持になつて、竊と其方角を觀る。果してボチが門前へ迎へに出てゐる。私を看附けるや、逸散に飛んで來て、飛附く、舐める。何だか「兄さん！」と言つたやうな氣がする。若し本包に、辨當箱に、草履袋で兩手が塞がつてゐなかつたら私は此時ボチを捉まへて何を行つたか分らないが、其が有るばかりで、如何する事も出來ない。據どころなくほた〳〵しながら頭を撫でゝ遣るだけで不承して、又歩き出す。と、ボチも忽ち身を曲らせて、横飛にヒョイと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて、私の面を看て滑稽た眼色をする。追附くと、又逃げて又其眼色をする。かうして巫山戯ながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で、「只今！」といひながら、内へ駈込んで、卒然本包を其處へ抛り出し、慌てゝ辨當箱を開けて、今日のお菜の殘り——と稱して、實は喫べたかつたのを我慢して、半分殘して來た其物をボチに遣る。其れでも足らないで、お八ッにお煎を三枚貰つたのを、責つて五枚にして貰つて、二枚は喫べて、三枚は又ボチに遣る。

夫から庭で一しきりボチと遊ぶと、母が屹度お溫習をお爲といふ。このお溫習程私の嫌ひな事はなかつたが、之をしないと、直ボチを棄てると言はれるのが辛いので、澁々内へ入つて、形の如く本を取出し、少し許りおんによご〳〵と行る。それでお終だ。餘り早いねと母がいふのを、空耳潰して、衝と外へ出て、ボチ來い、ボチ來いと呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。

これが私の日課で、ボチでなければ夜も日も明けなかつた。

十六

ボチは日增しにメキ〳〵と大きくなる。大きくはなるけれど、まだ一向に孩兒で、垣の根方に大きな穴を掘つて見たり、下駄を片足門外へ卿へ出したり、其樣惡戯ばかりして喜んでゐる。

それに非常に人懷こくて、門前を通掛りの、私のやうな犬好が、氣紛れにチョッ〳〵と呼んでも、直ともう尾を掉つて飛んで行く。況して家へ來た人だと、誰彼の見界はない、皆に喜んで飛附く、初ての人は驚いて、子供なんぞは泣出すのもある。すると、ボチは吃驚して其面を視てゐる。

人でさへ是だから同類は尙ほ戀しがる。犬が外を通りさへすれば屹度飛んで出る。喧嘩するのかと、私がハラ〳〵すれば、喧嘩はしない、唯壯に尻尾を掉つて鼻を嗅合ふ。大抵の犬は相手は子供だといふ面をして、其儘匆々と行かうとする。どつこいとボチが追蒐けて巫山戯かゝる。蒼蠅いと言はぬば

かりに、先の犬は齒を剝いて叱る。すると、ポチは驚いて耳を伏せて逃げて來る。

ポチは此樣な無邪氣な犬であつたから、友達は直出來た。

友達といふのは黑と白との二匹で、いづれもポチよりは三ッ四ッも年上であつた。歷とした家の飼ひ犬でありながら、品性の甚だ下劣な奴等で、每日々々朝から晩まで近所の掃溜を蹇り歩き、二度の食事の外の間食ばかり貪つてゐる。以前から私の家の掃溜へも能く立ち廻つて來て、馴染の犬共ではあるけれど、ポチを飼ふやうになつてからは、尙ほ頻繁に立廻つて來る。ポチの喫剩しを食ひに來るので。

ポチは大樣だから、餘處の犬が自分の食器へ首を突込んだとて、怒らない。默つて快く食はせて置く。が、他の食ふのを見て自分も食氣附く時がある　其樣な時には例の無邪氣で、うッかり側へ行つて一緒に首を突込まうとする。無論先の犬は、馳走になつてゐる身分を忘れて、大に怒つて叱附ける。すると、ポチは驚いて飛退いて、不思議さうに小首を傾げて、其ガッ〳〵と食ふのを默つて見てゐる。

父は馬鹿だと言ふけれど、馬鹿氣て見える程無邪氣なのが私は可愛ゆい。尤も後には惡友の惡感化を受けて、友達と一緒に近所の掃溜へ首を突込み、鮭の頭を舐つたり、通掛りの知らん犬と喧嘩したり、屑拾ひの風體を怪しんで押取圍んで吠附いたりした事も無いではないが、是れは皆友達を見ようみ眞似に其の尻馬に騎つて、譯も分らずに唯騷ぐので、ポチに些つとも惡意はない。であるから、獨

りの時には、矢張もとの無邪氣な人懷こい犬で、淵稽た面をして、他愛のない事ばかりして遊んでゐる。惟ふに、私等親子の愛しみを受けて、曾て痛い目に遭つた事なく、暢氣に安泰に育つたから、それで此樣に無邪氣であつたのだらうが、あゝ、想ひ出しても無念でならぬ。何故私はポチを躾けて、人を見たら皆惡魔と思ひ、一生世間を睨め附けては居させなかつたらう？　愁じ可愛がつて育てた爲に、ポチは此樣に無邪氣な犬になり、無邪氣な犬であつた爲に、遂に殘忍な刻薄な人間の手に掛つて、彼樣な非業の死を遂げたのだ。

十七

或日の事。卑しい事を言ふやうだが、其日の辨當の菜は母の手製の鰹節でんぶで、私も好きだが、ポチの大好きな物だつたから、我慢して半分以上殘したのが、チャンと辨當箱に入つてゐる。早く歸つてこれが喫させたかつたので、待憧れた放課の鐘が鳴るや、大急ぎで學校の門を出て、友達は例の通り皆道草を喰つてゐる中を、私一人は切々と歸つて來ると、俄に行手がワッと騷がしくなつて、先へ行く兒が皆雪崩れて、ドッと道端の杉垣へ片寄つたから、驚いてヒョイと向ふを見ると、ツイ四五間先を荷車が來る。瞥と見たばかりでは何の車とも分らなかつた。何でも可なり大きな箱車で、上から菰を被せてあつたやうだつたが、其を若い土方風の草鞋穿の男が、餘り重うさにもなく、匆々と引

いて來る。車に引添うてまだ一人、四十計りの、四角な面の、茸々と髭の生えた、人相の惡い、矢張草鞋穿の土方風の男が、古ぼけて茶だか鼠だか分らなくなつた、塵埃だらけの鉢卷もない帽子を阿彌陀に冠つて、手ぶらで何だか饒舌りながら來る。

道端の子供等は皆好奇の目を圓くして此怪し氣な車を見迎へ見送つて、何を言ふのか、口々に譟然と喚いてゐる中から、忽ち一段際立つて甲高な、「犬殺しだい〳〵！」といふ叫聲が其處此處から起る。と聞くより、私はハッとした。全身の血の通ひが急に一時に止つたやうな氣がして、襟元から冷りとする、足が簪蹙む……と、忽ち心臓が破裂せんばかりに鼓動し出す。「ボチは？」とい　疑問が曇つたやうな頭の中で、ちらりと電光のやうに閃いて又暗中に沒する時、ガタ〳〵と車が前を通る。

後で聞けば、菰の下から犬の尻尾とか足とかゞ見えてゐたといふけれど、私が其時佶と目を据ゑて視たのでは、唯車が躍つて菰が魂の有るやうにゆさ〳〵と搖れるのが見えたばかりで、他には何も見えなかつた。或は最う目も霞んでゐたのかも知れぬ。

「おッそろしい餓鬼だなあ！　まだ彼樣に出て來やがら……」

と太い煤けたやうな野良聲で、――確に年上の奴に違ひないが、然う言ふのが聞えた。

ガタンと一つ小石に躍つて、車は行過ぎて了ふ。

跡は兩側の子供が又續々と動き出し、四邊が大黑帽に飛白の衣服で紛々となる中で、私一人は佇立

つたまゝ、茫然として轅棒の先で子供の波を押分けて行くやうに見える車の影を見送つてゐた。

と誰だか私の側へ來て何か言ふ。顔は見覺えのある家の近所の何とかいふ兒だが、言つてる事が分らない。私は默つて其面を視た許りで、又竊と車の行つた方角を振向いて見ると、最う車は先の横町を曲つたと見えて、此方を向いて來る澤山の子供の顔が見える許りだ。

「ねえ、君、君ン所のポチも殺されたかも知れないぜ。」

といふ聲が此時ふと耳に入つて、私はハッと我に反ると、

「嘘だい！　殺されるもんか！　札が附いてるもの……」

と狼狽て打消してから、始めて木村の賢ちやんといふ兒と話をしてゐる事が分つた。

「やあ……札が附いてたつて、殺されますから。へえ。僕ン所の阿爺さんが……」

と賢ちやんが言掛けると、仲善の友の言ふ事だが、私は何だか急に口惜しくなつて、赫と急込んで、

「何でい！　大丈夫だい!!……」

と怒鳴り附けた。賢ちやんが吃驚して眼を圓くした時、私は卒然バタ〳〵と駈出し、前へ行く兒にトンと衝當る。何しやがるンだいと、其兒に突飛されて、又誰だかに衝當る。二三度彼方此方で小突かれて、蹌踉として、危うかつたのを辛と踏耐へるや、後をも見ずに、逸散に、宙を飛んで家へ歸つた。

十八

門は明放し、草履は飛び〳〵に脱棄てゝ、片足が裏返しになつたのも知らず、「阿母さん……阿母さん！」と卒然内へ喚き込んだが、母の姿は見えないで、臺所で返事がする。

誰だか來て居るやうで、話聲がしてゐるけれど、其樣な事に頓着しては居られない。學校道具を座敷の中央へ抛り出して置いて臺所へ飛んで行くなり、

「阿母さん！……ポチは？……」

と喘ぎ〳〵まづ聞いてみた。

母は默つて此方を向いた。常に滅入つたやうな蒼い面をしてゐる人だつたが、其時此方を向いた顔を見ると、微と紅くなつて、眼に潤みを持ち、どうも尋常の顏色でない。私は急に何か物に行當つたやうにうろ〳〵して、

「殺されたかい？……」

と凝と母の面を視た時には、氣息が塞りさうだつた。

母は一寸躊躇つたやうだつたが、思切つて投出すやうに、

「殺されたとさ……」

逸散に駈けて來て、ドカンと深い穴へ落ちたら、彼樣な氣がするだらうと思ふ。私は然う聞くと、ハッと内へ氣息を引いた。と、張詰めて破裂れさうになつてゐた氣がサッと退いて、何だか奥深い穴のやうな處へ滅入つて行くやうで、四邊が濛と暗くなると、母の顏が見えなくなつた……

「炭屋さんが見て來なすッたンだッさ。」

といふ聲がふと耳に入ると、クワッとまた其處らが明るくなつて眼の前に丸髷が見える。母は又彼方向いて了つたのだ。

「ぢや、木村さん處の前で殺されたんですね？」と母の聲がいふ。

「へえ、」といふ者がある。機械的に其方へ面を向けると、腰障子の蔭に、舊い馴染の炭屋の爺やの、小鼻の脇に大きな黑子のある、皺だらけの面が見えて、前齒の二本脫けた間から、チョコ〳〵舌を出して饒舌つてゐる聲が聞える。「丁度あの木村さんの前ン處なんで。手前は初めは何だと思ひました。棒を背後へ置してましたから、遠くで見たんぢや、ほら分りませんや。一寸見ると何だか土方のやうな奴で、其奴がかう手を背後へ廻しましてな、お宅の犬の寢てゐる側へ寄つてくから、はてな、何をするンだらう、と思つて見てゐますと、彼樣な人懷つこい犬だから、其奴の面を見て、何にも知らずに尻尾を掉つてましたよ。可哀さうに！　普通の者なら、何ぼ何でも其樣なにされちや、手を下せた譯合のもんぢやございません、――ね、今日人情としましても。それを、貴女……いや、どうも、あゝ

いふ手合に逢つちや敵ひませんで、卒然匿してた棒を取直して、おやッと思ふ間に、ポンと一つ鼻面を打ちました。さうするとな、お宅のは勃然起きましてな、キリ〳〵と二三遍廻つて、バタリと倒れると、仰向きになつてから四足を突張りましてな、尻尾でバタ〳〵地面を叩いたのは、あれは大方苦しがつたんでせうが、傍で見ていりや何だか喜んで尻尾を掉つたやうで、妙な黴梅しきでしたがな、其處を、貴女、またポカ〳〵と三つ四つ咽喉ン處を打ちますとな、もう其切りで、ギヤッともスウとも聲を立て得ないで、貴女……」

私はもう後は聽いてゐなかつた。誰を憚る必要もないのに竊と目立たぬやうに後方へ退つて、狐鼠狐鼠と奥へ引込んだ　ペタリと机の前へ坐つた。キリ〳〵と二三遍廻つたといふ今聞いた話が胸に浮ぶと、そのキリ〳〵と廻つたポチの姿が、顯然と目に見えるやうな氣がする、熱い涙がほろ〳〵零れる、手の甲で擦つても〳〵、止度なくほろ〳〵零れる。

十九

ポチが殺されて、私は氣脫けしたやうになつて、翌日は學校も休んだ。何も自分の罪を犯したでもないのに、何となく友達に顔を見られるのが辛くッて……

午過にポチが殺されたといふ木村といふ家の前へ行つて見た。其處か此處かと尋ねて見たけれど、

もう其らしい痕もない。私は道端に彳んで、茫然としてゐた。

炭屋の老爺やの話だと、うッかり寢轉んでゐる所を殺されたのだと云ふ。大方昨日も私の歸りを待ちかねて、此處らまで迎へに出てゐたのであらう。待草臥れて、ドタリと横になつて、角のポストの蔭から私の姿がヒョッコリ出て來はせぬかと、其方ばかり餘念なく眺めてゐる手へ、犬殺しが來たのだ。人間は皆私達親子のやうに自分を可愛がつて呉れるものと思つてゐるポチの事だから、犬殺しとは氣が附かない。何心なく其面を瞻上げて尾を掉る所を、思ひも寄らぬ太い棍棒がプンと風を截つて來て……と思ふと、又胸が一杯になる。

ヒウと悲しい音を立てゝ、空風が吹いて通る。跡からカラ〳〵に乾いた往來の中央を、砂煙が濛と力のない渦を卷いて、捩れてひよろ〳〵と行く。

私は其行方を眺めて茫然としてゐた。と、何處でかキヤン〳〵と二聲三聲犬の啼聲がする……佶と耳を引立つて見たが、もう其切で見えない。隣町あたりで凍けたやうな物賣の聲がする。

何だか今の啼聲が氣になる。ポチは殺されたのだから、もう此處らで啼いてる筈はない。餘所の犬だ〳〵、と思ひながら、何だか其儘聞流して了ふのが殘惜しくて、思はずバタバタと駈出したが、餘所の犬ぢや詰らないと思返して、又頽然となると、足の運びも自然と遲くなり、そろり〳〵と草履を引摺りながら、目的もなく小迷つて行く。

小迷つて行きながら、又ポチの事を考へてゐると、ふッと氣が變つて、何だか昨日からの事が、皆嘘らしく思はれてならぬ。私が餘りポチばかり可愛がつて勉强をしなかつたから、父が萬一したら懲しめのため、ポチを何處かへ匿したのぢやないかと思ふ。さうすると、今の啼聲は矢張ポチだつたかも知れぬと、うろ〳〵とする目の前を、土耳其帽を冠つた十德姿の何處かの　祖父さんが通る。何だか親切きうな好いお祖父さんらしいので、此人に聞いたら、偶然とポチの居處を知つてゐて、敎へて呉れるかも知れぬと思つて、凝然と其面を視ると、先も振向いて私の面を視て、莞爾して行つて了つた。

向ふから順禮の親子が來る。笈摺も古ぼけて、旅窶れのした風で、白い脚絆も埃に塗れて狐色になつてゐる。母の話で聞くと、順禮といふ者は行方知れずになつた親兄弟や何かを尋ねて、國々を經巡つて歩くものだと云ふ。此人達も其樣な事で斯うして歩いてゐるのかも知れぬ、と思ふと私も何だか此仲間へ入つて一緒にポチを探して歩きたいやうな氣がして、立止つて其の後姿を見送つてゐると、忽ち背後でガラ〳〵と雷の落懸るやうな氣がしたから、驚いて振向かうとする途端に、トンと突飛されて、私はコロ〳〵と轉がつた。

「危ねい！　往來の眞ン中を彷徨してやがつて……」とせい〳〵息を逸ませながら立止つて怒鳴り附けたのは、目の怕い車夫であつた。

車には黑い高い帽子を冠つて、溫かさうな黃ろい襟の附いた外套を被た立派な人が乘つてゐたが、私が面を顰めて起上るのを尻眼に掛けて、髭の中でニヤリと笑つて、

「鎌藏、構はずに行れ。」

「へい……本當に冷りとさせやがつた、氣を附けろ、洟垂らしめ！……」

と車夫は又トン〳〵と曳出した。

紳士は犬殺しでない。が、ポチを殺した犬殺しと此人と何だか同じやうに思はれて、クラクラと目が眩むと　私はもう無茶苦茶になつた。卒然道端の小石を拾つて打着けてやらうとしたら、車は先の横町へ曲つたと見えて、もう見えなかつた。

バタリと小石を手から落した。と、何だか急に悲しくなつて來て耐らなくなつて、往來の眞中で私は到頭シク〳〵泣出した。

二十

ポチの殺された當座は、私は食が細つて瘦せた程だつた。が、其程の悲しみも子供の育つ勢には敵はない。間もなく　私は又毎日學校へ通つて、友達を對手にキャッ〳〵とふざけて元氣よく遊ぶやうになつた……

今日は如何したのか頭が重くて薩張り書けん。徒書でもしよう。

愛は總ての存在を一にす。

愛は味ふべくして知るべからず。

愛に住すれば人生に意義あり、愛を離るれば、人生は無意義なり。

人生の外に出で、人生を望み見て、人生を思議する時、人生は遂に不可得なり。

人生に目的ありと見、なしと見る、共に理智の作用のみ。理智の眼を抉出して目的を見ざる處に、至味存す。

理想は幻影のみ。

凡人は存在の中に住す、其一生は觀念なり。詩人哲學者は存在の外に遊離す、觀念は其一生なり。

凡人は聖人の縮圖なり。

人生の眞味は思想に上らず、思想を超脱せる者は幸なり。

二十世紀の文明は思想を超脱せんとする人間の努力たるべし。

此樣な事ならまだ幾らでも列べられるだらうが、列べたつて詰らない。皆空だ。空でない事を一つ書いて置かう。

私はポチが殺された當座は、人間の顏が皆犬殺しに見えた。

是丈は本當の事だ。

二十一

小學から中學を終るまで、落第をも込めて前後十何年の間、毎日々々の學校通ひ、——考へて見れば面白くもない話だが、併し其を左程にも思はなかつた。小學校の中は、內で親に小蒼蠅く世話を燒かれるよりも、學校へ行つて友達と騷ぐ方が面白い位に思つてゐたし、中學へ移つてからも、人間は斯うしたものと合點して、何とも思はなかつた。

しかし、凡そ學科に面白いといふものは一つも無かつた。何の學科も〳〵、皆味も卒氣もない鬱憂する物ばかりだつたが、就中私の最も閉口したのは數學であつた。小學時代から然うだつたが、中學へ移つてからも、是ばかりは變らなかつた。此次は代數の時間とか、幾何の時間とかなると、もう其が胸に支へて、溜息が出て、何となく世の中が悲觀された。

算術は四則だけは如何やら斯うやら了解めたが、整數分數となると大分怪しくなつて、正比例で一寸息を吐く。が、其お隣の反比例から又亡羊し出して、按分比例で途方に暮れ、開平開立求積となると、何が何だか無茶苦茶になつて、詰り算術の長の道中を浮の空で通して了つたが、代數も矢張り其

通り。一次方程式、二次方程式、簡單なのは如何にかなつても、少し複雜のになると、AとBとが紛糾かつて、何時迄經つてもXに膠着いてゐて離れない。況や不整方程式には、頭も亂次になり、無理方程式を無理に强附けられてはげんなりして、便所へ立つてホッと一息吐く。代數も判らなかつたが幾何や三角術は尙判らなかつた。初の中は全く相合せ得る物の大さは相等しなどと眞顏で敎へられて、馬鹿扱にするのかと不平だつたが、其中に切賣の西瓜のやうな弓月形や、二枚屛風を開いたやうな二面角が出て來て、大きなお供に小さいお供が附着いてヤッサモッサを始める段になると、もう氣が逆上ッて了ひ、丸呑にさせられたギゴチない定義や定理が、頭の中でしやちこばつて、其心持の惡いこと一通りでない。試驗が濟むと、早速咽喉へ指を突込んで溜飲の黃水と一緒に吐出せるものなら、吐出して了つて淸々したくなる。

何の因果で此樣な可厭な想をさせられる事か、其は薩張分らないが、此可厭な想を忍ばなければ、學年試驗に及第させて貰へない。學年試驗に及第が出來ぬと、最終の目的物の卒業證書が貰へないから、それで誠に止むことを得ず、眼を閉つて毒を飲む氣で辛抱した。

尤も是は數學ばかりでない。何の學科も皆多少とも此氣味がある。味はつて樂むなどいふのは一つもない、又樂んでゐる暇もない。後から〳〵と他の學科が急立てるから、狼狽て〻片端から及第のお呪ひの御符の積で鵜呑にして、而して試驗が濟むと、直ぐ吐出してケロリと忘れて了ふ。

二十二

今になつて考へて見ると、無意味だつた。何の爲に學校へ通つたのかと聞かれゝば、試驗の爲にといふより外はない。全く其頃の私の眼中には試驗の外に何物も無かつた。試驗の爲に勉强し、試驗の成績に一喜一憂し、如何な事でも試驗に關係の無い事なら、如何なとなれと餘所を見て、生命の殆ど全部を擧げて試驗の上に繫けてゐたから、若し其頃の私の生涯から試驗といふものを取去つたら、跡は他愛のない煙のやうな物になつて了ふ。

これは、しかし、私ばかりといふではなかつた。級友といふ級友が皆然うで、平生の勉强家は勿論、金箔附の不勉强家も、試驗の時だけは、言合せたやうに、一色に血眼になつて……鵜の眞似をやる、丸呑に呑込めるだけ無暗に呑込む。尤も此連中は流石に平生を省みて、敢て多くを望まない、責めて及第點だけは欲しいが、貰へようかと心配する、而して常に事每に敎師に抵抗して靑年の意氣の壯なるを誇つてゐたのが、如何した機でか急に殊勝氣を起し、敬禮も成るだけ氣を附けて丁寧にするやうにして、それでも尙ほ危險を感ずると、運動と稱して、敎師の私宅へ推懸けて行つて、哀れッぽい事を言つて來る。

私は我儘者の常として、見榮坊の、負嫌だつたから、平生も餘り不勉强の方ではなかつた。無論學

科が面白くも何ともない、學科は何時迄經つても面白くも何ともないが、譬へば競馬へ引出された馬のやうなもので、同じやうな青年と一つ埒内に鼻を列べて見ると、負けるのが可厭でいきり出す、矢鱈に無上にいきり出す。

平生さへ然うだつたから、況や試驗となると、宛然の狂人になつて、手拭を捻つて向鉢卷ばかりでは間怠ッこい、氷嚢を頭へ載けて、其上から頰冠りをして、夜の目も眠ずに、例の鵜呑をやる。又鵜呑で大抵間に合ふ。間に合はんのは作文に數學位のものだが、作文は小學時代から得意の科目で、是は心配はない。心配なのは數學の奴だが、それをも無理に狼狽てた鵜呑式で押徹さうとする、又不思議と或程度迄は押徹される。尤も是はかね合もので、そのかね合を外すと、落こちる。私も未だ試驗慣れのせぬ中、ふと其かね合を外して落こちた時には、親の手前、學友の手前、流石に面目なかつたから、少し學校にも厭氣が差して、其時だけは一寸學校教育なんぞを齷齪して受けるのが、何となく馬鹿氣た事のやうに思はれた。が、世間を見渡すと、皆此無意味な馬鹿氣た事を平氣で懸命に行つてゐる。一人として躊躇してゐる者はない。其中で私一人其樣な事を思ふのは何だか薄氣味惡かつたから、狼狽てゝ、いや、馬鹿氣てゐるやうでも、矢張必要な事なんだらうと思直して、素知らん顔して、其からは落第の恥辱を雪がねば措かぬと發奮し、切齒して、扼腕して、果し眼になつて、又鵜の眞似を繼續して行つた。

鵜の眞似でも何でも、試驗の成績さへ良ければ、先生方も滿足せられる、内でも親達が滿足するから、私は其で好い事と思つてゐた。然うして多く學んで殆ど何も得る所がない中に、いつしか中學も卒業して、卒業式には知事さんも「諸君は今回卒業の名譽を擔うて……」といつた。内でも赤飯を焚いて、お目出度い〳〵と親達が右左から私を煽がぬ許りにして吳れた。してみれば、矢張名譽でお目出度いのに違ひないと思つて、私も大に得意になつてゐた。

二十三

中學も卒業した。さて今後は如何するといふ愈〻胸の轟く問題になつた。

まだ中學に居る頃からの宿題で、寢ても寤めても是ばかりは忘れる暇もなかつたのだが、中學を卒業してもまだ極らずに居たのだ。

極らぬのは私ではない。私は疾うに極めてゐた、無論東京へ行くと。

東京は如何な處だか人の噂に聞く許りで能くは知らなかつたが、私も地方育ちの青年だから、誰も皆思ふやうに、東京へ出て何處かの學校へ入りさへすれば、默つてゐても自然と運が向いて來て、或は海外留學を命ぜられるやうになるかも知れぬ。若し然うなつたら……と目を開いて夢を見てゐたのも昨日や今日の事でないから、何でも角でも東京へ出たいのだが、さて困つた事には、珍らしくもない

話だけれど、金の出處がない。

父は其頃縣廳の小吏であつた。薄給でかつ〳〵一家を支へてゐたので、月給だけでは私を中學へ入れる事すら覺束なかつたのだが、幸ひ親讓りの地所が少々と小さな貸家が二軒あつたので、其上りで如何にか斯うにか糊塗なつてゐたのだ。だから到底も私を東京へ遣れないといふ父の言葉に無理もないが、しかし……私は矢張東京へ出たい。

父は其頃未だ五十であつた。達者な人だけに氣も若くて、まだ〳〵十年や十五年は大丈夫生きてゐると、傍の私達も思つてゐたし、自分も其は其氣でゐた。從つて世間の親達のやうに、早く私を月給取にして、嫁を宛がつて、孫の世話でもしてゐたいなぞと、そんな氣は微塵もないが、何分にも當節は勤向が六かしくなつて、もう永くは勤まらぬといふ。成程父は教育といつても、昔の寺子屋教育ぎりで、新聞も漢語字引と首引で漸く讀み覺えたといふ人だから、今の學校出の若い者と机を列べて事務を執らされては、嘸辛い事も有らうと、其樣な事には浮の空の察しの無かつた私にも、話を聞けば能く分つて、同情が起らぬでもないが、しかし、それだからお前は縣廳へ勤めるなとして自分一人だけの事は爲て呉れと、言はれた時には情なかつた。父は然うして置いて、何ぞ他に氣骨の折れる力相應の事をして縣廳の方は辭職する、辭職しても當分はお前の世話にはなるまいと、財産相應の穩當な案を立てゝ、私の爲をも思つていふのは解つてゐるけれど、しかし私は如何しても矢張東京へ出て何

處かの學校へ入りたい。

で、親子一つ事を反覆すばかりで何日經つても話の纏まらぬ中に、同窓の何某はもう二三日前に上京したし、何某は此月末に上京するといふ話も聞く。私は氣が氣でないから、眼の色を異へて、父に逼り、果は血氣に任せて、口惜し紛れに、金がないと言はれるけれど、地面を賣れば如何にかなりさうなものだ、それとも私の將來よりも地面の方が大事なら、學資は出して貰はんでも好い、旅費だけ都合して貰ひたい、私は其で上京して苦學生になると、突飛な事を言ひ出せば、父は其樣な事には同意が出來ぬといふ、それは壓制だ、いや聞分ないといふものだと、親子顏を赤めて角芽立つ側で、母がおろ〳〵するといふ騷ぎ。

其時私の爲には頗る都合の好い事があつた。私と同期の卒業生で父も懇意にする去る家の息子が、何處のも同じ樣に東京行きを望んで、親に拒まれて、自暴を起し、或夜竊に有金を偸出して東京へ出奔すると、續いて二人程其眞似をする者が出たので、同じ樣な息子を持つた諸方の親々の大恐慌となつた。父も此一件から急に我を折つて、彼方此方の親類を駈廻つた結果、金の工面が漸く出來て、最初は甚く行惱んだ私の遊學の願も、存外難なく聽されて、遂に上京する事になつた時の嬉しさは今に忘れぬ。

二十四

愈々出發の當日となつた。待ちに待つた其日ではあるけれど、今となつては如何やら一日位は延ばしても好いやうな心持になつてゐる中に、支度はズン〳〵出來て、さて改まつて父母と別れの杯の眞似事をした時には、何だか急に胸が一杯になつて不覺ホロリとした。母は固より泣いた、快活な父すら目出度い〳〵と言ひながら、頻に咳をして涕を拭んでゐた。

誂への俥が來る。性急の父が先づ狼狽て出して、座敷中を彷徨しながら、ソレ、風呂敷包を忘れるな、行李は好いか、小さい方だぞ、コココ蝙蝠傘は己が持つてツてやる、と固より見送つて呉れる筈なので、自分も一臺の俥に乘りながら、何は載つたか、何は……ソレ、あの、何よ……と、焦心る程尙ほ想出せないで、何やら分らぬ手眞似をして獨り無上に車上で騷ぐ。

母も門口まで送つて出た。愈々俥が出ようとする時、母は悲しさうに凝と私の面を視て、「ぢや、お前ねえ、カカ身體を……」とまでは言ひ得たが、後が言へないで、涙になつた。

私は故意と附元氣の高聲で、「御機嫌よう！」と一禮すると、俥が出たから、其儘正面になつて了つたが、何だか後髮を引かれるやうで、俥が横町を出離れる時、一寸後を振向いて見たら、母はまだ門前に悄然と立つてゐた。

道々も故意と平氣な顏をして、往來を眺めながら、勉めて心を紛らしてゐる中に、馴染の町を幾つも過ぎて俥が停車場へ着いた。

まだ發車には餘程間があるのに、もう場内は一杯の人で、雜然と騷がしいので、父が又狼狽て出す。親しい友の誰彼も見送りに來て呉れた。其面を見ると、私は急に元氣づいて、例になく壯に饒舌つた。何だか皆が私の擧動に注目してゐるやうに思はれてならなかつた。無論友達は家で立際に私の泣いたことを知る筈はないから……

軈て發車の時刻になつて、汽車に乘込む。手持無沙汰な落着かぬ數分も過ぎて、汽笛が鳴る。私が窓から首を出して挨拶をする時、汽車は動き出して、父の眼をしよぼつかせた顏がチラリとして直ぐ後になる、見えなくなる。もうプラットフオオムを出離れて、白ペンキの低い柵が走る、其向ふの後向きの二階家が走る、平家が走る。片側町になつて、人や車が後へ走るのが可笑しいと、其を見てゐる中に、眼界が忽ち豁然と明くなつて田圃になつた。眼を放つて見渡すと、城下の町の一角が屋根は黑く、壁は白く、雜然と塊まつて見える向ふに、生れて以來十九年の間、毎日仰ぎ瞻たお城の天守が遙に森の中に聳えてゐる。あゝ、家は彼下だ……と思ふ時、始めて故郷を離れることの心細さが身に染みて、悄然としたが、悄然とする側から、妙に又氣が勇む。何だか籠のやうな狹隘しい處から、茫々と廣い明るい空のやうな處へ放されて飛んで行くやうで、何となく心臟の締るやうな氣もするが、又

何處か暢びりと、急に脊丈が延びたやうな氣もする。

かうした妙な心持になつて、心當に我家の方角を見てゐると、忽ち磴と物に眼界を鎖された。見ると、汽車は截割つたやうに急な土手下を行くのだ。

二十五

申し後れたが、私は法學研究のため上京するのだ。

其頃の青年に、政治ではない、政論に趣味を持たん者は幾んど無かつた。私も中學に居る頃から其が面白くて、政黨では自由黨が大の贔屓であつたから、自由黨の名士が遊說に來れば、必ず其演說を聽きに行つたものだ。無論板垣さんは自分の叔父さんか何ぞのやうに思つてゐた。

實際の政界の事情は些とも分つてゐなかつた。自由黨は如何いふ政黨だか、改進黨と如何違ふのだか、其樣な事は分つてゐるやうな風をして、實は些とも分つてゐなかつたが、唯初心な眼で局外から觀ると、何だか自由黨の人といふと、其人の妻子は屹度饑に泣いてるやうに思はれて、妻子が饑に泣く——人情忍び難い所だ。その忍び難い所を忍むで、妻や子を棄てゝ置いて、而して自分は藝者狂ひをするのぢやない、四方に奔走して、自由民權の大義を唱へて、探偵に跟隨られて、動もすれば腰繩で暗い冷たい監獄へ送られても屈しない。偉いなあ！ と、かう思つてゐたから、それで好きだつた。

好きは好きだつたが、しかし友人の誰彼のやうに、今直ぐ其眞似は仕度くない。も少し先の事にしたい。兎角理想といふものは遠方から眺めて憧憬れてゐると結構な物だが、直ぐ實行しようとすると、種々都合の惡い事がある。が、それでは何だか自分にも薄志弱行のやうに思はれて、何だか心持が惡かつたが、或時何かの學術雜誌を讀むと、今の青年は自己の當然修むべき學業を棄てゝ、動もすれば身を政治界に投ぜんとする風ありと雖も、是れ以ての外の心得違なり、青年は須らく客氣を抑へて先づ大に修業すべし、大に修養して而して後大に爲す所あるべし、といふ議論が載つてゐた。私は嬉しかつた。早速此持重說を我物にして了つて、之を以て實行に逸る友人等を非難し、而して竊に自ら辯護する料にしてゐた。

斯ういふ事情で此樣な心持になつてゐたから中學卒業後尙ほ進んで何か專門の學問を修めようといふ場合には、勢ひ政治學に傾かざるを得なかつた。父が上京して何を遣りたいのだと言つた時にも、言下に政治學と答へた。飛んだ事だといつて父が夫では如何しても承知して呉れなかつたから、ぢや、法學と政治學とは從兄弟同士だと言つて、法律をやりたいと言つて見た。法律學は其頃流行の學問だつたし、縣の大書記官も法學士だつたし、それに親戚に、私立だけれど法律學校出身で、現に私達の眼には立派な生活をしてゐる人が二人あつた。一人は何處だつたか記憶がないが、何でも何處かの地方で代言をして、藝者を女房にして贅澤な生活をしてゐて、今一人は內務省の、屬官でこそあれ、好

い處を勤めてゐる證據には、曾て歸省した時の服裝を見ると、地方では奏任官には大丈夫踏める素晴しい服裝で、何しても金の時計をぶら垂げてゐたと云ふ。それで父も法律なら好からうと納得したので、私は遂に法學研究のため斯うして汽車で上京するのだ。

二十六

東京へ着いたのは其日の午後の三時頃だつたが、便つて行くのは例の金時計をぶら垂げてゐたといふ、私の家とは遠緣の、變な苗字だが、小狐三平といふ人の家だ。招魂社の裏手の知れ難い家で、車屋に散々こぼされて、辛と尋ね當てゝ見ると、門構は門構だが、潛門で、國で想像してゐたやうな立派な冠木門ではなかつた。が、標札を見れば此家に違ひないから、潛りを開けて中に入ると、直ぐも一ら其處が格子戸作りの上り口で、三度四度案内を乞うて漸と出て來たのを見れば、顏や手足の腫起んだやうな若い女で、初は膝を突きさうだつたが、私の風體を見て中止にして、立ちながら、何ですといふ。はてな、家を間違へたか知らと、一寸狼狽したが、標札に確に小狐三平とあつたに違ひないから、姓名を名告つて今着いた事を言ふと、若い女は怪訝な顏をして、一寸お待ちなさいと言つて退込んだきり、中々出て來ない。車屋は早く仕て呉れといふ。私は氣が氣でない。が、前以て書面で、世話を賴む、引受けたと、話が着いてから出て來たのだし、今日上京する事も三日も前に知らせてある

のだから、今に伯母さんが——私の家では此家の夫人を伯母さんと言ひつけてゐた——伯母さんが出て來て好いやうに仕て呉れると、其を賴みにしてゐると、久らくして伯母さんではなくて、今の女が又出て來て、お上ンなさいといふ。荷物が有りますと、口を尖がらかすと、荷物が有るならお出しなさい、といふから、車屋に手傳つて貰つて、荷物を玄關へ運び込むと、其女が片端から受取つて、ズン〳〵何處かへ持つてッて了つた。

車屋に極めた賃錢を拂はうとしたら、骨を折つたから增を呉れといふ。餘所の車は風を切つて飛ぶやうに走る中を、のそ〳〵と歩いて來たので、些とも骨なんぞ折つちやゐない。田舍者だと思つて馬鹿にするなと思つたから、厭だといつた。すると、車屋は何だか譯の分らぬ事を隙間もなくベラ〳〵と饒舌り立つて、段々大きな聲になるから私は其大きな聲に驚いて、到頭言ひなり次第の賃錢を拂つて、東京といふ處は厭な處だと思つた。

車屋との悶着を默つて衝立つて視てゐた女が、其が濟むのを待兼たやうに、此方へ來いといふから、其跟に隨いて玄關の次の薄暗い間へ入ると、正面の唐紙を女が此時ばかり、一寸膝を突いてスッと開けて、默つて私の面を視る。私は如何して好いのだか、分らなかつたから、

「中へ入つても好いんですか？」

と狼狽して案内の女に應援を乞うた時、唐紙の向うで、勿體ぶつた女の聲で、

「さあ、此方へ。」

私は急に氣が改まつて、小腰を屈めて、遠慮勝に中へ入つた。と、不意に簞笥や何や角や澤山な綺麗な道具が燦然と眼へ入つて、一寸目眩しいやうな氣がする中でも、長火鉢の向ふに、三十だか四十だか、其樣な悠長な研究をしてる暇はなかつたが、何でも私の母よりもゲツと若い女の人が、厚い座蒲團の上にチンと澄してゐる姿を認めたから、狼狽して卒然其處へドサリと膝を突くと、眞紅になつて、倒さになつて、

「初めまして……」

二十七

伯母さん――といつては何だか調和が惡い、奥樣は一寸會釋して、

「今お着きでしたか？」

「は。」と固くなる。

「何ですか、お國では阿父さんも阿母さんもお變りは有りませんか？」

「は。」

と矢張固くなりながら、訥辯でボツリ〳〵と兩親の言傳を述べると　奥樣は聽いてゐるのか、ゐないのか、上調子ではあ〳〵と受けながら、厭に赤ちやけた出がらしの番茶を一杯注いで呉れたぎりで、一向構つて呉れない。氣が附いて見ると、座蒲團も呉れてない。

何時迄經つても主人が顔を見せぬので、

「伯父さんはお留守ですか？」

と不覺言つて了つた顔を、奥樣はヂロリと尻眼に掛けて、

「主人はまだ役所から退けません。」

主人と厭に力を入れて言はれて、ぢや、伯父さんぢや不好つたのか知ら、と思ふと、又私は眞赤になつた。

ところへバタ〳〵と縁側に足音がして、障子が端手なくガラリと開いたから、ヒヨイと面を擧げると、白い若い女の顔――とだけで、其以上の細かい處は分らなかつたが、何しろ先刻取次に出たのとは違ふ白い若い女の顔と衝着つた。是が噂に聞いた小狐の獨娘の雪江さんだなと思ふと、私は我知らず又固くなつて、狼狽てゝ俯向いて了つた。

「阿母さん〳〵」と雪江さんは私が眼へ入らぬやうに挨拶もせず、華やかな若い艶のある美い聲で、

「矢張私の言つた通りだわ。明日が樂だわ。」

「まあ、さうかい、」と吃驚した拍子に、今迄の奥樣がヒヨイと奥へ引込んで、矢張常の阿母さんに

なつて了つた。

「厭だあ私……だから此前の日曜にしようと言つたのに、阿母さんが……」といひながら座敷へ入つて來て、始めて私が眼へ入つたのだらう。ヂロ〳〵と私の風體を視廻して、膝を突いて、母の顔を見ながら、「誰方？」

「此方が何さ、阿父樣からお話があつた古屋さんの何さ。」

「さう。」

といつて雪江さんは此方を向いたから、此處らでお辭儀をするのだらうと思つて、私は又倒さになつて一禮すると、殘念ながら又眞紅になつた。

雪江さんも一寸お辭儀したが、直ぐと彼方を向いて了つて、

「私厭よ。阿母さんが彼樣な事言つて行かなかつたもんだから……」

「だつて仕方がなかつたンだわね。私だつて彼樣な窮屈な處へ行くよか、芝居へ行つた方が幾ら好いか知れないけど、石橋さんの奥樣に無理に誘はれて辭り切れなかつたンだもの。好いわね、其代り阿父樣に願つて、お前が此間中から欲しい〳〵てッてる彼ね？」と娘の面を視て、薄笑ひしながら、「彼を買つて頂いて上げるから……仕方がないから。」

「本當？」と雪江さんも急に莞爾々々となつた。私は見ないでも雪江さんの擧動は一々分る。「本當？

そんなら好いけど……ちよいと〳〵、其代り……」と小聲になつて、「ルビー入りよ。」

「不好ません〳〵！　ルビー入りなんぞッて、其樣な贅澤な事が阿父樣に願へますか？」

「だつてえ……尋常のぢやあ……」と甘たれた嬌態をする。

「そんならお止しなさいな。尋常ので厭なら、何も强ひて買つて上げようとは言はないから。」

「あら！……」と忽ち機嫌を損ねて、「だから阿母さんは嫌ひよ。直あ〳〵だもの。尋常のぢや厭だつて誰も言つてやしなくつてよ。」

「そんなら、其樣な不足らしい事お言ひでない。」

「へえ〳〵、恐れ入りました、」と莞爾して、「ぢや、尋常のでも好いから、屹度よ。ねえ、阿母さん、欺しちや厭よ。」

「誰がそんな……」

「まあ、好かつた！」と又莞爾して一寸私の面を見た。

二十八

私は先刻から存在を認めてゐられないやうだから、其隙に竊そり雪江さんの面を視てゐたのだ。雪江さんは私よりも一つ二つ、それとも三つ位年下かも知れないが、お出額で、圓い鼻で、二重顎で、

色白で愛嬌が有ると謂へば謂ふやうなものゝ、聲程に器量は美くなかつた。が、若い女は何處となく好くて、私がうッかり面を視てゐる所を、不意に其面が此方を向いたのだから、私は驚いた。驚いて又俯向いて、膝前一尺通りの處を佶と視据ゑた。

雪江さんは又更めて私の樣子をヂロ〳〵視てゐるやうだつたが、

「部屋は何處にするの？」

と阿母さんの方を向く。

「え？」と阿母さんは雪江さんの面を視て、「あの、何のかい？　玄關脇の四疊が好からうと思つて。」

「あんな處!?……」

と雪江さんが一寸驚くのを、阿母さんが眼に物言はせて、了解ませて、

「彼處が一番明るくッて好いから。」

「さう。」と一切の意味を面から引込めて、雪江さんは澄して了つた。

「おゝ、さうだつけ、」と阿母さんの奥樣は想出したやうに私の方を向いて、「荷物がまだ其儘でしたつけね。今案内させますから、彼方へ行つて荷物の始末でもなさい。雪江お前一寸案内してお上げ。」

雪江さんが起つたから、私も起つて其跟に隨いて今度は緣側へ出た。雪江さんは私より脊が低い。ふッくりした束髮で、リボンの色は——彼は樺色といふのか知ら。若い女の後姿といふものは悪くな

いものだ。

緣側を後戻りして又玄關へ出ると、成程玄關脇に何だか一間ある。

「此處よ。」

と雪江さんが衝と其處へ入つたから、私も續いて中へ入つた。奥樣は明るいといつたけれど、何だか薄暗い長四疊で、入るとブクッとして變な足應へだつたから、先づ下を見ると、疊は茶褐色だ。西に明取りの小窓がある。雪江さんが其を明けて呉れたので、少し明るくなつたから、尙ほ能く視廻すと、壁は元來何色だつたか分らんが、今の所では濁黑い變な色で、一ヶ所壞れを取繕つた痕が目立つて黄ろい球を描いて、人魂のやうに尾を曳いてゐる。無論一體に疵だらけで處々鉛筆の落書の痕を留めて、腰張の新聞紙の剝れた蔭から隱した大疵が竊と面を出してゐる。天井を仰向いて視ると、彼方此方の雨漏りの暈したやうな染が化物めいた模樣になつて浮出してゐて、何だか氣味の悪いやうな部屋だ。

「何時の間にか掃除したんだよ。それでも綺麗になつたわ。」と、雪江さんは部屋の中を視廻してゐたが、ふと片隅に積んであつた私の荷物に目を留て、「貴方の荷物つて是れ？」と、臆面もなく、人の面を視る。

私は狼狽てゝ壁を視詰めて、

「然うです。」

「机が無いわねえ。私ン所に明いてるのが有るから、貸て上げませうか？」

「なに、好いです、明日買つて來るから。」と矢張壁を視詰めた儘で。

「私要らないンだから、使つても好くつてよ。」

「なに、好いです、買つて來るから。」

「大當に好くつてよ、然う遠慮しないでも、今持つて來てよ。」と蝶の舞ふやうに飜然と身を翻して、部屋を出て、姿は直ぐ見えなくなつたが、其處らで若い華やかな聲で、「其代り小さくッてよ。」といふのが聞えて、輕い足音がバタ〳〵と緣側を行く。

私は荷物の始末を忘れて、雪江さんの出て行つた跡をうつかり見てゐた。事に寄ると、口を開いてゐたかも知れぬ。

二十九

荷物を解いてゐると、雪江さんが果して机を持つて來て吳れた。成程小さい——が、折角の志を無にするも何だから、借りて置く事にして、禮をいつて窓下に据ゑると、雪江さんが、それよりか入口の方が明るくッて好からうといふ、入口では出入りの邪魔になると思つたけれど、折角の助言を聽かぬのも何だから、言ふ通りに据ゑ直すと、雪江さんが、矢張窓の下の方が好いといふ。で、矢張窓の下の方へ据ゑた。

早速私が書物を出して机の側に積むのを見て、雪江さんが、

「本箱も無かつたわねえ。私ン所に二つ有るけど、皆塞がつて、貸して上げられないわ。」

「なに、買てつ來るから、好いです。」

「そんならね、晩に勸工場で買つてらッしやいな。」

「え？」と私は聞直した、——勸工場といふものは其時分まだ國には無かつたから。

「小川町の勸工場で。」

「勸工場ッて？」

「あら、勸工場を知らないの？　まあ！……」

と雪江さんは吃驚した面をして、突然破裂したやうに笑ひ出した。娘といふものは壺口をして、氣取つて、オ、、と笑ふものとばかり思つてる人は訂正なさい。雪江さんは娘だけれど、口を一杯に開いて、アハハ〳〵と笑ふのだ。初め一寸仰向いて笑つて、それから俯向いて、身を揉んで、胸を叩いて苦しがつて笑ふのだ。私は眞紅になつて默つてゐた。

先刻取次に出た女は其後漸く下女と感附いたが、此時障子の蔭からヒヨコリお龜のやうな笑面を出

して、

「何を其様に笑つてらッしやるの？」

「だつて……アハ、、、ー……古屋さんが……アハ、、！……」

「あら、一寸、此方が如何かなすつたの？」

無禮者奴がヅカ〳〵部屋へ入つて來た、而して雪江さんの笑ひが止らないで、些とも要領を得ない癖に、譯も分らずに、一緒になつてゲラ〳〵笑ふ。

其時ガラ〳〵といふ車の音が門前に止つて、ガラッと門が開くと同時に、大きな聲で、威勢よく、

「お歸りッ！」

形勢は頓に一變した。下女は急に眞面目になつて、雪江さんを棄てゝ置いて、急いで出て行く。

雪江さんもまだ可笑がりながら泪を拭き〳〵、それでも大に落着いて後から出て行く。

主人の歸りとは私にも覺れたから、急いで起ち上つて……窃そり窓から覗いて見た。

歸つた人は丁度潛りを潛る所で、まづ黑の山高帽がヌッと入つて、續いて縞のヅボンに靴の先がチラリと見えたかと思ふと、澁紙色した髭面が勃然仰向いたから、急いで首を引込めたけれど、間に合はなかつた。見附かッちやッた。

お歸り遊ばせ〳〵、と口々に喋々しく言ふ聲が玄關でした。奥樣——も何だか變だ、雪江さんの阿

母さんの聲で何か言ふと、ふう、さうか、ふう〳〵、といふ聲は主人に違ひない。私の話に違ひない。

惡い事をした、窓からなんぞ覗くんぢやなかつたと、閉口してゐる所へ下女が呼びに來て、愈々閉口したが、仕方がない。どうせ志を立てゝ鄕關を出た男兒だ、人間到る處で極りの惡い想ひする、と腹を据ゑて奥へ行つて見ると、もう歸つた人は和服に着換へて、曾て雪江さんの阿母さんが占領してゐた厚蒲團に坐つてゐる。私は誰でも逢ひつけぬ人に逢ふと、屹度眞紅になる癖がある。で、此時も眞紅になつて、一度國で逢つた人だから、久濶といつて例の通り倒さになると、先方は心持首を動かして、若し聲に腰が有るなら、その腰と思ふ邊に力を入れて、「はい」といふ。父も母も宜しく申しましたといふと、又「はい」といふ。何卒何分願ひますといふと、一段聲を張揚げて、「はアい」といふ。

三十

晩餐になつて、其晩だけは私も奥で馳走になつた。花模樣の丸ボヤの洋燈の下で、隅ではあつたが、皆と一つ食卓に對ひ、若い雪江さんの罪の無い話を聽きながら、阿父さん阿母さんの莞爾〳〵した面を見て、賑かに食事して、私も何だか嬉しかつたが……

軈て食事が濟むと、阿父さんが又主人になつて、私に對つて徐々小むづかしい話を始めた。何でも物價高直の折柄私の入れる食料では到底も賄ひ切れぬけれど、外ならぬ阿父さんの達ての賴みである

に因つて、不足の處は自分の方で如何にかする決心で、謂はゞ義俠心で引受けたのであれば、他の學資の十分な書生のやうに、悠長な考へでゐてはならぬ、何でも苦學すると思つて辛抱して、品行を慎むは勿論、勉強も人一倍するやうにといふ話で、聽いてゐても面白くも變哲もない話だから、雪江さんは話半に小さな欠びを一つして、起つて何處へか行つて了つた。私は少し本意なかつたが、やがて奥まつた處で琴の音がする。雪江さんに違ひない。雪江さんはまだ習ひ初めだと見えて、琴の音色は何だかボコン、ボコン、ベコン、ボコンといふやうに聞えて妙だつたけれど、私は鳴物は大好だ。何時聽いても悪くないと思つた。

で、遠音に雪江さんの琴を聽きながら、主人の勘定高い話を聽いてゐると、琴の音が食料に搦むだり、小遣に離れたりして、六圓がボコン、三圓でベコンといふやうに聞えて、何だか變で、話も能く分らなかつたが、分らぬ中に話は進んで、

「で、家も下女一人外使うて居らん。手不足ぢや。手不足の處で君の世話をするのぢやから、客扱ひにはされん。そりや手紙で阿父さんにも能う言つて上げてあるから、君も心得てるぢやらうな？」

「は。」

「からして勉強の合間には、少し家事も手傳うて貰はんと困る。なに、手傳ふというても、大した事ぢやない。まあ取次位のものぢや。まだ何ぞ角ぞ他に賴む事も有らうが、なに、皆大した事ぢやない。

行つて貰へやうな？」

「は、何でも僕に出來ます事なら……」

「そ、そ、その僕が面白うない。君僕といふのは同輩或は同輩以下に對うて言ふ言葉で、尊長者に對うて言ふべき言葉でない、そんな事も注意して、僕といはずに私というて貰はんとな……」

「は……不知氣が附きませんで……」

「それから、も一つ言うて置きたいのは我々の呼方ぢや。もう君の年配では伯父さん伯母さんでは可笑しい。これは東京の習慣通り、矢張私の事は先生と言うたら好からう。先生、此方が御面會を願はれます、先生、お使に行つて參りませう——一向可笑しうない。先生というて貰はう。」

「は、承知しました。」

「で、私を先生といふ日になると、勢ひ家内の事は奥さんと言はんと權衡が取れん。先生に對する奥さんぢや。な、私が先生、家内が奥さん、——宜しいか？」

「は、承知しました。」

これで一通り訓戒が濟んで、後は自慢話になつた。先生も法律は晩學で、最初は如何にも辛かつたが、その辛いのを辛抱したお蔭で、今日では内務の一等屬、何とかの係長たることを得たのだといふ話を長々と聽かされて、私は痺が切れて、耐へ切れなくなつて、泣出しさうだつた。

辛と放免されて、暗黑を手探りで長四疊へ歸つて來ると、下女が薄暗い豆ランプを持つて來て、お前さん床を敷つたら忘れずに消すのですよと、朋輩にでも言ふやうに、粗卒に言ひ置いて行つて了つた。

國を出る時、此家の伯父さんの先生は、昔困つてゐた時、家で散々世話をして遣つた人だから、惡いやうにはして吳れまいと、父は言つた。私も矢張り其氣で便つて來たのだが、便つて來てみれば事毎に案外で、あゝ、何だか妙な氣持がする。

私は家が戀しくなつた……

三十一

私は翌日早速錦町の某私立法律學校へ入學の手續を濟ませて、其處の生徒になつて、珍らしい中は熱心に勉强もしたが、其中に段々怠り勝になつた。それには種々原因もあるが、第一の原因は家の用が多いからで。

伯父さんの先生——私は口惜しいから斯ういふ——伯父さんの先生は、用といつても大した事ぢやないと言つた。成程一命に關はるやうな大した事ではないが、併し其大した事でない用が間斷なく有る。まづ朝は下女と殆ど同時に覺されて、雨戸を明けさせられる。伯母さんの奧さんと分擔で座敷の

掃除をさせられる。其が濟むと、今度は私一人の專任で庭から、玄關先から、門前から、勝手口まで掃かせられる。少しでも塵芥が殘つてゐると、掃直しを命ぜられるから、丁寧に綺麗に掃かなきやならん。是が中々の大役の上に、時々其處らの草むしり迄やらされて萎靡する事もある。

朝飯を濟せて伯父さんの先生の出勤を見送つて了ふと、學校は午後だから、其迄は身體に一寸隙が出來る。其暇に自分の勉强をするのだが、其さへ時々急ぎの謄寫物など吩咐つて全潰になる。

夕方學校から歸ると、伯父さんの先生はもう疾うに役所から退けてゐて、私の歸りを待兼たやうに、後から〳〵と用を吩咐る。それ、郵便を出して來いの、やれ、お客に御飯を出すのだから、急いで仕出し屋へ走れのと、純臺所用の外は、何にでも私を使ふ。時には何の用だか知れもせぬ用に、手紙を持たせられて、折柄の雨降にも用捨なく、遠方迄使ひに遣られて、つく〴〵辛いと思つた事もある。

さもなくば內で取次だが、此奴が餘所目には樂なやうで、行つて見ると中々樂でない。漸く刑法講義の一枚も讀むだかと思ふと、もう賴まうと來る。聞えん風も出來ぬから、澁々起つて取次に出て、倒さになる。私のお辭儀は家內の物議を惹起して度々喧しく言はれてゐるけれど、面倒臭いから、構はず倒さになる。でも、對手が立派な商人か何かだと、取次樂がして好い。伯父さんの先生、其樣な時には、ふう〳〵と二つ返事で、早速お通し申せと來る。上機嫌だ。其代り其樣な客の歸る所を見ると持つて來た物は屹度持つて歸らない。立派な髭の生えた人もまだ好い。そんなのに限つて尊大振つて、

私が倒さになつても、首一つ動かさぬ代り、取次いでも小言を言はれる氣遣ひはない。反て伯父さんの先生狼狽てゝ迎へに飛んで出る事もある。一番六かしいのは風體の餘り立派でない人で、就中帽子を冠らぬ人は、之を取次ぐに大に警戒を要する。自筆の名刺か何かを出されて、之を持つて奥へ行くと、伯父さんの先生名刺を一見するや、面を顰めて、居ると言つたかといふ。居るものを居ないと言はれますか、と腹の中では議論を吹懸けながら、口へ出しては大人しく、はい、然う申しましたといふと、チヨッと舌打して、此樣な者を取次ぐ奴が有るか、君は人の見別が出來んで困ると、小言を言つて、居ないと言つて返して了へといふ。私は脹れ面をして容易に起たない。すると、最終には澁々會ひはするが、後で金を持つてかれたといつて、三日も沸々言つてる。

沸々言つたつて關はないが、斯ういふ處を傍から看たら、誰が眼にも私は立派な小狐家の書生だ。伯父さんの先生の畜生、自分からが其氣で居ると見えて、或時人に對つて家の書生がといつてゐた。既に對手方が右の始末だから、無理もない話だが、出入の者が皆矢張私を然う思つて、書生扱にする。不平で〳〵耐らないが、一々辯解もして居られんから、私は誠に據どころなく不承々々に小狐家の書生にされて了つて、而して月々食料を拂つてゐた。

が、今となつて考へて見ると、不平に思つたのは私が未だ若かつたからだ。監督を賴まれたから、引受けて、序に書生にして使ふ――これが卽ち親切といふもので、此の外に別に親切といふものは、

人間に無いのだ。有るかも知れんが、私は一寸見當らない。

三十二

體好く書生にされて私は忌々しくてならなかつたが、しかし其でも小狐家を出て了ふ氣にはならなかつた。初の中は國元へも折々の便に不平を漏して遣つたが、其も後には弗と止めて了つた。さればといつて家での取扱ひが變つたのではない。相變らず書生扱にされて、小ッ甚くコキ使はれ、果は下女の擔任であつた靴磨きをも私の役に振替へられて了つた。無論其時は私は憤激した、餘程下宿しようかと思つた。が、思つたばかりで、下宿もせんで、爲せられる儘に靴磨きもして、而して國元へは其を隱して居た。少し妙のやうだが、なに、妙でも何でもない。私は實は雪江さんに惚れてゐたので。

惚れては居たが、夫だから雪江さんを如何しようといふ氣はなかつた。其時分は私もまだ初心だつたから、正直に女に惚れるのは男兒の恥辱と心得てゐた。女を弄ぶのは何故だか左程の罪惡とも思つてゐなかつたが、苟も男兒たる者が女なんぞに惚れて性根を失ふなどゝ、そんな腐つた、そんなやくざな根性で何が出來ると息卷いてゐた。が、口で息卷く程には心で思つてゐなかつたから、自分もいつか其程に擯斥する戀に囚はれて了つたのだ。が、流石に囚はれたのを恥ぢて、明かに然うと自認し得なかつた氣味があるから、若し其頃誰かゞ面と向つて私に然うと注意したら、私は屹度、失敬な、

惚れなんぞするものか、と眞紅になつて怒つたに違ひない。が、實は惚れたとも思はぬ中に、いつか自分にも内々で、こッそり次序なく惚れて了つてゐたのだ。

惚れた證據には、雪江さんが留守だと、何となく歸りが待たれる。家に居る時には心が藻脱けて雪江さんの身に添うてゞも居るやうに、奥と玄關脇と離れてゐても、雪江さんが、今何の座敷で何をしてゐるかは大抵判る。

雪江さんは宵ッ張だから、朝は大層眠たがる。阿母さんに度々起されて、しどけない寢衣姿で、脛の露はになるのも氣にせず、眠さうな面をしてふら〳〵と部屋を出て來て、指の先で無理に眼を押開け、眶の裏を赤く反して見せて、「斯うして居ないと、附着いて了つてよ。」といつて皆を笑はせる。

雪江さんは一ッ橋のさる學校へ通つてゐたから、朝飯を濟ませると、急いで支度をして出て行く。髪は常も束髪だつたが、履物は脊が低いからッて、高い木履を好いて穿いてゐた。紫の包を抱へて、長い柄の蝙蝠傘を持つて出て行く後姿が私は好くつて堪らなかつたから、いつも其時刻には何喰はぬ顔をして部屋の窓から外を見てゐると、雪江さんは大抵は見られてゐるとは氣が附かずに、一寸お尻を撫でゝから、髪を壞すまいと、低く屈むで徐と門を潜つて出て行くが、時とすると潜る前にヒョイと後を振向いて私と顔を看合せる事がある。さうすると、雪江さんは綺麗な齒並をチラリと見せて、何の意味もなく莞爾する。私は疾から出さうな莞爾を顔の何處へか押込めて、强ひて眞面目を作つて

ゐるのだから、雪江さんの笑顔に誘はれると、耐へ切れなくなつて不覺矢張莞爾する。かうして莞爾に對するに莞爾を以てするのを一日の樂みにして、其をせぬ日は何となく物足りなく思つてゐた。いや、罪の無い話さ。

三十三

午後はいつも私が學校へ行つた留守に、雪江さんが歸つて來るので、掛違つて逢はないが、雪江さんは歸ると、直ぐ琴の稽古で近所のお師匠さんの處へ行く。私は一度何かで學校が早く終つた時、態々廻道して其前を通つて見た事がある。三味線のお師匠さんと違つて、琴のお師匠さんの家は格子戸作りでも、履脱に石もあつて、何處か上品だ。入口に琴曲指南山勢門人何とかの何枝と優しい書風で書いた札が掛けてあつた。竊と格子戸の中を覗いて見ると、赤い鼻緒や海老茶の鼻緒のすがつた綺麗な駒下駄が三四足行儀よく並んだ中に、一足紫紺の鼻緒の可愛らしいのが片隅に遠慮して小さく脱棄てある。之を見違へてなるものか、雪江さんのだ。大方駒下駄の主も奥の座敷に取繕つてチンと澄してゐるに違ひないと思ふと、そのチンと澄してゐる處が一目なりと見たくなつたが、生憎障子が閉切つてあるので、外からは見えない。唯琴の音がするばかりだ。稽古琴だから騷々しいばかりで趣は無いけれど、それでも琴は何處か床しい。雪江さんは近頃大分上手になつたけれど、雪江さんではない

やうだ。大方まだ濟ないんだらう、なぞと思ひながら、うッかり覗いてゐたが、ふッと氣が附くと、先刻から側で何處かの八ッばかりの男の兒が、青洟を竪り〳〵、不思議さうに私の面を瞻上げてゐる。子供でも極りが悪くなつて、匆々に其處の門口を離れて歸つて來た事も有つたつけが……

夕方は何だか混雜して落着かぬ中にも、一寸好い事が一つある。ランプ掃除は下女の役だが、夕方之に火を點けて座敷々々へ配るのは私の役だ。其時だけは私は公然雪江さんの部屋へ入る權利がある。雪江さんの部屋は奥の四疊半で、便所の側だけれど、一寸小綺麗な好い部屋だ。本箱だの、机だの、ガラス戸の箱へ入れた大きな人形だの、袋入りの琴だの、寫眞挾みだの、何だの角だの體裁よく列べてあつて、留守の中は整然と片附いてゐるけれど、歸つて來ると、書物は出放しにしたり、毛絲の球を轉がしたりして引散かす。何かに紛れてランプ配りが晩くなつた時などは、もう夕闇が隅々へ行渡つて薄暗くなつた此の部屋の中に、机に茫然頬杖を杖いてる雪江さんの眼鼻の定かならぬ顔が、唯圓々と微白く見える。何となく詩的だ。

「晩くなりました。」

とぶつきらぼうの私も雪江さんだけには言ひつけぬお世辭も、不覺出て、机の毛絲のランプ敷へ竊とランプを載せると、

「いゝえ、まだ要らないわ。」

雪江さんは屹度斯ういふ、これが伯父さんの先生でも有らうものなら、口を尖がらかして、「もッと手廻して早うせにや不好！」と來る所だ。大した相違だ。だから、家で人間らしいのは雪江さんばかりだと言ふのだ。

其儘出て來るのが、何だか飽氣なくて、

「今日貴嬢の琴のお師匠さんの前を通りました。一寸好い家ですね。」

「あら、さう。」と雪江さんがいふ。心持首を傾げて、「何時頃？」

「さうさなあ……四時ごろでしたか。」

「ぢや、私の行つてた時だわねえ。」

「えゝ。」と私は何だか極りが悪くなつて俯向いて了ふ。

此話が發展したら、如何な面白い話になるのだか判らんのだけれど、其樣な時に限つて生憎と、茶の間邊で伯母さんの奥さんの意地悪が私を呼ぶ。

「古屋さん！　早くランプを……何を愚圖々々してるンだらうねえ。」

殘惜しいけれど、仕方がない。其切りで私は雪江さんの部屋を出て了ふ。

三十四

一番樂しみなのは日曜だ。それも天氣だと、朝から客が立込んで私は目が眩る程忙しいし、雪江さんもお友達が遊びに來たり、お友達の處へ遊びに行つたりして、私の事なんぞ忘れてゐるから、天氣は冀だ。雨降りに限る、就中伯父さんの先生は何か餘儀ない用事があつて朝から留守、雪江さんは一日家、といふ雨降の日が一番好い。

其樣な日には雪江さんは屹度思切て朝寢坊をして、私なんぞは徐々晝飯が戀しくなる時分に、漸う起きて來る。顏を洗つて、御飯を喰べて、其から長いこと掛つて髮を結ふ。結ひ了ふ頃は最う午砲だけれど、お晝はお腹が滿くて喰べられない。「私廢してよ、」といふ。

部屋の机の前で今日の新聞を一寸讀む。大抵續物だけだ。それから編棒と毛絲の球を持出して、暫くは默つて切々編物をしてゐる。私が用が有つて部屋の前でも通ると、「古屋さん、これ何になると思つて？」と編掛けを翳して見せる。私が見たんぢや、何だか圓い變なお猪口のやうな物で、何になるのだか見當が附かないから、分らないといふと、でも、まあ、當てゝ見ろといふ。熟考の上、「巾着でせう？」といふと、「いゝえ、」と頭振を振る。巾着でないとすると、手袋には小さし、靴下でもなさうだし、「あゝ分つた！　匂袋だ。」と圖星を言つた積でいふと、雪江さんは吃驚して、「まあ、可厭だ！　匂袋だなんぞッて……其樣な物は編物にやなくッてよ。」匂袋でもないとすると、もう私には分らない。降參して了ふと、雪江さんは莞爾ともしないで、「これ、人形の手袋。」

雪江さんは一つ事を何時迄もしてゐるのは大嫌ひだから、私がまだ自分の部屋の長四疊へ歸るか歸らぬ中に、もう編物を止めて琴を浚つてゐる。近頃では最うボコンのペコンでも無くなつた。斯うして聽いてゐると、如何しても琴に違ひないと、感心して聽惚れてゐると、十分と經たぬ中に、ジャカジャカジャンと引搔廻すやうな音がして、其切パタリと、琴の音は止む……ともう茶の間で若い賑かな雪江さんの聲が聞える。

忽ちドタ〳〵と縁側を駈けて來る音がする。下女の松に違ひない。後からバタ〳〵と追蒐けて來るのは、雪江さんに極つてる。玄關で追附いて、何を如何するのだか、キャッキャッと騷ぐ。松が敵はなくなつて、私の部屋の前を駈脫けて臺所へ逃げ込む。雪江さんが後から追蒐けて行つて、また臺所で一騷動やる中に、ガラガラガチャンと何かゞ壞れる。阿母さんが、茶の間から大きな聲で叱ると、臺所は急に火の消えたやうに閒寂となる。

私は、國に居る時分は、お向ふのお芳ちやん——子供の時分に能く飯事をして遊んだ、あのお芳ちやんが好きだつた。お芳ちやんは小さい時には活潑な兒だつたが、大きくなるに隨れて、大層落着いて品の好い娘になつて、私は其樣子が何となく好きだつたが、雪江さんはお芳ちやんとは正反對だ。が、雪江さんも惡くない、なぞと思ひながら、茫然机に頰杖を突いてゐる背中を、誰だかワッといつてドンと撞く。吃驚して振反ると、雪江さんがキャッ〳〵といひながら、逃げて行くしどけない後姿が

見える。私は思はず莞爾となる。

莞爾となつた儘で、尙ほ雪江さんの事を思續けて、果は思ふ事が人に知れぬから、好いやうなものの、怪しからん事を內々思つてゐると、茶の間の緣側あたりで、オーといふ例の艶のある美い聲が聞える。初は地聲の少し大きい位の處から、段々に甲高に競上げて行つて、絲のやうに細くなつて、何かを突脫けて、遠い〳〵何處かへ消えて行きさうになつて、又段々競下つて來て、果はパツと擴げたやうな太い聲になつて、餘念がない。雪江さんが肉聲の練習をしてゐるのだ。

三十五

私は其時分吉田松陰崇拜であつた。將來の自由黨の名士を以て自任してゐるのなら、グラツドストンかコブデン、ブライトあたりに傾倒すべきだが、如何した機だつたか、松陰先生に心醉して了つて、書風まで力めて其人に似せ、竊に何囘猛士とか僭して喜んでゐた迄は罪がないが、困つた事には、斯うなると世間に餘り偉い人が無くなる。誰を見ても、先づ松陰先生を差向けて見ると、一人として手應のある人物はない。皆一溜りもなく敗亡する。それを松陰先生の後に隱れて見てゐると、對手は松隱先生に負けるので、私に負けるのではないが、何となく私が勝つたやうな氣がして、大臣が何だ、皆門下生ぢやないか。自由黨の名士だつて左程偉くもない。況や學校の先生なんぞは只の學者だ、皆

降らないなぞと鼻息を荒くして、獨りで威張つてゐた。私なぞの理想はいつも人に迷惑を懸ける許りで、一向自分の足になつた事がないが、側から見たら嘸苦々しい事であつたらう。兎も角もかうして松陰先生大の崇拜で、留魂錄は諳誦してゐた程だつたが、しかし此松陰崇拜が、不思議な事には、些とも雪江さんを想ふ邪魔にならなかつたから、其時分私の眼中は天下唯松陰先生と雪江さんと有るのみだつた。

で、いつも學校の歸りには此二人の事を考へ〳〵歸るのだが、或日——たしか土曜日だつたかと思ふ、土曜日は學校も早仕舞なので、三時頃にさうして二人の事を考へながら歸つて見ると、主人夫婦はいつも茶の間だのに、其日は茶の間に居ない。書齋かと思つて書齋へ行かうとすると緣側の盡頭の雪江さんの部屋で、雪江さんの聲で、

「誰？」

といふ。私は思はず立止つて、

「私です。」

「古屋さん？」

といふ聲と共に、部屋の障子が颯と開いて、雪江さんが面だけ出して、

「今日は皆留守よ。」

「え？」と私は耳が信ぜられなかつた。

「阿父さんも阿母さんもね、先刻出懸けてよ」

「さうですか、」と何となく言つたが、内々は何だか急に嬉しくなつて來て、

「松は？」

「松はお湯へ行つて未だ歸つて來ないの。」

「ぢや、貴嬢お一人？」

「えゝ……一寸入らッしやいよ、此處へ。好い物があるから。」

と手招をする。斯うなると、松陰先生崇拜の私もガタ〳〵と震ひ出した。

三十六

前にも斷つて置いた通り、私は曾て眞劍に雪江さんを如何かしようと思つた事はない。それは決して無い。度々怪しからん事を想つて、人知れず其を樂しんで居たのは事實だけれど、勸業債券を買つた人が當籤せぬ先から胸算用をする格で、ほんの妄想だ。が、誰も居ぬ留守に一寸入らッしやいよ、と、手招ぎされて、驚破こそと思ふ拍子に、自然と體の震ひ出したのは即ち武者震ひだ。千載一遇の好機會、逸してなるものか、といふやうな氣になつて必死になつて、武者震ひを喰止めて、何喰はぬ顏

をして、呼ばれる儘に雪江さんの部屋の前へ行くと、屈んでゐた雪江さんが、其時勃然面を擧げた。見ると何だか口一杯頰張つてゐて、私の面を見て何だか言ふ。言ふ事は能く解らなかつたが、側に燒芋が山程盆に載つてゐたから、夫で察して、禮を言つて、一寸躊躇したが、思切つて中へ入つて了つた。

雪江さんはお薩が大好物だつた。私は好物ではないが、何故だか年中空腹を感じてゐるから、食後だつて十切位はしてやる男だが、此時ばかりは芋どころではなかつた。切に勸められるけれど、難有うゝとばかり言つてゝ、手も出さなかつた。何だかもう赫となつて、夢中で、何だか霧にでも包まれたやうな心持で、是から先は如何なる事やら、方角が分らなくなつたから、彷徨してゐると、

「貴方は遠慮深いのねえ。男ッて然う遠慮するもンぢやなくッてよ。」

と何にも知らぬ雪江さんが燒芋の盆を突附ける。私は今其處どころぢやないのだが、手を出さぬ譯にも行かなくなつて手を出すと、生憎手先がぶる〳〵と震へやがる。

「如何して其樣に震へるの？」

と雪江さんが不審さうに面を視る。私は愈々狼狽して、又眞紅になつて、何だか譯の分らぬ事を口の中で言つて、周章てゝ頰張ると、

「あら、皮ごと喰べて……皮は取つた方が好いわ。」

「なに、構はんです。」と仕方が無いから、皮ぐるみムシャ〳〵喰りながら、「何は……何處へ入らしッたンです？」

「吉田さんへ。」と雪江さんは皮を剝く手を止めて、「私些とも知らなかつたけど、今晩が春子さんのお興入なんですつて。そら、媒人でせう家は？　だから、阿父さんも阿母さんも早めに行つてないと不好つて、先刻出て行つたのよ。」

これで漸く合點が行つたが、それよりも爰に一寸吹聽して置かなきやならん事がある。私は是より先春色梅暦といふ書物を讀むだ。一體小説が好きで、國に居る時分から軍記物や仇討物は耽讀してゐたが、まだ人情本といふ面白い物の有ることを知らなかつた。これの知り初めが即ち此春色梅暦で、神田に下宿してゐる友達の處から、松陰傳と一緒に借りて來て始て讀んだが、非常に面白かつた。此梅暦に據ると、斯ういふ場合に男の言ふべき文句がある。何でも貴孃は浦山敷思はないかとか、何とかヒョイと輕く戲談を言つて水を向けるのだ。思切つて私も一つ言つて見ようか知ら……と思つたが、何だか、どうも……ソノ極りが悪い。

「大變立派なお支度よ。何でもね、箪笥が四棹行くンですつて。それからね、まだ長持だの、挾箱だの……」

あゝ、もう駄目だ。長持や挾箱の話になつちや大事去つた、と後悔しても最う追附かない。雪江さ

んは、何處が面白いのだか、その長持や挾箱の話に夢中になつて了つて、其から其と話し續けて、盛返したくも盛返す隙がない。仕方が無いから、今に又機會も有らうと、雪江さんの話は浮の空に聞いて只管其機會を待つてゐると、忽ちガラッと障子が開いて、

「あら、おたのしみ！……」

吃驚して振反ると、下女の松めが何時戻つたのか、見ともない面を罅裂さうに莞爾つかせて立つてやがる。私は餘程飛蒐つて横面をグワンと毆曲けてやらうかと思つた。腹が立つて〳〵……

三十七

千載一遇の好機會も松に邪魔を入れられて滅茶々々になつて了つたが、松が交つて二つ三つ話をしてゐる中に、間もなく夕方になつた。夕方は用が有るから、三人ばら〳〵になつて、私はランプ配りやら、戸締りやら、一切り立働いて、例の通り部屋で晩飯を濟すと、また身體に暇が出來た。雪江さんは一番先に御飯を喰べて部屋へ籠つた儘晋沙汰がない。唯松ばかり後仕舞で忙しさうで、臺所で器物を洗ふ水の音がボシャ〳〵と私の部屋へ迄聞える。

私は部屋で獨りランプを眺めて徒然としてゐるやうで、心は中々忙しかつた。婚禮に呼ばれて行つたとすると、主人夫婦の歸るのは未だ間が有る。歸らぬ中に今一度雪江さんと差向ひになりたい。差

向ひになつて何をするのだか、それは私にも未だ極らないが、兎に角差向ひになりたい、是非なりたい、何か雪江さんの部屋へ行く口實はないか、口實は……と藻掻くけれど、生憎口實が看附からない。うづ〳〵して獨りで焦心てゐると、ふと縁側にバタリ〳〵と足音がする。其足音が玄關へ來る。確かに雪江さんだ。部屋の前を通り越して臺所へ行くか、それとも萬一障子が開くかと、成行を待つ間の一分に心の臓を縮めてゐると、驚破、障子がガタ〳〵と開きかけて、グッと支へたのを其儘にして、雪江さんが隙間から覗込みながら、

「勉强？」

と一寸首を傾げた。これが何を聞く時でも雪江さんの爲る癖で、看慣れては居るけれど私は常も可愛らしいと思ふ。不斷着だけれど、荒い縞の着物に飛白の羽織を着て、華美な帶を締めて、障子に摑まつて斜に立つた姿も何となく目に留まる。

あゝ求むる者に與へられたのだ。神よ……といひたいやうな氣になつて、無論莞爾〳〵々々となつて、

「いゝえ……まあ、お入ンなさい。」

「ぢや、私、話して行くわ。奥は一人で淋しいから。」

珍客々々！　之を優待せん法はない。よ、よ、と雪江さんが掛聲をして障子を明けようとするけれど、開かないのを、私は飛んで行つて力任せにウンと引開けた。何だか領元からぞく〳〵する程嬉し

い。

生憎と火鉢は私の部屋には無かつたけれど、今迄敷いてゐた赤ゲットを、四ッに疊むだのを中央へ持出して、其でも裏反しにして勸めると、遠慮するのか、それとも小汚いと思つたのか、敷いて呉れないから、私は默つて部屋を飛出した。雪江さんは後で定めて吃驚してゐたらうが、私は雪江さんの部屋へ座蒲團を取りに行つたので、是だけは我ながら一生の出來だつたと思ふ。

席が出來ると、雪江さんが、

「貴方、御飯が喰べられて？　私何ぼ何でも喰べられなかつたわ、餘り先刻詰込んだもんだから。」と微笑する。何時見ても綺麗な齒並だ。

私も矢張り莞爾して、

「私も喰べられませんでした……」

大嘘！　實は平生の通り五杯喰べたので。

雪江さんは國産れでも東京育ちだから、

「……にもお芋が有つて？」

「有りますとも。」

「ぢや、歸つても不自由はないわねえ。」

と又微笑する。

私も高笑ひをした。雪江さんの言草が可笑かつたばかりぢやない、實は胸に餘る嬉しさやら、何やら角やら取交ぜて高笑ひしたのだ。

それから國の話になつて、國の女學生は如何な風をしてゐるの、英語は何位の程度だの、洋樂は流行るかのと、雪江さんは其樣な事ばかり氣にして聞く。私は大事の用を控へてゐるのだ。其處ぢやないけれど、仕方がないから對手になつてゐると、チョッ、また松の畜生が邪魔に來やがつた。

三十八

松が來て私はうんざりして了つたが、雪江さんは反て差向の時よりはずみ出して、果は松の方へ膝を向けて了つて、松ばかりを相手に話をする。私は居るか居ないか分らんやうになつて了つた。初は少からず不平に思つたが、しかし雪江さんを觀てゐるのには、反つて此方が都合が好い。で、母屋を貸切つて、庇で滿足して、雪江さんの白いふッくりした顏を飽かず眺めて、二人の話を聽いてゐると松も能く饒舌るが、雪江さんも中々負けてない。話は詰らん事ばかりで、今度開店した小間物屋は安賣だけれど品が惡いの、お湯屋のお神さんのお腹がまた大きくなつて來月が臨月だの、八百屋の猫が兒を五疋生むで二疋喰べて了つたさうだのと、要するに愚にも附かん話ばかりだが、しかし雪江さん

の樣子が好い。物を言ふ時には絶えず首を搖かす、其度にリボンが飄々と一緒に搖く。時々は手眞似もする。今朝結つた束髮がもう大分亂れて、後毛が頰を撫でるのを蒼蠅さうに搔き上げる手附も好い。其樣な時には彼は友禪メリンスといふものだか、縮緬だか、私には分らないが、何でも赤い模樣や黃ろい形が雜然と附いた華美な襦袢の袖口から、少し紅味を帶びた、白い滑こさうな柔かさうな腕が、時とすると二の腕まで露はれて、も少し持上げたら腋の下が見えさうだと氣を揉んでゐる中に、又舊の位置に戻つて了ふ。雪江さんは處女だけれど、乳の處がふッくりと持上つてゐる。大方乳首なんぞは薄赤くなつてるばかりで、有るか無いか分るまい……なぞと思ひながら、雪江さんの面ばかり見てゐると、いつしか私は現實を離れて、恍惚となつて、雪江さんが何だか私の……妻でもない、情人でもない……何だか斯う其樣なやうな者に思はれて、兎に角私の物のやうに思はれて、今は斯うして松といふ他人を交ぜて話をしてゐるけれど、今に時刻が來れば、二人一緒に斯う奧まつた座敷へ行く。と、もう其處に床が敷つてある夜具も郡內か何かだ私が着物を脫ぐと雪江さんが後からフワリと寢衣を着せて呉れる。今晩は寒いわねえとか雪江さんがいふ。む、む、寒いなあとか私も言つて、急いで帶をグル〳〵と危いて、床へ潛り込む。雪江さんが私の脫棄を疊んでゐる。其樣な事は好加減にして早く來て寢なと私がいふ。あいといつて雪江さんが私の面を見て微笑する……

「ねえ、古屋さん、然うだわねえ？」

と雪江さんが此方を向いたので、私は吃驚して眼の覺めたやうな心持になつた。何でも何か私の同意を求めてゐるのに違ひないから、何だか仔細は分らないけれど、

「さうですとも……」

と跋を合はせる。

「そら、御覽な。」

と雪江さんは又松の方を向いて、又話に夢中になる。

私はホッと溜息をする。今の續きを其儘にして了ふのは惜しい。もう一度、幻想でも構はんから、もう一度、今の續きを考へて見たいと思ふけれど、もう氣が散つて其心持になれない。仕方がないから、默つて話を聽いてゐる中に、又いつしか恍惚と腑が脱けたやうになつて、雪江さんの面が右を向けば、私の面も右を向く。雪江さんの面が左を向けば、私の面も左を向く。上を向けば、上を向く、下を向けば下を向く……

三十九

パタリと話が休むだ。雪江さんも默つて了ふ、松も默つて了ふ。何處でか遠方で犬の啼聲が聞える。所謂天使が通つたのだ。雪江さんは欠びをしながら、序に伸もして、

「もう何時だらう？」

「まだ早いです、まだ……」

と私が狼狽てゝ無理に早い事にして了ふ心を、松は察しないで、

「もう九時過ぎたでせうよ」

「阿父さんも阿母さんも遲いのねえ。何を爲てるンだらう？」と又欠びをして、「あゝ、古屋さんの勉强の邪魔しちやッた。私もう奥へ行くわ。」

私が些とも邪魔な事はないといつて止めたけれど、最う斯うなつては留らない、雪江さんは出て行つて了ふ。松も出て行く。私一人になつて了つた。詰らない……

ふと雪江さんの座蒲團が眼に入る……之れを見ると、何だか捜してゐた物が看附かつたやうな氣がして卒然引浚つて、急いで起上つて雪江さんの跡を追つた。

茶の間の先の暗い處で雪江さんに追付いた。

「なあに？……」

と雪江さんの吃驚したやうな聲がして、大方振向いたのだらう、面の輪郭だけが微白く暗中に見えた。

「貴嬢の座蒲團を持つて來たのです。」

「あ、さうだッけ。忘れちやッた。爰へ頂戴。」と手を出したやうだつた。

私は狼狽てゝ座蒲團を後へ置して、

「好いです、私が持つてくから。」

「あら、何故？」

「何故でも……好いです。」

「さう……」

と何だか變に思つた樣子だつたが、雪江さんは又暗中を動き出す。暗黑で能くは判らないけれど、其姿が見えるやうだ。私も跡から探り足で行く。何だか氣が焦る。今だ、今だ、と頭の何處かで喚く聲がする。如何か爲なきやならんやうな氣がして、むづ〳〵するけれど、何だか可怕くて如何も出來ない。咽喉が乾いて引附きさうで、思はずグビリと堅唾を呑んだ……と、段々明るくなつて、雪江さんの姿が嘹然明るみに浮出す。もう雪江さんの部屋の前へ來て、雪江さんの姿は衝と障子の中へ入つて了つた。

其を見ると、私は萎靡した。惜しいやうな氣のする一方で、何故だか、まづ好かつたと安心した氣味もあつた。で、續いて中へ入つて、持つて來た座蒲團を机の前に敷いて、其處を退くと、雪江さんは禮を言ひながら、入替はつて机の前に坐つて、

「遊んでらつしやいな。」

と私の面を瞻上げた。えゝとか何とかいつて踟躕してゐる私の姿を雪江さんはヂロ〳〵視てゐたが、

「まあ、貴方は此地へ來てから、餘程大きくなつたのねえ。今ぢや私とは屹度一尺から違つてよ。」

「まさか……」

「あら……屹度違ふわ。一寸然うしてらッしやいよ……」

といひながら、衝と起つたから、何を爲るのかと思つたら、ツカ〳〵と私の前へ來て直と向合つた。前髪が顎に觸れさうだ。紛と好い匂が鼻を衝く。

「ね、ほら、一尺は違うでせう！」と愛度氣ない白い面が何氣なく下から瞻上げる。

私はわな〳〵と震ひ出した。目が見えなくなつた。胸の皷動は腦へまで響く。息が逸んで、足が竦んで、もう凝として居られない。抱付くか、逃出すか、二つに一つだ。で、私は後の方針を執つて、物をも言はず、卒然雪江さんの部屋を逃出して了つた……

四十

何故彼時私は雪江さんの部屋を逃出したのだといふと、非常に怕ろしかつたからだ。何が怕ろしかつたのか判らないが、唯何がなしに非常に怕ろしかつたのだ。

生死の間に一線を劃して、人は之を越えるのを畏れる。必ずしも死を忌むからではない。死は止むを得ぬと觀念しても、唯此一線が怕ろしくて越えられんのだ。私の逃出したのが矢張それだ。女を知らぬ前と知つた後との分界線を俗に皮切りといふ。私は性慾に驅られて此線の手前迄來て、これさへ越えれば望む所の性慾の滿足を得られると思ひながら、此森が怕ろしくて越えられなかつたのだ。越えたくなつて越えなかつたのではなくて、越えたくても越えられなかつたのだ。其後幾年か經つて再び之を越えんとした時にも矢張怕しかつたが、其時は酒の力を藉りて、半狂氣になつて、漸く此怕ろしい線を踏越した。踏越してから醉が醒めると、何とも言へぬ厭な心持になつたから、又酒の力を藉りて强ひて纔に其不愉快を忘れてゐた。此樣な想ひをして迄も性慾を滿足させたかつたのだ。是は相手が正當でなかつたから、即ち賣女であつたからといふに、さうでない。相手は正當の新婦と相知る場合にも、人は大抵皆然うだと云ふ。殊に婦人が然うだといふ。何故だらう？

之と緣のある事で今一つ分らぬ事がある。人は皆隱れてエデンの果を食つて、人前では是を語ることさへ恥ぢる。私の樣に斯うして之を筆にして憚らぬのは餘程力むから出來るのだ。何故だらう？人に言はれんやうな事なら、爲んが好いぢやないか？ 敢てするなら誰の前も憚らず言ふが好いぢやないか？ 敢てしながら恥ぢるとは矛盾でないか？ 矛盾だけれど、矛盾と思ふ者も無いではないか？ 如何いふ譯だ！

之を靈肉の衝突といふか？ しからば、靈肉一致したら、如何なる？ 男女相知るのを怕ろしいとも恥かしいとも思はなくなるのか？ 畜生と同じ心持になるのか？

トルストイは北方の哲人だと云ふ。此哲人は如何な事を言つてゐる。クロイツェル・ソナタの跋に、理想の完全に實行し得べきは眞の理想でない。完全に實行し得られねばこそ理想だ。不犯は基督教の理想である。故に完全に實行の出來ぬは止むを得ぬ、唯基督教徒は之を理想として終生追求すべきである、と言つて世間の夫婦には成るべく兄妹の如く暮らせと勸めてゐる。

何の事だ？ 些とも判らん。完全を求めて得られんなら、悶死すべきでないか？ 不犯が理想で、女房を貰つて子を生ませてゐたら、普通の墮落に輪を掛けた墮落だ。加之も一旦貰つた女房は去るなと言うでないか？ 女房を持つのが墮落なら、何故一念發起して赤の他人になッ了へといはぬ。一生離れるなとは如何いふ理由だ？ 判らんぢやないか？

今食ふ米が無くて、ひもじい腹を抱へて考へ込む私達だ。そんな伊勢屋の隱居が心學に凝り固まつたやうな、そんな暢氣な事を言つて生きちやゐられんー！

四十一

其後間もなく雪江さんのお婿さんが極つた。お婿さんが極ると、私は何だか雪江さんに欺かれたや

うな心持がして、口惜しくて耐らなかつたから、國では大不承知であつたけれど、口實を設けて體よく小狐の家を出て下宿して了つた。

馬鹿な事には下宿してから、雪江さんが萬一鬱いではゐぬかと思つて、態々樣子を見に行つた事が二三度ある。が、雪江さんはいつも一向鬱いで得なかつた。反つてお婿さんが極つて怡々してゐるやうだつた。それで私も愈々忌々しくなつて、もう餘り小狐へも足踏せぬ中に、伯父さんが去る地方の郡長に轉じて、家族を引纏めて赴任して了つたので、私も終に雪江さんの事を忘れて了つた。これでお終局だ。

餘り平凡だ、下らない。こんなのは單純な性慾の發動といふもので、戀ではない、戀はも少と高尙な精神的の物だと、高尙な精神的の人は言ふかも知れん。然うかも知れん。唯私のやうな平凡な者の戀はいつも斯うだ。先づ無意識或は有意識に性慾が動いて滿足を求めるから、理性や趣味性が動いて其相手を定めて、始めて其處に戀が成立する。初から性慾の動かぬ場合に戀はない。異性でも親兄弟に戀をせぬのは其爲だ。靑年の時分には、性慾が猛烈に動くから、往々理性や趣味性の手を待たんで、自分と盲動して撞着つた者を直相手にする。私の雪江さんに於けるが、卽ち殆ど其だ。私共の戀の本體はいつも性慾だ。性慾は高尙な物ではない、が、下劣な物とも思へん。中性だ、インヂフエレントの物だ。私共の戀の下劣に見えるのは、下劣な人格が反映するので、本體の性慾が下劣であるのではな

い。

で、私の性慾は雪江さんに戀せぬ前から動いてゐた。から、些とも不思議でも何でもないが、雪江さんといふ相手を失つた後も、私の戀は依然として胸に殘つてゐた。唯相手のない戀で、相手を失つて彷徨してゐる戀で、其本體は矢張り滿足を求めて得ぬ性慾だ。露骨に言つて了へば、誠に愛想の盡きた話だが、此猛烈な性慾の滿足を求むるのは、其時分の私の生存の目的の——全部とはいはぬが、過半であつた。

これは私ばかりでない、私の友人は大抵皆然うであつたから、皆此頃からポツ〳〵所謂「遊び」を始めた。私も若し學資に餘裕が有つたら、矢張り「遊」んだかも知れん。唯學資に餘裕がなかつたのと、神經質で思切つた亂暴が出來なかつたのとで、遊びたくも遊び得なかつた。

友人等は盛に「遊」ぶ、亂暴に無分別に「遊」ぶ。其を觀てゐると羨ましい。が、弱い性質の癖に、極めて負惜しみだつたから、私は一向羨ましさうな顏もしなかつた。年長の友人が誘つても私が應ぜぬので、調戲に、私は一人で墮落して居るのだらうといふやうな事を言つた。恥かしい次第だが、推測通りであつたので、私は赫となつた。血相を變へて、激論を始めて、果は毆合までして、遂に其友人とは絕交して了つた。

斯うして友人と喧嘩迄して見れば、意地としても最う「遊」ばれない。で、不本意ながら謹直家に

なつて、而して何ともえたいの知れぬ、謂れのない煩悶に囚はれてゐた。

四十二

あゝ、今日は又頭がふら〳〵する。此樣な日にや碌な物は書けまいが、一日拔くも殘念だ。向鉢卷でやッつけろ！

で、私は性慾の滿足を求めても得られなかつたので、煩悶してゐた。何となく世の中が悲觀されてならん。友人等は「遊」ぶ時には大に「遊」んで、勉强する時には大に勉强して、何の苦もなく、面白さうに、元氣よく日を送つてゐる。それを觀てゐると、私は癪に觸つて耐らない。私の煩悶して苦しむのは何となく友人等の所爲のやうに思はれる。で、責めてもの腹慰せに、薄志の弱行のと口を極めて友人等の公然の墮落を罵つて、而して私は獨り超然として、內々で墮落してゐた。若し友人等の墮落が陽性なら、私の墮落は陰性だつた。友人等の墮落が露骨で、卒直で、男らしいなら、私の墮落は……あゝ、何と言はう？　人間の言葉で言ひやうがない。私は畜生だつた……

が、こつそり一人で墮落するのは餘り沒趣味で、どうも夫では趣味性が滿足せぬ。どうも矢張異性の相手が欲しい。が、其相手は一寸得られぬので、止むを得ず當分文學で其不足を補つてゐた。文學なら人聽も好い。これなら左程錢も入らぬ。私は文學を女の代りにして、文學を以て墮落を潤色してゐたのだ。

私の謂ふ文學は無論美文學の事だ。殊に小說だ。小說は一體如何いふものだか、知らん、唯私の眼に映ずる小說は人間の墮落を潤色するものだ。通人の話に、道樂の初は唯色を漁する、膏肓に入ると、段々贅澤になつて、唯色を漁するのでは面白くなくなる、惚れたとか腫れたとか、情合で異性と絡むで、唯の漁色に趣を添へたくなると云ふ。其處だ、其處が卽ち文學の需要の起る所以だ。少くも私は然うであつた。で、此目的で、最初は小狐に居た頃喰附いた人情本を引續き耽讀してみたが、數を累ねると、だん〳〵贅澤になつて、もう人情本も鼻に附く。同じ性慾の發展の描寫でも、も少し趣味のある描寫を味はつてみたい。そこで、種々と小說本を涉獵して、終に當代の大家の作に及んで見ると、流石は明治の小說家だ、性慾の發展の描寫が巧に人生觀などで潤色されてあつて、趣味がある、面白い。斯ういふ順序で私の想像で墮落する病は益々膏肓に入つて、終には西洋へ迄手を出して、ヂッケンスだ、サッカレーだ、ゾラだ、ユゴーだ、ツルゲーネフだ、トルストイだ、といふ人達の手を藉りて人並にしてゐれば、中性のインヂフエレントの性慾を無理に不自然な病的の物にして、クラフトエービングやフオレールの著書中に散見するやうな色情狂に想像で成濟まして、而して獨り高尙がつてゐた。

いや、獨り高尙がつてゐたのでない。それには同氣相求めて友が幾人も出來た。同縣人で豫備門か

ら後文科へ入つた男が有つたが、私は殊に其感化を受けた。あゝ、皆自分が悪かつたので、人を怨んでは濟まないが、私は今でも此男に逢ふと、何とも言へぬ厭な心持になる、儘になるなら刺違へて死んで了ひたく思ふ事もある。

四十三

私が感化を受けた友といふのは私より一つ二つ年上であつた。文學が專門だから、文學書は私より餘計讀んでゐたといふ丈で、何でもない事だが、それを私は大層偉いやうに思つてゐた。まだフアウストを讀まぬ時、フアウストの話を聽かされる。なに、友は愚にも附かん事を言つてゐるのだが、其愚にも附かん事を、人生だ、智慾だ、煩悶だ、肉だ、墮落だ、解脫だ、といふやうな意味の有り氣な言葉で勿體を附けて話されると、何だか難有くなつて來て、之を語る友は偉いと思つた。こんな馬鹿氣た話はない。友は唯私より少し早くフアウストといふ古本を讀んだ丈の事だ。讀んで分つた所で、フアウストが何程の物だ？　技巧の妙を除いたら、果してどれ程の價値がある？　況や友は曖昧な語學の力で分らん處を飛ばし〳〵讀んだのだ、讀んで幼稚な頭で面白いと感じた丈けだ、それも聞怯して、從頭面白いに極めて掛つて、半分は雷同で面白いと感じた丈けだ。讀んで十分に味はひ得た所で、どうせ人間の作つた物だ、左程の物でもあるまいに、それを此樣な讀方をして、難有がつて、偶之を

讀まぬ者を何程劣等の人間かのやうに見下し、得意になつて語る友も友なら、其を聽いて敬服する私も私だ。心ある人から觀たら、嘸ぞ苦々しく思はれたらう。

此友から私は文學の難有い譯を種々と說き聽かされた。今ではもう大抵忘れて了つたけれど、何でも史學は眞理に新しい形を賦して其生命を直接に具體的に再現するものだ、とか聽かされて、感服した。自然の眞相は普通人に判らぬ、詩人が其主觀を透して描いて示すに及んで、始めて普通人にも朧氣に分つて人間の實となる、とか聽かされて、又感服した。戀には人間の眞髓が動く、とか聽かされて、又感服したが、此樣な事は皆愚言だ、世迷言だ。空想に生命を託して人生を傍觀するばかりで、古本と首引して瞑想するばかりで、人生に生命を託して人生と共に浮沈上下せんでも、人生の活機に觸れんでも、活眼を以て活勢を機微の間に察し得んでも、如何かして人生が判るものとしても、友のいふやうな其樣な文學は、何處かで空想した文學で、文學の實際でない。文學の實際は人間の墮落を潤色して、懦弱な人間を更に懦弱にするばかりだ。私の觀方は偏してゐるといふか？　唯弊を見て利を見ぬといふか？　しかし利よりも弊の勝つたのが卽ち文學の實際ではないか？　私の觀方より文學の實際が旣に弊に偏して居るではないか？

あゝ、しかし、文學を責めるより、友を責めるより、自ら責めた方が當つてゐやう。私のやうな斗筲な者は、例へば聖賢の遺書を讀んでも、矢張害を受けるかも知れん。私は自然だ人生だと口には言

つてゐたけれど、唯書物で其樣な言葉を覺えたゞけで、意味が能く分つてゐるのではなかつた。意味も判らぬ言葉を弄んで、いや、言葉に弄ばれて、可惜浮世を夢にして渡つた。詩人と名が附きや、皆普通の人より勝つてるやうに思つてゐた。小說、殊に輸入小說には人生の眞相が活字の面に浮いてゐるやうに思つてゐた。西洋の詩人は皆東洋の詩人に勝るやうに思つてゐた。作の新舊を論じて其價値を定めてゐた。自分は此樣な下らん眞似をしてゐながら、他の額に汗して着實の浮世を渡る人達が偶文壇の事情に通ぜぬと、直ぐ俗物と罵り、俗衆と罵つて、獨り自ら高しとしてゐた。獨り自ら高しとする一方で、想像で姦淫して、一人で墮落してゐた。

あゝ、恥かしくて顏が熱る。何たる苦々しい事であつた。私は當時の事を想ひ出す度に、人通りの多い十字街に土下座して、通る人毎に、踏んで、蹴て、唾を吐懸けて貰ひ度いやうな心持になる……

四十四

文學の毒は中られた者は必ず終に自分も指を文學に染めねば止まぬ。私達が卽ち然うであつた。先づ友が何か下らぬ物を書いて私に誇示した。すると私も直ぐ卑しい負ぬ氣を出して短篇を書いた。どうせ碌な物ではない。筋はもう忘れて了つたが、何でも自分を主人公にして、雪江さんが相手の女主人公で、紛紜した擧句に幾度となく姦淫するのを、あやふやな理想や人生觀で紛らかして、高尙めか

してすぢり捩つた物であつたやうに記憶する。自惚は天性だから、書上げると、先づ自分と自分に滿足して、これなら當代の老大家の作に比しても左して遜色は有るまい、友に示せたら必ず驚くと思つて、示せたら、友は驚かなかつた。好い處もあるが、もう一息だと言ふ樣なことをいふ。私は非常に不平だつた。が、局量の狹い者に限つて、人の美を成すを喜ばぬ。人を褒れば自分の器量が下るとでも思ふのか、人の爲た事には必ず非難を附けたがる、非難を附けてその非難を附けたのに必ず感服させたがる。友には其癖があつたから、私は友の評を一概に其癖の言はせる事にして了つて、實に卑劣な奴だと思つた。

何とかして友に鼻を明させて遣りたい。それには此短篇を何處かの雜誌へ載せるに限ると思つた。雜誌へ載せれば、私の名も世に出る、萬一したら金も獲られる、一擧兩得だといふやうな、愚劣な者の常として、何事も自分に都合の好い樣にばかり考へるから、其樣な蟲の好い事を思つて、友には內々で種々と奔走して見たが、如何しても文學の雜誌に手蔓がない。其中に或人が其は旣に文壇で名を成した誰かに知己になつて、其人の手を經て持込むが好いと敎へて吳れたので、成程と思つて、早速手蔓を求めて某大家の門を叩いた。

某大家は其頃評判の小說家であつたから、立派な邸宅を構へてゐやうとも思はなかつたが、定めて瀟洒な家に住つて閑雅な生活をしてゐるだらうと思つて、根岸の其宅を尋ねて見ると、案外見すぼら

しい家で、文壇で有名な大家のこれが住居とは如何しても思はれなかつた。家も見窄らしかつたが、主人も襟垢の附いた、近く寄つたら悪臭い匂ひが紛としさうな、銘仙か何かの衣服で、銀縁眼鏡で、汚い髯の處斑に生えた、土氣色をした、一寸見れば病人のやうな、陰氣な、くすんだ人で、ねち〳〵とした辯で、面を看合せると急いで俯向いて了ふ癖がある。通されたのは二階の六疊の書齋であつたが、庭を瞰下すと、庭には樹から樹へ紐を渡して襁褓が幕のやうに列べて乾してあつて、下座敷で赤兒のピイ〳〵泣く聲が手に取るやうに聞える。

私は甚く輕蔑の念を起した。殊に庭の襁褓が主人の人格を七分方下げるやうに思つたが、求むる所があつて來たのだから、質樸な風をして誰も言ふやうな世辭を交ぜて、此人の近作を讀んで非常に敬服して敎へを乞ひに來たやうにいふと、先生疊を凝と視詰めて、あれは咄嗟の作で、書懸ると親類に不幸が有つたものだからといふやうな申譯めいた事を言つて、言外に、落着いて書いたらといふ餘意を含める。私は腹の中で下らん奴だと思つたが、感服した顏をして媚びたやうな事を言ふと、先生萬更厭な心持もせぬと見えて、稍調子附いて來て、夫から種々文學上の事に就いて話して呉れた。流石は大家と謂はれる人程あつて、驚くべき博覽で、而も一家の見識を十分に具へてゐて、ムツツリした人と思ひの外話が面白い。後進の私達は何の點に於ても敬服しなければならん筈であるが、それで私は尙ほ輕蔑の念を去る事が出來なかつた。で、終局は只ほんの看て貰へば好いやうに言つて、雜誌へ周

旋を賴む事は曖にも出さないで、持つて行つた短篇を置いて、下宿へ歸つて來てから、又下らん奴だと思つた。

四十五

某大家は兎に角大家だ。私は靑二歲だ。何故私は此人を輕蔑したのか？　襟垢の附いた着物を着てゐたとて、庭に襁褓が乾してあつたとて、平生名利の外に超然たるを高しとする私の眼中に貧富の差は無い筈である。か、私は實際先生の貧乏臭いのを看て輕蔑の念を起したのだ。矛盾だ。矛盾ではあるが、矛盾が私の一生だ。

醫者の不養生といふ。平生思想を生命として、思想に役せられてゐる人に限つて、思想が薄弱で正可の時の用に立たない。私の思想が矢張り其だつた。

けれど、思想々々と大層らしく言ふけれど、私の思想が一體何んだ？　大抵は平生親しむ書卷の中から拾つて來た、謂はゞ古手の思想だ。此の蒼褪めた生氣のない古手の思想が意識の表面で凝つて髣髴として別天地を拓いてゐる處を見ると、理想だ、人生觀だといふやうな種々の觀念が美しい空想の色彩を帶びて其中に浮游してゐて、腹が減いた、錢が欲しいといふ現實界に比べれば、迥に美しいやうに見える。浮氣な不眞面目な私は直ぐ好い處を看附けたといふ氣になつて、此別天地へ入り込んで、

其處から現實界を眺めて罵しつてゐたのだ。我存在の中心を古手の思想に託して、夫で自ら高しとしてゐたのだ。が、私の別天地は譬へば盥盆へ吹懸けた息氣のやうな物だ。現實界に觸れて實感を得ると、他愛もなく剝げて了ふ、剝げて木地が露はれる。古手の思想は木地を飾つても、木地を蝕する力に乏しい。木地に食入つて吾を磨くのは實感だのに、私は第一現實を輕蔑してゐたから、その實感を得る場合が少く、偶々得た實感も其取扱を誤つてゐたから、木地の吾を磨く足にならなかつた。從つて、何程古手の思想を積んで見ても、木地の吾は矢張り故のふやけた、秩序のない、陋劣な吾であつた。

かうして別天地と木地の吾とは別であつたから、別天地に遊んでゐる時と、吾に戻つた時とは、勢ひ矛盾する。言行は始終一致しない。某大家に對しても、未だ會はね中は多少の敬意を有つてゐたけれど、一たび其人の土氣色した顏が見え、襟垢が見え、襁褓が見えて想像中の人が現實の人となると、木地の吾が、貧乏だから下らんと、別天地では流行せぬ論法で論斷して之を輕蔑して了つたのだ。

唯當時私はまだ若かつたから、陋劣な吾にしても、私の吾には尙ほ多少の活氣が有つて、多少の活機を捉へ得た。文壇の大家になると、古手の思想が凝固まつて、其人の吾は之に壓倒せられ、纔に殘喘を保つてゐるやうなのが幾らもある。斯ういふ人が現實に觸れると氣の毒な程他愛の無い人になる。某大家が卽ち其であつた。だから、人生を論じ、自然を說いて、微を拆き、幽を闡く頭はあつても、

目前で靑二歲の私が輕蔑してゐるのが、先生には終に見えなかつたのだ。

四十六

二三日して行つて見ると、先生も友と同じ樣に、好い處も有るが、もう一息だといふやうな事を言ふ。嘘だ。好い處も何も有るのぢやない。不出來だと直言が出來なくて斯う言つたのだ。先生も目が見えん人だが、私も矢張自分の事だと目が見えんから、其を眞に受けて、書直して持つて行くと、先生が氣の毒さうに趣向をも少し變へて見ろと云ふ。言ふ通りに趣向をも少し變へて持つて行くと、もう先生も仕方がない、不承々々に、是で好いと云ふ。なに是で好い事は些も無いのだが、先生は氣が弱くて、もう然う〳〵は突戻し兼ねたのだ。先生に曰はせると、之を後進に對する同情だといふ。何の同情のことが有るものか！　少しでも同情が有るなら、頭から叱附けて、文學などに斷念させるが好いのだ。是が同情なら、同情は「煮え切らん」の別名だ。どうせ思想は囚はれて活機の分らぬ人の爲る事だから、お飾の思想を一枚剝ればいつも此樣な愛想の盡きた物が出て來るに不思議はないが、此方も此方だ、其樣な事は少しも見えない。本當に是で好い事だと思つて、其言葉の尾に縋つて何處かの雜誌へ周旋をと賴んだ。こんなのを盲目の紛れ當りと謂ふのだらう。機を制せられて先生も仕方がなさゝうに是も受込む。私達の應對は活きた人には側で聽いてゐられたものであるまい。

一月程して私の處女作は或雜誌へ出た。初戀が霜げて物にならなかつた事を書いたのだからこて、題は初霜だ。雪江さんの記念に雪江と署名した。先生が筆を加へて私の文は行方不明になつた處も大分あつたが、兎も角も自分の作が活字になつたのが嬉しくて〳〵耐らない。雜誌社から送つて來るのを待ちかねて、近所の雜誌店へ駈附けて買つて來て、何遍か繰返して讀んでも〳〵讀飽かなかつた。眞面目な人なら、此處らで自分の愚劣を悟る所だらうが、私は反つて自惚れて、此分で行けば行々は日本の文壇を震駭させる事も出來ようかと思つた。

聊かながら稿料も貰へたから、二三の友を招いで、近所の牛肉店で祝宴を開いて、其晩遂に「遊」びに行つた。其時案外不愉快であつたのは曾て記した通り。皆嬉しさの餘りに前後を忘却したので。

これが私の小說を書く病附きで又「遊び」の皮切であつたが、それも是も緣の無い事ではない。私の身では思想の皮一枚剝れば、下は文心卽淫心だ。だから、些とも不思議はないが、同時に兩方に夢中になつてる中に、學校を除籍された。なに、月謝の滯りが原因だつたから、復籍するに造作はなかつたが、私は考へた、「寧その事小說家になつて了はう。法律を學んで望み通り政治家になれたつて、仕方がない。政治家になつて、可惜一生を物質的文明に獻げて了ふより、小說家になつて精神的文明に貢獻した方が高尙だ。其方が好い……」どうも仕方がない。活眼を開いて人生の活相を觀得なかつた私が、例の古手の舊式の思想に捕はれて、斯う思つたのは仕方がないが、夫にしても、同じ思想に捕はれ

るにしても、も少し捕へられ方が有りさうなものだつた。物心一如と其樣な印度臭い思想に捕はれるではないが、所謂物質的文明は今世紀の人を支配する精神の發動だと、何故思はれなかつたらう？ 物質界と表裏して詩人や哲學者が顧みぬ精神界が別にあると、何故思はれなかたらう？ 人間の意識の表面に浮んだ別天地の精神界と違つて、此精神は着實で、有力で、吾々の生存に大關係があつて、政治家は卽ち此精神界を相手に仕事をするのだと、何故思はれなかつたらう？ 此道理をも考へて、其上で去就を決したのなら、眞面目な決心とも謂へやうが……あゝ、しかし、何の道思想に捕はれては仕方がない。私は思想で、自ら欺いて、其樣淺墓な事を思つてゐたが、思想に上らぬ實際の私は全く別の事を思つてゐた。如何な事を思つてゐたかは、私の言ふ事では分らない、是から追々爲る事で判る。

四十七

私は其時始めて文士にならうと決心した、トサ後には人にも話してゐたけれど事實でない。私は生來未だ曾て決心をした事の無い男だ。いつも形勢が既に定つて動かすべからずなつて、其形勢に制せられて始めて決心するのだから、學校を除籍せられたばかりでは、未だ決心が出來なかつた。唯下宿に臥轉んでグヅリ〳〵として文士に爲りさうになつてゐたのだ。

始めて決心したのは、如何してか不始末が國へ知れて父から驚いた手紙の來た時であつた。行懸り

で愚圖々々してはゐられなくなつたから、始めて斯うと決心して事實を言つて同意を求めてやると、父からは怒つた手紙が來る、母からは泣いた手紙が來る。親達が失望して情ながる面は手紙の上に浮いて見えるけれど、かうなると妙に剛情になつて、因襲の陋見に囚はれてゐる年寄の白髮頭を冷笑してゐた。親戚の某が用事が有つて上京した序に、私を連れて歸らうとしたが、私は頑として動かなかつた。そこで學資の仕送りは絶えた。

かうなるは最初から知れてゐながら、私は弱つた。仕方がないから、例の某大家に縋つて書生に置いて貰はうとすると、先生は相變らずグヅリ〳〵と煮切らなかつたが、奥さんが飽迄不承知で、先生を差措いて、御自分の口から、斷然斷られた。私は案外だつた。頼めば二つ返事で引受けて呉れるとばかり思つてゐたから、親戚の者が連れて行かうとした時にも、言はでもの廣言迄吐いて拒んだのだが、かう斷られて見ると、何だか先生夫婦に欺かれたやうな氣がして、腹が立つて耐らなかつた。世間の人は皆私の爲に生きてゐるやうな氣でゐたからだ。

もう斯うなつては、仕方がない、書けても書けんでも、筆で命を繋ぐより外仕方がない。食ふと食はぬの境になると、私でも必死になる。必死になつて書いて〳〵書捲つて、その度に、惡感情は抱いてゐたけれど、仕方がないから、某大家の所へ持つて行つて、筆を加へて貰つた上に、賣つて迄貰つてゐた。其が爲には都合上門人とも稱してゐた。然うして一二年苦しんでゐる中に、どうやら曲りな

りにも一本立が出來るやうになると、急に此前奥さんに斷られた時の無念を想出して、夫からは根岸のお宅へも無沙汰になつた。もう先生に餘り用はない。先生は或は感情を害したかも知れないが、先生が感情を害したからつて、世間が一緒になつて感情を害しはすまいし……と思つたのではない、決して左樣な輕薄な事は思はなかつたが、私の行爲を後から見ると、詰り然う思つたと同然になつてゐる。

先生には用が無くなつたが、文壇には用が有るから、私は廣く交際した。大抵の雜誌には一人や二人の知己が出來た。かうして交際を廣くして置くと、私の作が出た時に、其知己が餘り酷くは評して呉れぬ。無論感服などする者は一人もない。私などに感服しては見識に關はる。何かしら瑕疵を見付けて、其で自分の見識を示した上で、しかし、まあ、可なりの作だと云ふ。褒める時には屹度然う云ふ。私は局量が狹いから、批評家等が誰も許しもせぬに、作家よりも一段上座に坐り込んで、其處から曖昧な鑑識で輕卒に人の苦心の作を評して、此方の鑑定に間違ひはない、其通り思うて居れと、言はぬばかりの高慢の面附が癪に觸つて耐らなかつたが、其を彼此言ふと、局量が狹いと言はれる。成程其は事實だけれど、さう言はれるのが厭だから、始終默つて憤つてゐた。其癖批評家の言ふ所で流行の趨く所を察して、勉めて其に後れぬやうにと心掛けてゐた……いや、心掛けてゐたのではない、其樣な不見識な事は私の尤も擯斥する所だつたが、後から私の行爲を見ると矢張然う心掛けたと同然になつてゐる。

四十八

久らく文壇を彷徨してゐる中に、當り作が漸く一つ出來た。批評家等は筆を揃へて皆近年の佳作だと云ふ。私は書いた時には左程にも思はなかつたが、然う言はれて見ると、成程佳作だ。或は佳作以上で傑作かも知れん。私は不斷紛々たる世間の批評以外に超然としてゐる面色をしてゐて、實は非難されると、非常に腹が立つて、少しでも褒められると、非常に嬉しかつたのだ。

當り作が出てからは、默つてゐても、雜誌社から賴みに來る、書肆から賴みに來る。私は引張凧だ……トサ感じたので、なに二三軒からの申込が一時一寸累なつたのに過ぎなかつた。

嬉しかつたので、調子に乘つて又書くと、又評判が好い。斯うなると、世間の注目は私一身に叢まつてゐるやうな氣がして、何だか嬉しくて〳〵耐らないが、一方に於ては此評判を墜しては大變といふ心配も起つて來た。で平生は眼中に置かぬらしく言つてゐた批評家等に褒められたいが一杯で、愈々文學に熱中して、明けても暮れても文學の事ばかり言ひ暮らし、眼中唯文學あるのみで、文學の外には何物もなかつた。人生あつての文學ではなくて、文學あつての人生のやうな心持で、文學界以外の人生には殆ど何の注意も拂はなかつた。如何なる國家の大事が有つても、左程胸に響かなかつた代り、文壇で鼠がゴトリといふと、大地震の如く其を感じて騒ぎ立てた。之を又眞摯の態度だとかいつて感

服する同臭味の人が廣い世間には無いでもなかつたので、私は老人がお宗旨に凝るやうに、愈々文學に凝固まつて、政治が何だ、其日送りの遣繰仕事ぢやないか？　文學は人間の永久の仕事だ。吾々は其高尚な永久の仕事に從ふ天の選民だと、其日を離れて永久が別に有りでもするやうな事を言つて、傲然として一世を睥睨してゐた。

文學上では私は寫實主義を執つてゐた。それも研究の結果寫實主義を是として寫實主義を執つたのではなくて、私の性格では勢ひ寫實主義に傾かざるを得なかつたのだ。

寫實主義については一寸今の自然主義に近い見解を持つて、此樣な事を言つてゐた。

寫實主義は現實を如實に描寫するものではない。如實に描寫すれば寫眞になつて了ふ。現實の（眞とは言はなかつた）眞味を如實に描寫するものである。詳しく言へば、作家のサブジエクチヴキチーの即ち主觀に攝取し得た現實の眞味を如實に再現するものである。

人生に目的ありや、歸趨ありや？　其樣な事は人間に分るものでない。智の力で人生の意義を摑まむとする者は、狂せずんば、自殺するに終る。唯人生の味なら、人間に味へる。味つても〳〵味ひ盡せぬ。又味へば味ふ程味が分る。旨い。苦中にも至味はある。其至味を味はひ得ぬ時、人は自殺する。人生の味ひは無限だけれど、之を味はふ人の能力には限りがある。

唯人は皆同じ樣に人生の味ひを味ふとは言へぬ。能く料理を味ふ者を料理通といふ。能く人生を味

ふ者を藝術家といふ。料理通は料理人でない如く、能く人生を味ふ藝術家は能く人生を經理せんでも差支へはない。

道德は人生を經理するに必要だらうけれど、人生の眞味を味ふ助にはならぬ。藝術と道德とは竟に沒交渉である。

是が私の見解であつた。淺薄はさて置いて、此樣な事を言つて始終言葉に轉ぜられてゐたから、私は却て普通人よりも人生を觀得なかつたのである。

四十九

私の文學上の意見も大業だが、文學については先あ其樣な他愛のない事を思つて、浮れる積もなく浮れてゐた。で、私の意見のやうにすると、味はるゝものは人生で、味ふものは作家の主觀であるから、作家の主觀の精粗に由つて人生を味ふ程度に深淺の別が生ずる。是に於て作家は如何しても其主觀を修養しなければならん事になる。

私は行々は大文豪になりたいが一生の願だから、大に人生に觸れて主觀の修養をしなければならん。が、漠然人生に觸れるの、主觀を修養するのと言つてる中は、意味が能く分つてゐるやうでも、愈々實行する段になると、一寸まごつく。何から如何手を着けて好いか分らない。政治や實業は人生の一

現象でも有らうけれど、其樣な物に大した味はない筈である。といつて教育でもないし、文壇は始終觸れてゐるし、まあ、社會現象が一番面白さうだ。面白いといふのは其處に人生の味が濃かに味はゝれる謂である。社會現象の中でも就中男女の關係が、最も面白さうだが、其面白味を十分に味はゝうとするには自分で實驗しなければならん。それには一寸相手に困る。人の戀をするのを傍觀するのは、宛も人が天麩羅を喰つてるのを觀て其味を想像するやうなものではあるけれど、實驗の出來ぬ中は傍觀して滿足するより外仕方がない。が、新聞の記事では輪郭だけで內容が分らない。內容を知るには、戀する男女の間に割込んで、親しく其戀を觀察するに限るが、戀する男女が其處らに落こちても居ない。すると、當分まづ戀の可能を持つてゐる若い男女を觀察して滿足して居なければならん。が、若い男を觀察したつて詰らない。若い男の心持なら、自分でも大抵分る。戀の可能を持つてゐる若い女の觀察が當面の急務だ。と、かう考へ詰めて見ると、私の人生研究は詰り若い女の研究に歸着する。

で、歸着點は分つたが、矢張實行が困難だ。若い女を研究するといつて、往來に衝立つてゐて通る女に一々觸れもされん。勢ひ私の手の屆く所から研究に着手する外はないが、私の手の屆く所だと、まづ下宿屋のお神さんや下女になる。下宿屋のお神さんは大抵年を喰つてる。若いお神さんはうッかり觸れると危險だ。剩す所は下女だが、下女ではどうも喰ひ足りない。忙がしさうにしてゐる所を捉

まへて、一つ二つ物を言ふと、もう何番さんかでお手が鳴る。ヘーイと尻上りに大きな聲で返事をして、跡をも閉めずにドタ〳〵と座敷を駈出して行くのでは餘り沒趣味だ。下女が沒趣味だとすると、私の身分ではもう賣女に觸れて研究する外はないが、これも大店は金が掛り過るから、小店で滿足しなければならん。が、小店だと、相手が越後の國蒲原郡何村の産の鼻ひしやげか何かで、私等が國さでと、未だ國訛が取れないのになる。往々にして下女にも劣る。尤も是は少し他に用事も有つたから、其用事を兼ねて私は絶えず觸れてゐたが、どうしても、どう考へて見ても是では喰ひ足らん。どうも素人の面白い女に撞着つて見たい。今なら直ぐ女學生といふ所だが、其時分は其樣な者に容易に接近されなかつたから、私は非常に煩悶してゐた。

馬鹿なッ？　其樣な事を言つて、私は女房が欲しくなつたのだ。

五十

人生の研究といふやうな高尚な事でも、私なぞの手に掛ると、詰り若い女に撞着りたいなぞといふ愚劣な事になつて了ふ。普通の人なら青年の中は愚を意識して隨分愚な眞似もしようけれど、私は其を意識しなかつた。矢張私共でなければ出來ぬ高尚な事のやうに思つて、切に若い女に撞着りたがつてゐる中に、望む所の若い女が遂に向ふから來て撞着つた。

それは小石川の傳通院脇の下宿に居る時であつた。此下宿は體裁は餘り好くなかつたがそれでも所謂高等下宿で、學生は大學生が一人だつたか、二人だつたか、居たかと思ふ。餘は皆小官吏や下級の會社員ばかりで、皆朝から辨當を持つて出懸けて、午後は四時過でなければ歸つて來ぬ連中だから、晝の中は家内が寂然とする程靜かだつた。

私は此家で一番上等にしてある二階の八疊の部屋を占領してゐた。なに、一番上等といつても、元來下宿屋に建てた家だから、建前は粗末なもので、動もすると障子が乾反つて開閉に困難するやうな安普請ではあつたが、形の如く床の間もあつて、年中鐵舟先生やら誰やらの半折物が掛けてあつて、花活に花の絶えたことがない……といふと結構らしいが其代り眞夏にも寒菊が活けてあつたりする。造花なのだ。これは他の部屋も大同小異だつたが、唯た一つ他の部屋にはなくて此部屋ばかりにある、謂はゞ此部屋の特色を成す物があつた。それは姿見で、唐草模樣の浮出した紫檀贋ひの縁の、對ふと四角な面も長方形になる、勸工場仕込の安物ではあつたけれど、兎も角も是が上等室の標象として恭しく床の間に据ゑてあつた。下にもまだ八疊が一間あつたが、其處には姿見がなかつた。同じやうな部屋でありながら、間代が其處より此處の方が三割方高かつたのは、半分は此姿見の爲だつたかとも思はれる。

部屋は此通り餘り好くなかつたが、取得は南向で、多暖かで夏涼しかつた。其に一番盡頭の部屋で

階子段にも遠かつたから、他の客が通り掛りに横目で部屋の中を覗んで行く憂ひはなかつた。

も一つ好い事は――部屋の事ではないが、此家は下宿料の取立が寛大だつた。亭主は居るか居ないか分らんやうな人で、お神さん一人で繰廻してゐるやうだつたが、快活で、腹の大きい人で、少し居馴染んだ者には、一月二月、下宿料が滞つても、宜しうございます、御都合の好い時で、といつて、ビリ〳〵しない。收入の不定な私には是が何よりだつたから、私は二年越此家に下宿して居た。

或日朝から出て晝過に歸ると、帳場に看慣れぬ女が居る。後向だつたから、顔は分らなかつたが、根下りの銀杏返しで、黑縮緬だか何だかの小さな紋の附いた羽織を着て、ペタリと坐つてる後姿が何となく好かつたが、私がお神さんと物を言つてる間、其女は振向いても見ないで、默つて彼方向いて煙草を喫つてゐた。

部屋へ來る跡から下女が火を持つて來たから、捉まへて聞くと、今朝殆ど私と入違ひに尋ねて來たのださうで、何でもお神さんの身寄だとかで、車で手荷物なぞを持つて來たから、地方の人らしいと云ふ。唯其切で、下女の事だから要領を得ない。

「如何な女だい？」

「あら、今御覽なすつたぢや有りませんか？」

「後向きで分らなかつた。」

「別品ですよ、」といつて下女は莞爾〳〵してゐる。

「丸顔かい？」

「いゝえ、細面で……ね」

「色は如何なだい？　白いかい？」

下女は默つて私の面を見てゐたが、

「大層お氣が揉めますのね。何なら、もう一遍下へ行つて見ていらしッたら……」

誰にでも飜弄されると、途方に暮れる私だから、據どころなく苦笑として默つて了ふと下女は高笑して出て行つて了つた。

五十一

暮て夕飯時になつた。部屋々々へ膳を運ぶ忙がしさうな足音が廊下に轟いて、何番さんがお急ぎですよ、なぞと二階から金切聲で聒しく喚く中を、バタ〳〵と急足に二人ばかり來る女の足音が私の部屋の前で止ると、

「此方が一番さんで、夫から二番さん三番さんと順になるンですから何卒……」

といふのは聞慣れた小女の聲で、然う言棄てゝ例の通り端手なくバタ〳〵と引返して行く。

と、跡に殘つた一人が障子の外に蹲まつた氣色で、スル〳〵と障子が開いたから、見ると、彼の女だ、彼の女に違ひない。私は急いで餘所を向いて了つたから、能くは分らなかつたが、何でも下女の話の通り細面で、蒼白い、淋しい面相の、好い女だ……と思つた。年頃は二十五六……それとも七か……いや、八か……女の歳は私には薩張分らない、もう羽織はなしで、紬だか銘仙だか、夫とも更と好い物だか、其も薩張分らなかつたが、何しても半襟の掛つた柔か物で、前垂を締めて居たやうだつた。障子を明けると、上目でチラと私の面を見て、一寸手を突いて辭儀をしてから、障子の影の膳を取上げて、臆した體もなくスル〳〵と内へ入つて來て、「どうもお待たせ申しまして」といひながら、狼狽してゐる私の前へ据ゑた手先を見ると、華奢な蒼白い手で、藥指に燦と光つてゐたのは本物のゴールド、リングと見た。正可鍍金ぢや有るまい。飯櫃も運び込んでから、

「お湯はございますか知ら。」

と火鉢の藥鑵を一寸取つて見て、

「まだ御座いますやうですね。ぢや、お後にしませう。御緩くりと……」

と會釋して、スッと起つた所を見ると、スラリとした後姿だ。あゝ、好い風だ、と思つてゐる中に、もう部屋を出て了つて、一寸小腰を屈めて、跡を閉めてバタ〳〵と廊下を行く。

別段異つた事もない。小娘でないから、少しは物慣れた處もあつたらうが、其は當然だ。風は一寸

垢脫のした處が有つたかも知れぬが、夫とても浮氣男の眼を惹く位の價値で、大した女ではなかつたのに、私は非常に感服して了つた。尤も私の不斷接してゐる女は、厭にお澄しだつたり、厭に馴々しかつたりして、一見して如何にも安ッぽい女ばかりだつたから、然ういふのを看慣れた眼には少しは異つて見えたに違ひない。

何者だらうと考へて見たが、分らない。或は黑人上りかとも思つてみたが、下町育ちは山の手の人とは違ふ。此處のお神さんも下町育ちだと云ふ。さういへば、何處か樣子に似た處もある。或は下町育ちかも知れぬとも思つた。

素性は分らないが、兎に角面白さうな女だから、此樣なのを味はつたら、女の眞味が分るかも知れん。今に膳を下げに來たら、今度こそは勇氣を振起して物を言つて見よう、私のやうに默つて居ては、何時迄經つても接近は出來ん、なぞと思つてゐると、隣室で女の笑ひ聲がする。下女の聲ではない。今のに違ひない。隣の俗物め、もう捉まへて戯言でも言つてると見える。

五十二

其晩膳を下げに來るかと心待に待つてゐたら、其には下女が來て、女は顏を見せなかつた。翌朝は女が膳を運んで來たが、卒となると何となく氣怯れがして、今は忙しさうだから、晝の手隙の時にし

よう、といふ氣になる。で、言ふべき文句迄拵へて、搔くやうにして晝を待つてゐると、晝が來て、成程手隙だから、他の者は遊んでゐて小女が膳を運んで來る。

三四日經つた。いつも女の助けるのは朝晩の忙しい時だけで、晝は顏も出さない。考へて見ると、奉公人でないから其筈だが、私は失望した。顏は度々合せるから漸く分つたが、能く見ると、雀斑が有つて、生際に少し難が有る。髮も更少し濃かつたらと思はれたが、併し何となく締りのあるキリッとした面相で、私は矢張好いと思つた。名はお糸といつてお神さんの姪だとか云ふ。皆下女からの復聞だ。

何とかして一日も早く接近したいが、如何も顏を合せると、物が言へなくなる。晝間廊下で行逢つた時など、女は小腰を屈めて會釋するやうな、せんやうな、曖昧な態度で摺脫けて行く。其樣な時に接近したがつてる事は色にも出さずに、ヒョイと、輕く、些と話に入らッしやい、とか何とか言つた ら最後には來るやうになるかも知れんとは思ふけれど、然う思ふばかりで、私の口は重たくて、ヒョイと、輕く、其樣な事が言へない。

度々面を合せても物を言はんから、段々何だか妙に隔てが出來て來て、改めて物を言ふのが最う變になつて來る。此分だと、餘程何か變つた事が、例へば、火事とか大地震とかがあつて、人心の常軌を逸する場合でないと、隔ての關を破つて接近されなくなりさうだ。あゝ、初て部屋へ來た時何故私

は物を言はなかつたらうと、千悔萬悔、それこそ臍を噬むけれど、追附かない。然るに、私は接近が出來ないで此樣なに煩悶してゐるのに、隣の俗物は苦もなく日增しに女に親しむ樣子で、物を言交す五分間がいつか十分二十分になる。何だか知らんが、睦まじさうに密々話をしてゐるやうな事もある。一度なんぞ女に背中を叩かれて俗物が莞爾々々してゐる所を見懸けた。私は氣が氣でない……

藻搔いてゐると、確か女が來てから一週間目だつたかと思ふ、朝からのビショ〳〵降りが晝過ぎても未だ止まない事があつた。鬱陶敷て氣が滅入つて幾ら書いても思ふ樣に書けないから、私はホッとして、頭を抱へて、仰向に倒れて茫然としてゐたが、

「早く如何かせんと不好！」

と判然と獨言をいつて起反つた。獨言は小說に關した事ではないので、女の事なので。

すると、餘り遠くでない、去迚近くでもない何處かで、ポッン〳〵と意氣な音がする。隣の家で能く琴を浚つてゐるが、三味線を彈いた事はない。それに隣にしては近過ぎる。家には彈く者は無い筈だが……と耳を澄してゐると、軈て歌ひ出す聲は如何しても家だ。例のに違ひない。

私は起上つてブラリと廊下へ出た。

五十三

廊下へ出て耳を澄して見たが、三味線は聞えても矢張歌が能く聞えない。が、愈々例のに違ひないから私は意を決して裏梯子を降りて、大廻りをして、竊そり臺所近くへ來て見ると誰も居ない。皆其隣の家の者の住居にしてゐる座敷に塊まつてゐるらしい。好い鶯梅だと、私は緣側に佇立んで、庭を眺めてゐる風で、歌に耳を傾けてゐた。

好い聲だ。たッぷりと餘裕のある聲ではないが、透徹るやうに清い、何處かに冷たい處のあるやうな、といふと水のやうだが、水のやうに淡くはない、シンミリとした何とも言へぬ旨味のある聲だ。力を入れると、凛と響く。脫くと、スウと細く、果は藕の糸のやうになつて、此世を離れて暗い無限へ消えて行きさうになる時の儚さ便りなさは、聽いてゐる身も一緒に消えて行きさうで、早く何とかして貰ひたいやうな、もう〳〵耐らぬ心持になると、消えかけた聲が又急に盛返して來て、遂にパッと明るみへ出たやうな氣丈夫な聲になる。好い聲だ。節廻しも巧だが、聲を轉がす處に何とも言へぬ妙味がある。ズッと張揚げた聲を急に落して、一轉二轉三轉と急轉して、何かを潜つて來たやうに、パッと又浮上るその面白さは……なぞと生意氣をいふけれど、一體新內をやつてるのだか、淸元をやつてるのだか、私は夢中だつた。

俗曲は分らない。が、分らなくても、私は大好きだ。新內でも、淸元でも、上手の歌ふのを聽いてゐると、何だか斯う國民の精粹とでもいふやうな物が、髣髴として意氣な聲や微妙な節廻しの上に顯

はれて、吾心の底に潜む何かに觸れて、何かゞ想ひ出されて、何とも言へぬ懷かしい心持になる。私は之を日本國民の二千年來此生を味うて得た所のものが、間接の思想の形式に由らず、直に人の肉聲に乘つて、無形の儘で人心に來り逼るのだとか言つて、分明な事を不分明にして其處に深い意味を認めてゐたから、今お糸さんの歌ふのを聽いても、何だか其樣なやうに思はれて、人生の粹な味や意氣な味がお糸さんの聲に乘つて、私の耳から心に染込んで、生命の髓に觸れて、全存在を撼がされるやうな氣がする。

お糸さんの顏は緣側からは見えないけれど、屹度少しポッと上氣して、薄目を開いて、恍惚として我か人かの境を迷ひつゝ、歌つてゐるに違ひない。所謂神來の興が中に動いて歌に現を脫かしてゐるのは歌ふ聲に魂の入つてゐるので分る。恐らくもう側でお神さんや下女の聽いてることも忘れてゐるだらう。お糸さんは最う人間のお糸さんでない。人間のお糸さんは何處へか行つて了つて、體は俗曲の精靈が宿つてゐる、而してお糸さんの美音を透して直接に人間と交渉してゐる。お糸さんは今俗曲の巫女である。薩滿である。平生のお糸さんは知らず、此瞬間のお糸さんはお糸さん以上である。いや、人間以上で神に近い人である。

斯う思ふと、時としては斯うして人間を離れて藝術の神境に出入し得るお糸さんは尋常の人間でないやうに思はれる。お糸さんの人と爲りは知らないが、歌に於て三味線に於てお糸さんは確に一個の

藝術家である、事に寄ると、藝術家と自覺せぬ藝術家である。要するに俗物でない。

私も不肖ながら藝術家の端くれと信ずる。お糸さんの人となりは知らないでも、藝術家の心は唯藝術家のみ能く之を知る。此下宿に客多しと雖も、お糸さんを知る者は私の外にあるまい。私の心を解し得る者も、お糸さんの外には無い筈である……と思ふと、まだ碌に物を言つた事もないお糸さんだけれど、何だかお糸さんが生れぬ前からの友のやうに思はれて、私は……あゝ、私は……

五十四

私の下宿ではいつも朝飯が濟んで下宿人が皆出拂つた跡で、綏くり掃除や雑巾掛をする事になつてゐた。お糸さんは奉公人でないから雑巾掛には關係しなかつたが、掃除だけは手傳つてゐたので、いつも其時分になるとお掃除致しませうと言つては私の部屋へ來る。私は内々其を心待にしてゐて、來ると急いで部屋を出て緣側を彷徨く。彷徨きながら、見ぬ振をして横目でチョイ〳〵見てゐると、お糸さんが赤い襷に白地の手拭を姉樣冠りといふ甲斐々々しい出立で、私の机や本箱へバタ〳〵と拂塵を掛けてゐる、其を此方から見て居ると、お糸さんが何だか斯う私の何かのやうな氣がして、嬉しくなつて、斯うした處も悪くないなと思ふ。

ところが、お糸さんが三味線を彈いた翌朝の事であつた。萬事が常よりも不手廻りで、掃除にもい

つも來るお糸さんが來ないで、小女が代りに來たから、私は不平に思つて、如何したのだと詰るやうにいふ、今日はお竹どんが病氣で寢てゐるので、受持なんぞの事を言つてゐられないのだと云ふ。其なら仕方が無いやうなものだけれど、小女のは掃除するのぢやなくて、埃をほだてゝ行くのだから、私が叱り附けてやつたら、小女は何だか沸々言つて出て行つた。

暫くして用を達しに行かうと思つて、ヒョイと私が部屋を出ると、何時來たのか、お糸さんがツイ其處で、着物の裾をクルッと捲つた下から、華美な長襦袢だか腰卷だかを出し掛けて、倒さになつて切々と雑巾掛けをしてゐた。私の足音に振向いて、お邪魔樣といつて、身を開いて通して呉れて、お糸さんは何とも思つてゐぬ樣だつたが、私は何だか氣の毒らしくて、急いで二階を降りて了つた。

用を達してから出て來て見ると、手水鉢に水が無い。小女は居ないかと視廻す向うへお糸さんが、もう雑巾掛も濟んだのか、バケツを提げてやつて來たが、ト見ると、直ぐ氣が附いて、

「おや、さうだッけ……只今直ぐ持つて參りますよ。」

と駈出して行つて、臺所から手桶を提げて來て、

「お待遠樣。」

とザッと水を覆ける時、何處の部屋から仕掛けたベルだか、帳場で氣短に消魂しくチリチリチリン

と鳴る。

お神さんが臺所から面を出して、

「誰も居ないのかい？　十番さんで先刻からお呼びなさるぢやないか。」

「へい、只今……」

とお糸さんが矢張下女並の返事をして、

「お三どん新參で大狼狽……」

と私の面を見て微笑しながら、一寸滑稽た手付をしたが、其儘所體崩して駈出して、表梯子をトントン〳〵と上つて行く。

私が手を洗つて二階へ上つて見たら、お糸さんは既う裾を卸したり、襷を外したりして、整然とした常の姿になつて、突當りの部屋の前で膝を突いて、何か用を聽いてゐた。

私は部屋へ歸つて來て感服して了つた。お糸さんは歌が旨い、三味線も旨い、女ながらも立派な一個の藝術家だ。その藝術家が今日は如何だらう？　お竹が病氣なら仕方がないやうなものゝ、全で下女同樣に追使はれてゐる。下女同樣に追使はれて、慣れぬ雜巾掛までさせられた上に、無理な小言を言はれても、格別厭な面もせずに、何とか言つたッけ？　然う〳〵、お三どん新參で大狼狽といつて微笑……偉い！　餘程氣の練れた者でなければ、如彼は行かぬ。これがお竹でゞも有らうものなら、直ぐ見たくでもない面を膨らして、沸々口小言を言ふ所だ。それを常談事にして了つて、お三どん新參で

大狼狽といつて微笑……偉い！

五十五

感服の餘り、私は何とかして此自覺せぬ藝術家に敬意を表したいと思つたが、併し奉公人同樣に金など包んでは出されない、何でも品物を呈するに限ると、何故だか獨りで極めて掛つて、慘澹たる苦心の末、雪江一代の智慧を絞り盡して、其翌日の晝過ぎ本鄕の一友人を尋ねて、嘘八百を陳べ立て、其細君を誘かして半襟を二掛見立てゝ買つて來て貰つた。値段の處も私にしては一寸奮んだ積だつた。

早く之をお糸さんに呈して其喜ぶ顏を見たいと、此處らは未來の大文豪も俗物と餘り違はぬ心持になつて何だか切りに嬉しがつて、莞爾して下宿へ歸つたのは丁度夕飯時分だつたが、火を持つて來たのは小女、膳を運んで來たのはお竹どんで、お糸さんは笑聲が餘所の部屋でするけれど、顏も見せない。私は何となく本意なかつた。

待佗びて獨りで焦れてゐると、軈て目差すお糸さんが膳を下げに來たから、此處ぞと思つて、極りが惡かつたが、思切つて例の品を呈した。大に喜ぶかと思ひの外、お糸さんは左して色を動かさず輕く禮を言つて、一寸包みを戴いて、膳と一緒に持つて行つて了つた。唯其切で、何だか餘り飽氣なかつた。

何時間經つたか、久らくすると、部屋の障子がスッと開いた。振向いて見ると、思ひがけずお糸さんが入口に蹲まつて、兩手を突いて先刻の禮を又言つてお辭儀をする。私は何となく嬉しかつた。お床を延べませうかといふから、敷つて呉れといふと、例の通り戸棚から夜具を出す時昨夜も今朝も手に掛けて知つてゐる筈の枕皮の汚に始めて氣が附いて、明日洗ひませうといふ。なに、洗濯屋に出すから好いと言つても、此樣な物を洗ふのは雜作もないといつて聽かなかつた。私は又嬉しくなつて、此樣な事なら最と早く敬意を表すれば好かつたと思つた。

お糸さんは床を敷つて了ふと、火鉢の側へ膝行り寄つて火を直しながら、

「本當に嘸御不自由でございませうねえ、皆氣の附かない者ばかりの寄合なんですから。どうぞ何なりと御遠慮なく仰有つて下さいまし。然し申しちや何ですけど、他のお客樣は隨分ッヶ〳〵お小言を仰しやいますけど、一番さん(私の事だ)は御遠慮深くッて何にも仰しやらないから、あゝいふお客樣は餘計氣を附けて上げなきや不好。本當にお客樣が皆一番さんのやうだと、下宿屋も如何樣に助かるか知れないッてね、始終下でもお噂を申して居るンでございますよ……」

無論半襟二掛の効能とは迂濶の私にも知れた。平生の私の主義から言へば、お糸さんは卑劣だと謂はなければならんのに、何故だか私は左程にも思はないで、唯お糸さんの媚びて呉れるのが嬉しかつた。

小女がバタ〳〵と駈けて來て、卒然障子をガラッと開けて、

「あの八番さんで、御用が濟んだら、お糸さんに入らッしやいッて。」

「何だい？」

小女が生意氣になけ無しの鼻を指して、

「これ……」

「さう。」

お糸さんは挨拶も匆々に私の部屋を出て行つたが、ッイ其處らで立止つた樣子で、

「今お歸り？　大變お緩りでしたね。」

歸つて來たのは隣の俗物らしく、其聲で何だか言ふと、又お糸さんの聲で、

「あら、本當？　本當に買つて來て下すつたの？　まあ、嬉しいこと！　だから、貴方は實が有るッていふンだよ……」

してみると、お糸さんに對つて敬意を表するのは私ばかりでないと見える。

五十六

私がお糸さんに接近する目的は人生研究の爲で、表面上性慾問題とは關係はなかつた。が、お糸さ

んも活物私も死んだ思想に捉はれてゐたけれど、矢張活物だ。活物同志が生きた世界で顔を合せれば、直ぐ其處に人生の諸要素が相轢してハズミといふ物を生ずる。即ち勢だ。此勢を制する人でなければ人間一疋の通用が出來ぬけれど、私の樣な斗筲輩になると、直ぐ其勢ひに制せられて了つて、吾は吾の吾でなくなつて、勢の自由になる吾、勢の吾になつて了ふ。困つたものだが、仕方がない。私は人生研究の爲お糸さんに接近しようと思つたのだけれど、接近しようとすると、忽ち妙なハメになつて、二番さんだの八番さんだのといふ番號附けになつてる俗物共の競爭圏内に不覺捲込まれて了つた。又捲込まれざるを得ないのは、半襟二掛ばかりの効能ぢや三日と持たない。直消えて又元の木阿彌になる。二掛の半襟は惜しくはないが、もう斯うなると、勢に乘せられた吾が承知せぬ。憤然となつて二日二晩も考へた末、又一策を案じ出して、今度は晝のお糸さんの手隙の時に、何とか好加減な口實を設けて酒を命じた。酒を命ずれだお糸さんが持つて來る、お糸さんが持つて來れば、些との間ならお酌もして呉れる、お糸さんのお酌で、酒を飲んで醉へば、私にだつて些とは言ふ事も言へて打解けられる。思ふ事を言つて打解けて如何する氣だつたか、それは不分明だつたけれども、免に角打解けたかつたので、酒を命じたら、果してお糸さんが來て呉れて、思ふ通りになつた。

「ぢや、何ですね、」と未だ一本も明けぬ中から、私は眞紅になつて、「貴女は一杯喰はされたのだ。」

「大喰はされ！」とお糸さんは烟管を火鉢の角でポンと叩いて、「正可女房子の有る人た思ひませんで

したもの。好加減なチヤラツポコを眞に受けて、仙臺くんだり迄引張り出されて、獨身でない事が知れた時には、如何樣に口惜しかつたでせう。寧そ其時歸ッ了や好かつたんですけど、歸つて來たつて、家が有るンぢ有りませんしさ、人の厄介になつて苦勞する位なら、日蔭者でもまだ其方が勝かと思つたもんですからね、馬鹿さねえ、貴方、言ひなり次第になつて半歲も然うして居たんですよ。さうすると私の事がいつかお神さんに知れて、死ぬの生きるのといふ騷ぎが起つてみると、元々養子の事だから……」

「養子なんですか？」

「えゝ、養子なんですとも。養子だから、ほら、私を棄てなきや、看す〳〵何萬といふ身代を棒に振らなきやならんでせう？　ですから、出るの引くのと揉め返した擧句が、詰る所私はお金で如何にでもなると見括つたんでせう、人を入れて別話を持出したから、私やもう踏んだり蹶たりの目に逢はされて、口惜しくッて〳〵、何だかもうカツと逆上せッ了つて、本當に一時は井戸川へでも飛込ん了はうかと思ひましたよ。」

「御尤です。」

「ですけど、私が死んぢまや、幸手屋の血統は絶えるでせう？　それでは御先祖樣にも、又ね、死んだ親達にも濟まないと思つて、無分別は出しませんでしたけど、餘まり口惜しかつたから、お金も出

さうと言つたのを、そんなお金なんぞに目をくれるお糸さんぢやない何か言つてね、一文も貰はずに、頭の物なんか賣飛ばして、其を持つて歸つて來たは好かつたけど、其代り今ぢやスッテン〳〵で、髮結錢も伯母さん濟みませんがといふ始末ですのさ。餘程馬鹿ですわねえ。」

「いや。面白い氣象だ。」

「ですから、私は、貴方の前ですけど、もう男は懲々。そりやあね、稀には旦那のやうな優しい親切なお方も有りますけど、どうも私のやうな者の相手になる者ですもの、皆其樣な薄情な碌でなしばかしですわ。」

「いや、御尤もです。」

「まあ、自分の勝手なお饒舌ばかりしてゐて、お燗が全然冷め了つた。一寸直して參りませう。」

「御尤もです……」

五十七

お糸さんがお燗を直しに起つた隙に、爰で一寸國元の事情を吹聽して置く。嘗て私が學校を除籍せられた時、父が學資の仕送りを絶つたのは、斯うもしたら或は歸つて來るかと思つたからだ。ところが、私が如何にか斯うにか取續いて歸らなかつたので、兩親は獨息子を玉なしにしたやうに歎いて、

父の白髮も其時分僅の間に減切り殖えたと云ふ。伯父が見兼ねて、態々上京して、もう小說家になるなとは言はぬ、唯是非一度歸省して兩親の心を安めろと懇に諭して吳れた。さう言はれて見ると、夫でもとも言兼ねて、私は其時伯父に連れられて久振で歸省したが、父の面を見るより、心配を掛けた詫をする所か、卒然先づ文學の貴い所以を說いて聽かせて、私は墮落したのぢやない、文學に於て向上の一路を看出したのだ、墮落なんぞと思はれては心外だと喰つて懸ると、氣の練れた父は敢て逆はずに、昔者の己には然ういふ六かしい事は分らぬから、己はもう何にも言はぬ、お前の思ふ通りにしろ。だが、京京へ出てから二年許りの間に遣つた金は、地所を抵當に入れて借りた金だ。己は無學で働きがないから、己の手では到底も返せない。何とかしてお前の手で償却の道を立てゝ吳れ。之を償却せん時には、先祖の遺產を人手に渡さねばならぬ。それではどうもお位牌に對しても濟まぬから、己は始終其れが苦になつての……と眼を瞬かれた時には、私も妙な心持がした。で、何にも當はなかつたけれど、其式の負債は直き償却して見せるやうに廣言を吐き、月々なし崩しの金額をも極めて再び上京したが、上京して見ると、物價騰貴に附き下宿料は上る、小遣も餘計に入る、負債償却の約束は不知空約束になつて了つた。その稍實行の緒に就いたのは當り作が出來てからで、夫からは原稿料の手に入る度に多少の送金はしてゐたけれど、夫とても殘らず負債の方へ入れて了ふので、少しも家計の足しにはならなかつた。父は疾うに縣廳の方も罷められて、其後一寸學校の事務員のやうな事

もしてゐたが、それも直き又罷められて全く收入の道が絶えたので、父も母も近頃は心細さの餘り、遂に内職に觀世撚を撚り出したと云ふ。私は其頃新進作家で多少賣出した頃だつたから急に氣が大きくなり、それに天性の見榮坊も手傳つて、矢張某大家のやうに、假令襟垢の附いた物にもせよ、兎に角羽織も着物も對の飛白の銘仙物で、縮緬の兵兒帶をグル〳〵卷にし、左程惡くもない眼に金緣眼鏡を掛け、原稿料を手に入れた時だけ、急に下宿の飯を不味がつて、晩飯には近所の西洋料理へ行き、髭の先に麥酒の泡を着けて、萬丈の氣焔を吐いてゐたのだから、兩親が内職に觀世撚を撚るといふ手紙を覽た時には、又一寸妙な心持がした。若し此事が夫の六號活字子の耳に入つて、雪江の親達は觀世撚を撚つてるさうだ、一寸珍だね、なぞと素破拔かれては餘り名譽でないと、名譽心も手傳つて、急に始末氣を出し、夫からは原稿料が手に入ると、直ぐ多少餘分の送金もして、他の物を撚つても、觀世撚だけは撚つて呉れるなと言つて遣つた。

で、此時もつい二三日前に聊かばかり原稿料が入つた。先月は都合が惡くて送金しなかつたから、責て此内十圓だけは送らうと、紙入の奥に別に紙に包んで入れて置いたのが、お糸さんの事や何や角やに取紛れてまだ其儘になつてゐる。それをお糸さんの身上話を聽くとふと想ひ出して、國への送金は此次に延期し、寧そ之をお糸さんに呈して又敬意を表さうかと思つた。が、何だか其では聊か相濟まぬやうな氣もして何となく躊躇せられる一方で、矢張何だか切に……かう……敬意を表したくて耐

らない。で、お糸さんが軈てお燗を直して持つて來て、さ、旦那、お熱い所を、と德利の口を向けた時だつた、私は到頭耐らなくなつて、しかし何故だか節儉して、十圓の半額金五圓也を呈して、不覺又敬意を表して了つた。

五十八

お糸さんに敬意を表して見ると、もう半端になつたから、國へ送金は見合せてゐると、母から催促の手紙が來た。其中に何だか父が加減が惡くて醫者に掛つてゐるとかで、物入が多くて困るとかいふやうな事も書いてあつたが、例の愚癡だと思つて、其内に都合して送ると返事を出して置いた。其時は眞に其積りで强ち氣休めではなかつたのだが、彼此取紛れて不覺其儘になつてゐる一方では、五圓の金は半襟二掛より効能があつた、夫以來お糸さんが非常に優待して呉れるが嬉しい。追々馴染も重なつて常談の一つも言ふやうになる。もう少しで如何にかなりさうに思へるけれど、何時迄經つても如何にもならんので、少し焦れ出して、又欲しさうな物を買つて遣つたり、連出して甘い物を食べさせたり種々してみたが、矢張同じ事で手が出せない。お糸さんといふ人は減多に手を出せば、屹度甚い恥を搔かすけれど、一度手に入れたら、命懸けになる女だと、何故だか私は獨りで極めてゐたから、危險で手が出せなかつたが、傍から觀れば、もう餘程妙に見えたと見えて、他の客はワイ〳〵いつて

騒ぐ。下女迄が私の部屋を覗込んでお糸さんが見えないと、奥様は、なぞといつて調戯ふやうになる。かうなると、お神さんも目に餘つて、或時何だか厭な事をお糸さんに言つたとかで、お糸さんが憤つてゐた事もある。私は何だが面白いやうな焦心たいやうな妙な心持がする。それで夢中になつて金ばかり遣つてゐたから、一度申譯に聊かばかり送金した限で、不覺國へは無沙汰になつてゐる中に、父の病氣が矢張好くないとて母からは又送金を求めて來る。遂に伯父からも注意が來た。其時だけは私も少し氣が附いて、急いで、書掛けた小説を書上げて若干かの原稿料を受取つたから、明日は早退送金しようと思つてゐた晩に、お糸さんが切りに新富座の當り狂言の噂をして觀たさうな事を言ふ。と私も何だか觀せてやり度くなつて、芝居だつて觀やうに由つて幾何掛るもんかと、不覺口を滑らせると、お糸さんが例になく大層喜んだ。お糸さんは何を貰つても、澄して禮を言つて、其場では左程嬉しさうな面もせぬ女だつたが、此時ばかりは餘程嬉しかつたと見えて、大層喜んだ。

もう後悔しても取反しが附かなくなつて、止むことを得ず好加減な口實を設けて別々に内を出て、新富座を見物した其夜の事。お糸さんを一足先へ還し、私一人後から漫然と下宿へ歸つたのは、夜の彼此十二時近くであつたらう。もう雨戸を引寄せて、入口の大ランプも消してあつた。跡仕舞をしてゐるお竹が睡たさう小聲でお歸ンなさいと言つたが、お糸さんの姿は見えなかつた。

部屋へ來て見ると、ランプを細くして既う床も敷つてある。私は桝でお糸さんと膝を列べてゐる時

から妙に氣が燥つて、今夜こそは日頃の望をと、芝居も碌に身に染みなかつた。時々ふと氣が變つて、此樣な女に關係しては結果が面白くあるまいと危ぶむ。其側から直ぐ又今夜こそは是が非でもといふ氣になる。で、今我部屋へ來て床の敷つてあるのを見ると、もう氣も坐ろになつて、餘の事なぞは考へられん。今にも屹度來るに違ひない、來たら……と其事ばかりを考へながら、急いで寢衣に着易へて床へ入らうとして、ふと机の上を見ると、手紙が載せてある。手に取つて見ると、國からの手紙だ。心は狂つてゐても、流石に父の事は氣になるから、手早く封を切つて讀むと、まづ驚いた。

五十九

此手紙で見ると、大した事ではないと思つてゐた父の病氣は其後甚だ宜しくない。まだ醫者が見放したのでは無いけれど、自分は最う到底も直らぬと覺悟して、切りに私に會ひたがつてゐるさうだ。此手紙御覽次第直樣御歸國待入申候と母の手で狼狽へた文體だ。

私は孝行だの何だのといふ事を、道學先生の世迷言のやうに思つて、鼻で遇らつてゐた男だが、不思議な事には、此時此手紙を讀んで吃驚すると同時に、今夜こそはと奮り立つてゐた氣が忽ち萎えて、父母が切りに懷かしく、何だか泣きたいやうな氣持になつて、儘になるなら直ぐにも發ちたかつたが、かうなると當惑するのは、今日の觀劇の費用が思つたよりも嵩んで、元より幾何もなかつた懷中が甚

だ輕くなつてゐる事だ。父が病氣に罹つてから、度々送金を迫られても、不覺怠つてゐたのだから、家の都合も嘸ぞ悪からう。今度こそは多少の金を持つて歸らんでは、如何に親子の間でも、母に對しても面目ない。といつてお糸さんに迷つてから、散々無理を仕盡した今日此頃、もう一文の融通の餘地もなく、又餘裕もない。明日の朝二番か三番で是非發たなきやならんがと、當惑の眼を閉ぢて床の中で凝と考へてゐると、スウと音を偸んで障子を明ける者が有るから、眼を開いて見ると、先刻まで待憧れて今は忘れてゐるお糸さんだ。竊と覗込んで、小聲で、「もうお休みなすつたの？」といひながら、中へ入つて又竊と跡を閉めたのは、十二時過で遠慮するのだつたかも知れぬが、私は一寸妙に思つた。

「どうも難有うございました、」とのめるやうに私の床の側に坐りながら、「好かつたねえ」と私と顔を看合せて微笑した。

今日は風呂日だから、歸つてから湯へ入つたと見えて、目立たぬ程に薄りと化粧つてゐる。寢衣か何か給に白地の浴衣を襲ねたのを着て、扱をグル〳〵卷にし、上に不斷の羽織をはおつてゐる秩序ない姿も艶めかしくて、此人には調和が好い。

「一本頂戴よ、」といひながら、枕もとの机の上の卷煙草を取らうとして、袂を啣へて及腰に手を伸ばす時、仰向きに臥てゐる私の眼の前に、雪をあざむく二の腕が近々と見えて、懷かしい女の香が芬と

する。

「何だかまだ芝居に居るやうな氣がして相濟まないけど、」とお糸さんが煙草を吸附けてフウと煙を吹きながら、「伯母さんの小言が臺詞に聞えたり何かして、如何なに可笑しいでせう、」と微笑した所は、美しいといふよりは仇ッぽくて、男殺しといふのは斯ういふ人を謂ふのかと思はれた。（以下書肆の希望に依つて抹殺する）

六十

翌朝は夙く發つ積りだつたが、發てなくなつた。尾籠な事には自ら尾籠な法則が有るから、既に一種の關係が成立つた以上は、女に多少の手當をして行かなきやならん——と、さ、私は思はざるを得なかつた。見榮坊だから、金が無くても金の有る風をして、紙入を叩いて遣つて了ふと、もう汽車賃も殘らない。なに、父はまだ危篤といふのぢやなし、一時間や二時間發つのが後れたつて仔細は無からうと自分で勝手な理窟を附けて、女には内々で朝から金策に歩いたが、出來なかつた。晝前に一寸下宿へ歸ると、留守に國から電報が着いてゐた。胸を轟かして、狼狽てゝ封を切つて見ると、「父危篤直戻れ」だ。之を讀むと、私はわな〳〵と震へ出した。卒然下宿を飛出して、血眼になつて奔走して、辛うじて聊かの金を手に入れたから、下宿へも歸らず、其足で直ぐ東京を發つて、汽車の幾時間を藻

搔き通して、國へ着いたのは其晩八時頃であつた。

停車場で車を僦つて家へ急ぐ途中も、何だか氣が燥つて、何事も落着いて考へられなかつたが、片々の思想の頭の中で狂ひ廻る中でも、唯、息のある中に一目父に逢ひたい逢ひたいと其ばかりを祈つてゐた。時々ふッと既う駄目だらうと思ふと、錐でも刺されたやうに、急に胸がキリ〳〵と痛む。何とも言へず苦しい。馴染の町々を通つても、何處を如何車が走るのか分らない。唯、車上で身を揉んで、無暗に車夫を急立てた。車夫が何だか腹を立てゝ言つたが、何を言つてるのか、分らない。唯無暗に急立てるばかりだ。

漸くの想で家へ着くと、狼狽てゝ車を飛降りて、車賃も拂つたか、拂はなかつたか、卒然門内へ駈込んで格子戸を引明けると、パッと燈火が射して、其光の中に人影がチラ〳〵と見え、家内は何だか取込んでゐて話聲が譟然と聞える中で、誰だか作さん——私の名だ——作さんが着いた、作さんが、と喚く。何處からか母が駈出して來たから、私が卒然、「阿父さんは？……」と如何やら人の聲のやうな緻嗄聲で聞くと、母は妙な面をしたが、「到頭不好つたよ……」といふより早く泣き出した。私はハッと思ふと、氣が遠くなつて茫然として母が袖を顏に當てゝ泣くのを視てゐたが、ふと何だか胸が一杯になつて泣かうとしたら、「まあ、彼方へお出でなさい、」と誰だか袖を引張るから見ると從弟だ。何處へ何しに行くのだか、分つてゐるやうな、分つてゐないやうな、變な顰梅だつたが、私は何だか

分つてる積で、從弟の跟に從いて行くと、人が大勢車座になつてゐる明るい座敷へ來た。と、急に私は何か母に聞きたい事が有るのを忘れてゐたやうな氣持がして、母は如何したらうと後を振向く途端に、「おゝ、作か、」といふ聲が俄に寂然となつた座敷の中に聞えたから、又此方を振向くと、其處に伯父が居るやうだ。夫から私は其處へ坐つて、何でも漫に其處に居る人達に辭儀をしたやうだつたが、其中に如何いふ譯だつたか、伯父の側へ行く事になつて、側へ行くと、伯父が「阿父さんも到頭此樣になられた、」といひながら、側に臥てゐる人の面に掛けた白い物を取除けたから、見ると、臥て居る人は父で、何だか目を瞑つてゐる。私は其を凝と視てゐた。すると、何時の間にか母が側へ來てゐて、泣聲で、「息を引取る迄ね、お前に逢ひたがりなすつてね……」といふのが聞えた。私はふッと目が覺めたやうな心持がした。あゝ、父は死んでゐる……つい其處に死んでゐる……骨と皮ばかりの痩果てた其死顏がつい目の前に見える。之を見ると、私は卒然として、「あゝ濟なかつた……」と思つた。此刹那に理窟はない、非凡も、平凡も、何もない。文士といふ肩書の無い白地の尋常の人間に戻り、あゝ、濟なかつた、といふ一念になり、我を忘れ、世間を忘れて、私は……私は遂に泣いた……

六十一

後で段々聞いて見ると、父は殆ど碌な療養もせずに死んだのだ。事情を知らん人は壽命だから仕方

がないと言つて慰めて呉れたけれど、私には如何しても然う思へなかつた。全く私の不心得で、まだ三年や四年は生延びられる所をむざ／＼殺して了つたやうに思はれてならなかつたから、深く年來の不孝を悔いて、責めて跡に殘つた母だけには最う苦勞を掛けたくないと思ひ、父の葬式を濟ませてから、母を奉じて上京して、東京で一戸を成した。もう斯う心機が一轉しては、彼樣な女に關係してゐる氣も無くなつたから、女とは金で手を切つて了つた。其時女の素性を初めて知つたが、當人の言ふ所は皆虚構だつた。しかし其樣な事を爰で言ふ必要もない。止めて置く。

で、生來始めて稍眞面目になつて再び筆硯に親しまうとしたが、もう小說も何だか馬鹿らしくて些とも書けない。泰西の名家の作を讀んで見ても、矢張馬鹿らしい。此樣な心持で碌な物が出來る筈もないから評判も段々落ちる、生活も困難になつて來る。もう私もシュン外れだ。此處らが思ひ切り時だらうと思つて、或年意を決して文壇を去つて、人の周旋で今の役所へ勤めるやうになつたが、其後母の希望を容れて、妻を迎へ、子を生ませると、間もなく母も父の跡を追つて彼世へ逝つた。

これが私の今日迄の經歴だ。

つく／＼考へて見ると、夢のやうな一生だつた。私は元來實感の人で、始終實感で心を苛めてゐないと空疎になる男だ。實感で試驗をせんと自分の性質すら能く分らぬ男だ。それだのに早くから文學に陷つて始終空想の中に漬つてゐたから、人間がふやけて、秩序がなくなつて、眞面目になれなかつ

たのだ。今稍眞面目になれ得たと思ふのは、全く父の死んだ時に經驗した痛切な實感のお庇で、即ち亡父の賜だと思ふ。彼實感を經驗しなかつたら、私は何處迄だらけて行つたか、分らない。

文學は一體如何いふ物だか、私には分らない。人の噂で聞くと、どうやら空想を生命とするものゝやうに思はれる。文學上の作品に現はれる自然や人生は、假令へば作家が直接に人生に觸れ自然に觸れて實感し得た所にもせよ、空想で之を再現させるからは、本物でない。寫し得て眞に逼つても、本物でない。本物の影で、空想の分子を含む。之に接して得る所の感じには何處にか遊びがある、即ち文學上の作品にはどうしても遊戲分子を含む。現實の人生や自然に接したやうな切實な感じの得られんのは當然だ。私が始終斯ういふ感じにばかり漬つてゐて、實感で心を引締めなかつたから、人間がだらけて、ふやけて、やくざが愈々やくざになつたのは、或は必然の結果ではなかつたか？ 然らば高尙な純正な文學でも、こればかりに溺れては人の子も戕はれる。況んやだらしのない人間が、だらしのない物を書いてゐるのが古今の文壇の、、、

二葉亭が申します。此稿本は夜店を冷かして手に入れたものでございますが、跡は千切れてございません。一寸お話中に電話が切れた恰好でございますが、致方がございません。

―終―

平凡

著作者　二葉亭四迷
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町

大正四年二月十六日印刷
大正四年二月十八日發行
昭和八年九月二日縮刷發行

（定價十錢）

發行所　新潮社
東京市牛込區矢來町七十一番地
電話牛込（八〇五番　八〇八番　八〇六番　八〇九番　八〇七番）
振替東京一七四二番

東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

新潮文庫

郵送料 ▼二百四十頁まで……四錢 ▼四百二十頁まで……六錢 ▼六百頁まで……八錢

エツネルフゲ	初戀	192頁	25錢	
トトルイス	人生論	174頁	20錢	
トトルイス	性慾論	120頁	15錢	
エリオツ	サイラス・マアナー	296頁	35錢	
デユマ	モンテ・クリスト	1卷 390 2卷 400 3卷 370 各 45錢		
山本有三	小說 風	458頁	55錢	
吉川英治	小說 雲霧閻魔帳	218頁	30錢	
芥川龍之介	小說 傀儡師	216頁	30錢	
久米正雄	小說 學生時代	300頁	45錢	
吉田絃二郎	小說 無限	456頁	55錢	
島崎藤村	小說 春	294頁	40錢	
菊池寛	小說 青春圖會	290頁	40錢	
櫻井忠溫	戰記 肉彈	210頁	30錢	
生田春月	詩集 靈魂の秋	250頁	35錢	
ハイネ	ハイネ詩集	200頁	30錢	
モンラオ	夜ひらく	196頁	30錢	
シエピアク	ハムレット	204頁	30錢	
ボッカチオ	デカメロン（全三册）	各册 420頁 各 55錢		
ルソオ	懺悔錄（上）（下）	（上）400 50錢 （下）566 60錢		
北原白秋	白秋詩歌選	146頁	20錢	
千葉龜雄	現代世界文學概觀	120頁	15錢	
木村毅	小說研究十二講	320頁	35錢	
相田隆太郎	解說 テクノクラシイ	140頁	20錢	
近藤浩一路	漫畫 坊つちやん	208頁	25錢	
近藤浩一路	漫畫 吾輩は猫である	200頁	25錢	
ゾラ	ナナ（上・下）	上 40錢 下 30錢		
モオパサン	女の一生	354頁	40錢	
エツネルフゲ	初戀	192頁	25錢	
トトルイス	人生論	174頁	20錢	
島田清次郎	小說 地上（第一部・第二部）	(1) 302 35錢 (2) 354 45錢		
小林多喜二	小說 蟹工船・不在地主	246頁	30錢	
吉田絃二郎	感想 小鳥の來る日	277頁	30錢	
吉江喬松	研究 佛蘭西文學概觀	286頁	30錢	
下村千秋	小說 天國の記錄 街のルンペン	200頁	25錢	
江戸川亂歩	小說 パノラマ島奇談	146頁	20錢	
芥川龍之介	小說 羅生門	162頁	20錢	
菊池寛	小說 勝敗	420頁	45錢	
島崎藤村	小說 家（上・下）	上234頁 下274頁 各 30錢		

630
8

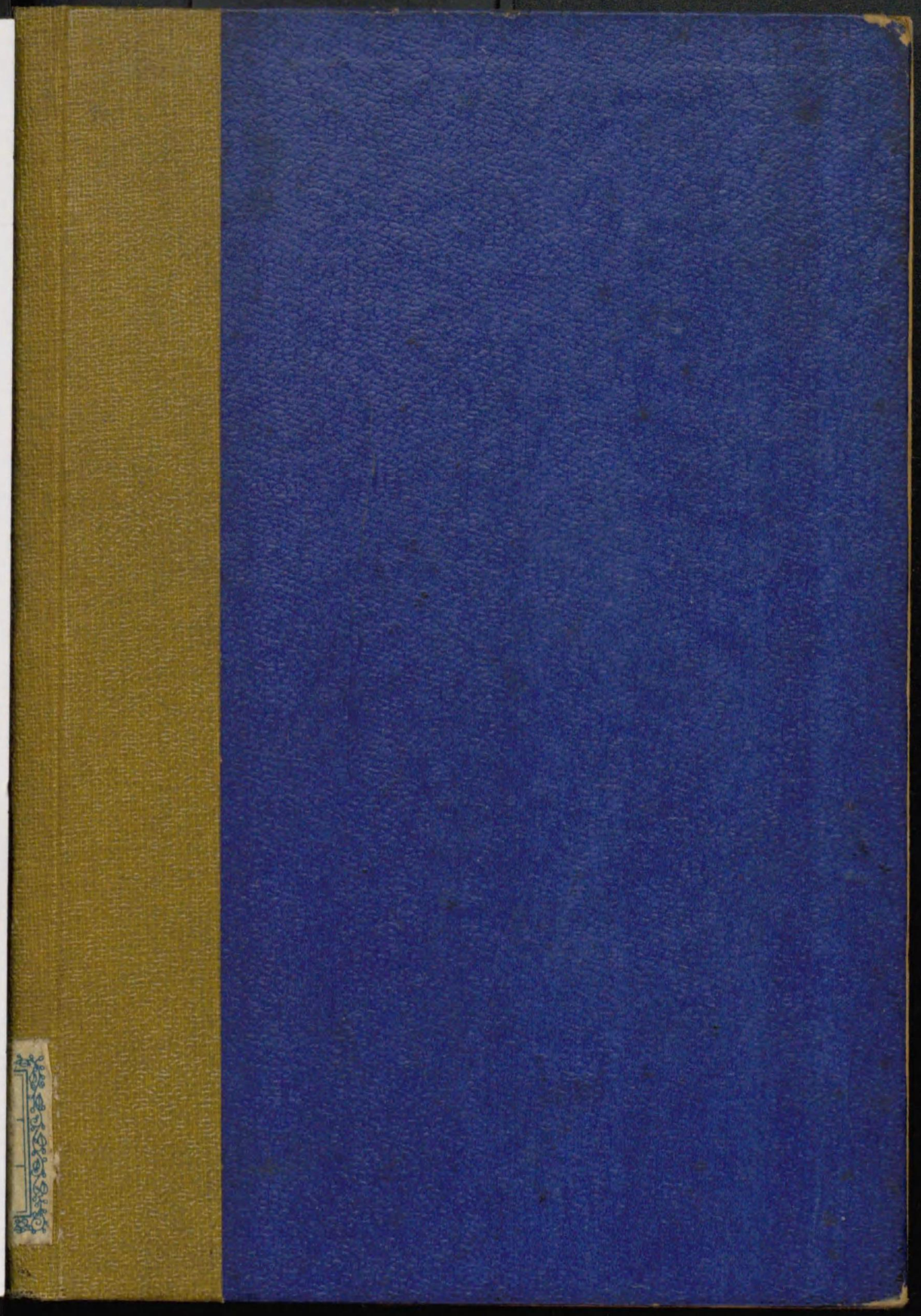
島崎・蒲原四氏	明治詩歌選	138頁	20錢
中村武羅夫	小説 蒼白き薔薇	418頁	50錢
加藤武雄	小説 久遠の像	360頁	45錢
吉川英治	小説 貝殻一平 (上)(下)	上 55錢 下 45錢	
甲賀三郎	小説 犯罪發明者	206頁	30錢
岡本一平	漫畫漫文 人の一生	318頁	40錢
ゲエテ	ゲエテ詩集	170頁	25錢
ハデイア	テス (上)(下)	400頁	各 50錢
三宅やす子	小説 偽れる未亡人	286頁	40錢
久米正雄	小説 破船	500頁	60錢
二葉亭四迷	小説 平凡	148頁	20錢
島田清次郎	小説 地上 (地に叛くもの)	354頁	45錢
水野廣徳	戰記 此一戰	244頁	35錢
北原白秋	感想 雀の生活	228頁	35錢
ツルゲエネフ	父と子	362頁	45錢
シエクスピヤ	ロミオとジュリエット	174頁	25錢
ドストエフスキー	白痴 (1)(2)	(1) 45錢 (2) 40錢	
フロベエル	ボヴリイ夫人	512頁	60錢
デユマフイス	椿姫	344頁	45錢

以下續々刊行

7

15

630
8



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black